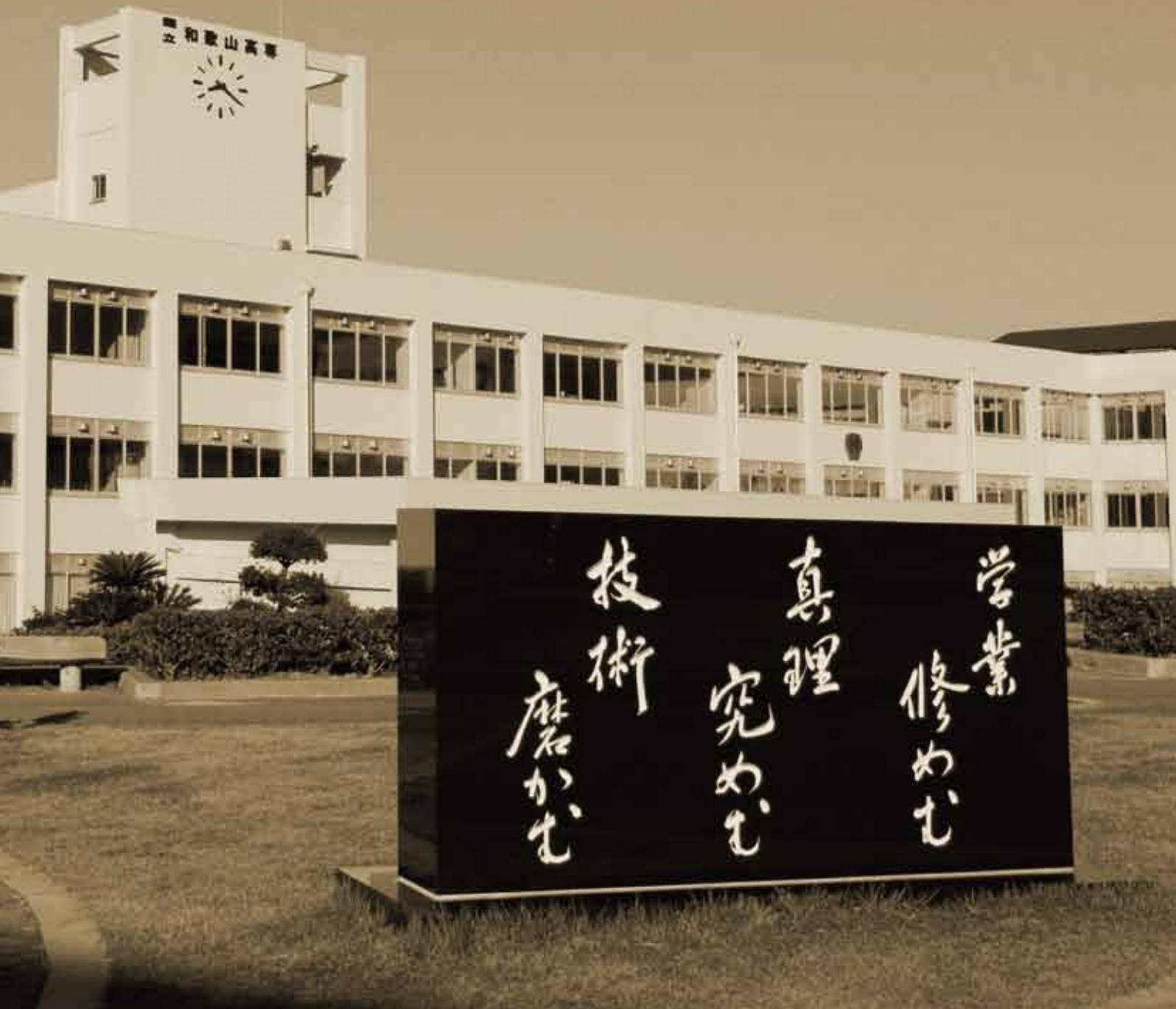


50th ANNIVERSARY

独立行政法人 国立高等専門学校機構 和歌山工業高等専門学校

National Institute of Technology, Wakayama College

1964 → 2014



ご挨拶・祝辞

2014 創立 50周年
紀らめく和高専

五十年の経験を

明日への希望に

和歌山高専



和歌山高専50周年を迎えて



校長
堀江 振一郎

和歌山県の中南部にある御坊市に設立された和歌山高専は本年、創設50周年を迎えました。

この50年の間に本校から6,340名の学生が卒業しています。工学を学んだエンジニア、技術のわかる社会人として、地元和歌山県のみならず、京阪神・中京・京浜などの都市工業地域や、さらには、世界各国にある日本企業の進出先で、ひとりひとりが努力を続け、活躍の機会を得ることで、多くは幸せな生活を送っていると考えます。

日本の近代教育史の草創期、明治政府は学制発布に当たり、第一に「学問は身を立つるの財本」と、教育はまず自分の為にあるとの原則を示し、第二に基本は職業技術を始めとした「実学」の教育に据え、第三に「邑（むら）に不学の戸なく、家に不学の者なし」の国民皆学を制度目標としました。実学を通して都市・農村を問わず全ての国民の立身出世を実現し、世界の近代産業社会に仲間入りしようとした明治新政府の明快で骨太の政策と、過去50年の和歌山高専の歩みの基盤にある実学教育の哲学には相通じるものを感じます。

第2次大戦後の教育改革では、学校制度は6-3-3-4製の単線型に改められました。さらに約15年を経た昭和37（1962）年に高等専門学校が加わり、義務教育を終えた後に5年制の技術者養成を接続した新たな6-3-5制を加えた複線型の学校制度が始まりました。和歌山高専の創設された昭和39（1964）年は、東海道新幹線が開業し、東京オリンピックが開催された年で、日本の高度経済成長の起点に当たるような年と言えます。急激な右肩上がりの経済成長を支える実践的で専門的な知識を持つ20歳の技術者として、本校第1期卒業生は昭和44（1969）年3月にこの学舎を巣立っています。

50年間の動きを概観すると、本校の第8期生が卒業した年から、豊橋と長岡の技術科学大学が高専卒業生進学の本幹大学として創設され、他の国公立大学の工学部等の第3学年編入と合わせ、卒業生の進学機会がぐっと広がりました。第34期生が出た平成14（2002）年度には、和歌山高専内に専攻科メカトロニクス工学専攻と同エコシステム工学専攻が新設され、地元専攻科での学士号の取得への道ができました。また、学校の運営機構が、平成16（2004）年度に、独立行政法人国立高等専門学校機構による全国の国立高専55校（当時）の運営に変わりました。

地域と共に歩む和歌山高専では、地域産業界の動向や要請を組み入れた特色ある地域貢献をめざして、平成7（1995）年に総合技術教育研究センターを新設し、さらに8年後に現在の地域共同テクノセンターとしての運営に移行させています。また、国際交流については、昭和63（1988）年から留学生の受入を開始し、平成16（2004）年度からは、中国上海電機学院との短期留学学生交流を毎年続けており、和歌山県内でも特色ある

国際活動として、その継続が評価されています。また、平成 20（2008）年に開設したロボット教育センターは、地元で毎年 12 月に開かれる「きのくにロボットフェスティバル」の運営に重要な役割を果たすとともに、NHK 高専ロボコンにおいてこれまで 3 度の全国準優勝を誇る本校ロボコンチームへの支援も行っています。

和歌山県御坊市の人口 2 万 5 千人は、全国の工業系の高専、国公立 57 校・キャンパスの所在する市区の中で最少です。しかし、学生は広く県内一円、さらに県境を越えて大阪府、奈良県、三重県からも入学していますし、4 学科の入学定員に対して、現在でも 1.6 倍の志願者の中から、優秀な入学者を選抜できています。県都和歌山市や大阪府隣接地域に教育機関が偏って存在する中で、60 キロ南の御坊市に国立高専を設置し、高等教育の学習機会を少しでも広汎に、県下あまねく保障しようとした国策は、時代を経ても高く評価すべきと考えます。また、10 万㎡のキャンパスは、東は歴史ある熊野古道紀伊路に面し、西は紀伊水道に面していますが、防災上も大変安全な標高 10 数メートルの堅い岩盤の高台を、校地として準備下さった県や市の関係者にも、大きな恩義を感じます。過去半世紀の教育研究活動を通じて、この地域の振興にどこまで和歌山高専が貢献できたか、この 50 年誌の記述を通じて検証できればと考えます。

この 50 年の間、幸いにも高専教育に対する社会の評価は高く、卒業生の進路については、常に 10 倍を超える高い求人倍率のもと、就職希望者のほぼ全員の就職が実現するとともに、進学者もその多くが恵まれた研究環境のある国公立の大学や専攻科に進学できています。創立 50 周年の里程に立って、創造的で実践的な技術者の養成という教育目標の下、学校の主役である学生が、次代を担い国際レベルで大いに活躍できる力を身に付けられるよう、教職員、同窓生、後援会、地域産業界、関係教育界始め、幅広く関係する皆さまと力を合わせて、次の 50 年の歩みを間違いのない方向へ進めていきたいと考えます。

末筆ながら、この 50 年の間に学校の教育・研究にあたってこられた多くの先生方、事務・技術の職員の皆様の献身的な努力に謝意と敬意を表しますとともに、学校を支えていただいた関係の皆様に広く感謝を申し上げます。そして、卒業生・在学生の皆様の一層の健勝と活躍をお祈りします。

和歌山工業高等専門学校創立50周年に寄せて



独立行政法人国立
高等専門学校機構
理事長

小畑 秀文

このたび、和歌山工業高等専門学校が創立 50 周年を迎えられますことは、国立高等専門学校機構として大きな喜びとするところです。

高等専門学校は、我が国における科学技術を支え、さらにその進展を促すために、しっかりとした学術的な基礎の上に、真の実践的な技術を身に付けた第一線の技術者の育成を目的として、昭和 37 年に創設されました。和歌山工業高等専門学校は、この趣旨に沿って昭和 39 年に設立された高等専門学校の一つです。

50 年の伝統を持つ和歌山工業高等専門学校（以下、和歌山高専）は、その人材育成や産官学連携活動で社会から高く評価されております。その理由の一つは特色ある「ものづくり教育」にあると言えます。実際の製品開発や生産現場での経験豊富な教員が多く、そこで行われる実践的な技術指導のレベルは非常に高いものがあります。その結果、卒業生はものづくりに必要な優れたセンスを身につけた実践的技術者として育ち、ものづくりを担う中核的技術者として社会で活躍して来ることができたと考えます。優れたものづくり教育の一つの証が全国高専ロボットコンテストでの好成績にあります。これはテレビ放映もされ、国民の注視する催しの一つです。各高専は全国大会への出場を目標に、まずは地区大会の突破を目指して多大な努力をしているところですが、和歌山高専は 9 年連続で全国大会に出場するなど、全国大会の常連校であり、「ものづくり教育」が結実している証であるといえます。また、和歌山高専が中心になって行っている年末恒例行事であるきのくにロボットフェスティバルも、次代を担う子供たちに、ロボットを通じてものづくりの楽しさを伝えることを目的にしたイベントであり、和歌山高専にふさわしい取り組みの一つと言えます。

和歌山高専は和歌山県中南部地域で唯一の高等教育機関であることから、地域からの期待には大きなものがあります。和歌山高専は御坊市とその周辺、および田辺市とその周辺にそれぞれ産官学技術交流会を立ち上げ、技術相談や共同研究を活発に推進してきており、地域に貢献する高専として地域の期待に長年応えてきていることにも敬意を表する次第です。

和歌山工業高等専門学校の教職員並びに学生の皆さんにおかれましては、この創立 50 周年を機に、これまでに築かれた優れた伝統を継承し、更にグローバルに活動する高専へと発展させ、その成果を世界に発信して行かれますよう、期待しております。

結びに、和歌山工業高等専門学校創立 50 周年の節目にあたり、ここに改めてお祝いを申し上げますと共に、関係の皆様のご尽力に対して心より御礼申し上げます。

和高専での6年間の思い出



第6代校長
興地 斐男

和歌山工業高等専門学校が創立 50 周年を迎えられたとの事、心からお喜び申し上げます。

高専の教育システムは日本ではユニークなので、その意味でも 50 年の長期にわたってこのシステムが存在する事自体、大変意味のある事であると私は考えています。

そこで、ここでは私が和高専に勤務していた（1997~2003 年）当時の事について思い出すままに綴ってみます。

30 数年前に私が大学に勤めていた時、高専の卒業生が私の属する大学に編入学してきました。そして私の研究室にも卒業研究のため配属されて来ました。その学生は非常に優秀で、その時初めて私は高専の存在を知りました。

その後調べてみると、他の研究室、他の学科に編入してきた高専卒の学生がおおむね優秀であるとの評判でした。その後私は和高専に就職して和高専の学生も優秀な人が多い事を知りました。そこでより深く高専生の事を知りたいと思い、卒業間際の 5 年生の諸君と週に一度ずつ 10 名位校長室に来てもらい話し合いました。どのグループも最初の 20~30 分位は仲々気楽に話をしてくれませんでした。その後は学内のいろいろな話をしてくれました。この学校の気にくわない事も率直に話してくれる学生も居り、私は大変嬉しく思いました。学生達はどの様に感じたかそれはともかくとして私自身は大変参考になる事も多く貴重な時間を過ごした思い出となっています。このように卒業間際の多くの学生達との話し合いの内容の中には私には経験した事のない事が多くあり時には身を乗り出して聞かせてもらった事もありました。

一方、先生達との話し合いは意見の合わない事もありました。私の質問に対する先生方の主張に理解できない点もあり納得のいかない事もあったのですが先生方から見れば私の意見が高専の存在の必然性にふれていないと感じて居られるなど思う事がありました。

同じ様な高等教育機関に勤務している高専の先生方と私の様にずっと大学の工学部に勤めていた者でなぜこうも考え方が基本的な所で異なる事があるのか不思議に感じていました。その原因の 1 つは高専の先生方は地域社会にとけ込む等、沢山こなしてゆかねばならない義務をもって居られ非常に過酷な勤務をこなさなければならない事だと知りました。そして先生方が行っておられる実学優先の教育が具体的にどの様に授業で行われているかを知りたい為に何人かの先生の授業に私も出席させて頂き、大変明解な授業がされている事もわかりました。そして同時に教育をする事の難しさも知りました。

以上が私が在職中に知り得た和高専の当時の状況です。50 周年を新たな出発点として現校長の堀江先生を中心に教職員学生の頑張りのもと和高専の増々の発展を念願して筆を置きます。

和歌山工業高等専門学校創立50周年に寄せて



第8代校長

荻澤 弘志

和歌山高専創立50周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

私が和歌山高専の校長をつとめたのは平成17年4月から21年3月までです。学校の現場は初めてであり、また、和歌山県にはそれまで縁がなく不安もありましたが、教職員の方々はもちろん学生・保護者、さらには地域の方々にも温かく迎えられ有意義かつ充実した4年間を過ごすことができました。東京に戻ってからも和歌山県は第二の故郷という思いがあり、和歌山県や和歌山高専の応援団のつもりでおります。

私が和歌山高専にお世話になった時期は、高専の独立行政法人化、認証評価システムの導入、JABEE（日本技術者教育認定機構）認定など学校改革が強力に進められた時期でした。初めてのことで作業は大変でしたが、和歌山高専は歴代の校長や教職員のご努力により改革を先取りする形でいろいろな措置が講じられており、内容的にはそれらを踏まえて対応することができました。今後、和歌山高専に対する期待や要求はますます強くなってくると思いますが、和歌山高専らしい技術者育成に特化したきめの細かい教育を一層推進していただきたいと思います。また、大学や教育委員会との連携協力協定の締結など外部との協力関係の推進や、校舎・学生寮の改修など教育環境の改善が進められたことも懐かしい思い出です。

私の在任中全国高専ロボコン2年連続準優勝という快挙に恵まれました。それまでの学生諸君や顧問の先生方のご努力が一気に花開いたという感じです。御坊市はもちろん和歌山県の多くの方々にも大変喜んでいただき、これを契機として毎年御坊市でロボットフェスティバルが行われるなどまちおこしにも貢献できました。その後も全国大会に毎年出場し好成績をあげロボコンの和歌山高専として名前を全国に轟かせていることを誇らしく思います。さらにひと頑張りし、ぜひ優勝してほしいと思います。

高専で仕事をしてみて改めて高専の良さ、高専教育のすばらしさ、そして地域の発展に不可欠の存在となっていることを認識しました。和歌山高専の果たす役割は今後ますます大きくなってくると思いますが、100周年に向けて和歌山高専のさらなる発展を祈念いたします。

祝 辞



上海電機学院 学長

夏 建国

和歌山工業高等専門学校：

欣闻贵校定于2014年11月29日举行建校五十周年庆典大会，谨向贵校致以最热烈的祝贺和最诚挚的敬意！

半世纪沧桑万变，五十载春华秋实，贵校始终与时俱进，开拓进取，在人才培养、科学研究、社会服务等方面取得了骄人的成绩，现已成为特色鲜明、多学科协调发展的国际化学校，培养了一大批技术与管理人才，为中日友好发展做出了重要贡献。

贵校是我校最早的海外合作院校之一，双方的合作与交流可以追溯到1999年。多年来，两校高层多次互访，并签署各类合作交流协议，为两校合作打下了良好的基础，两校历任领导之间也建立起深厚而真挚的感情。

自2003年我校派出第一批赴和歌山高专学生访问团至今，10年多来共派出11批共150人次赴贵校进行访学活动，而贵校也派出近10批学生来我校学习交流，两校学生互访团始终保持着良好的互动交流关系。

希望在未来，两校能够持续加深友谊、相互支持、密切交流，携手并肩，为两校师生搭建起更好的相互了解、相互交流、相互学习的平台而共同努力。

祝两校友谊地久天长！祝贵校庆典活动圆满成功！

上海电机学院 夏建国 二〇一四年七月

2014年11月29日、貴校が創立50周年を迎えられ、記念式典が挙行されますことは大変に喜ばしく、深く敬意を表しますとともに、心から御祝い申し上げます。

半世紀の歴史の流れの中で、貴校は常に時代に即して発展を繰り返し、進取・開拓の学風のもと、人材育成、科学研究、社会貢献などあらゆる方面で誇らしい功績を積み重ねてこられました。特に、多学科の調和を図る発展したグローバル高専として、多くの技術者を輩出することにより、中日の発展に非常に大きく貢献してこられました。

貴校は我校にとって、いち早く海外協定を締結した学校の一つであり、両校の協定及び交流は1999年にまで遡ることができます。長い年月の中で、両校は互いに訪問を重ね、様々な協定・交流プロジェクトに調印し、非常に協力的な関係を築いてまいりました。両校の歴代の校長ならびに教職員の間にも、真挚な関係と深い親しみの感情が根付いております。

2003年より、我校は貴校へ訪問団の派遣を開始し、この交流活動はこれまでに11回実施され、我校のおよそ150名の学生が貴校を訪問しました。貴校の学生も10回にわたり我校へ派遣され、双方向の国際交流を行ってまいりました。両校の訪問団は長年にわたり素晴らしい関係を発展させつつあります。

永く将来にわたって両校がこの友好関係を保ち、互いに助け合い、密接な交流を展開し、教師と学生のために理解を深め、さらなる飛躍に向けて、ともに努力してゆけることを、心から願ってやみません。

両校の友好がとこしえに変わらぬように。記念式典のご盛会を心から祈念いたします。

上海電機学院 夏建国 2014年7月

発刊を祝して



御坊市長
柏木 征夫

独立行政法人国立高等専門学校機構和歌山工業高等専門学校の創立 50 周年おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

和歌山工業高等専門学校は、豊かな人間性と国際性を備えた技術者の育成を目的に昭和 39 年本市に開校され、今日まで多くの学生が巣立ち、日本のみならず世界各国においても、ものづくり日本の技術者として活躍されています。

これもひとえに、歴代の校長先生をはじめ、教職員の皆様方のご尽力と学校運営各般にご協力いただいた保護者の皆様方のお力添えの賜と心から御礼を申し上げる次第であります。

和歌山工業高等専門学校が本市に開校されていることは、本市にとりましても「まちの魅力向上」や「まちづくり」に大いに貢献していただいているところであり、その一つとして、御坊市が進めている「御坊工業団地」や重要港湾「日高港」への企業誘致に和歌山工業高等専門学校の存在は大きな魅力になっております。

また、地域ネットワーク支援や公開講座、地域イベント等を通じて、小中高生にもものづくりへの関心をより一層高める取り組みをいただいているところではありますが、とりわけ、「きのくにロボットフェスティバル」の開催について、和歌山工業高等専門学校の皆様方には中心的な役割を担っていただいております。このフェスティバルが本市の年末恒例イベントとして定着し、全国規模に広がりを見せていることは、何より地域振興に大きな力となっています。

この他、近い将来発生が危惧されている「南海トラフ地震」に備え、地震津波対策や地域の防災力向上を図る防災対策について専門的な見地からご意見・ご助言をいただいていることは誠に心強く、本市が掲げる安全・安心なまちづくりの礎となるものと感謝申し上げます。

今後、さらに産官学の連携を強め、本市の発展に取り組んでまいります。そのために多くの優秀な人材を輩出されている貴校のお力添えが不可欠であると存じますので、一層のご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後に、創立 50 周年を機に独立行政法人国立高等専門学校機構和歌山工業高等専門学校がますます発展・飛躍されますことと、関係各位のご健勝とご多幸を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

今一度、歴史や過去をみつめ未来へと繋ぐ



後援会長

川島 昌之

本年度創立 50 周年を迎えられましたこと心よりお祝い申し上げます。

和歌山工業高等専門学校は昭和 39 年 4 月に開校されてから 50 年、長い年月様々な歴史を経て記念すべき本年度に至っていると思います。

長年にわたり学生の御指導をしていただいていた歴代の先生方や、学校運営の為に御尽力いただいた関係各所の方々、一言では言い表せない御苦労の積重ねにより記念すべき創立 50 周年を迎える事が出来たのだと思います。

また卒業第 1 期生の方々をはじめ社会で活躍されている歴代の卒業生、同窓会の皆様と歴代後援会会員の皆様、それぞれ同窓会活動、後援会活動を活発に行っていたら、この歴史ある和高専と共に、時には陰となり時には日向となり長年にわたり和高専発展の為に御尽力いただきました事、感謝と共に深くお礼申し上げます。

和高専の歴史についてすべての出来事を把握している訳ではございませんが、歴史や過去の出来事は人々にとってとても大切な事であると思います。

過去の出来事や様々な失敗に対し、根気良く諦めない人々が、研究と努力を積み重ねてきたからこそ、世界に誇る技術技能を持った平和な国へと発展し、今現在も未来に向け発展し続けていると思います。そして過去の出来事には様々なメッセージや問題を解決する為のヒントが隠れ潜んでいるといっても過言ではないでしょう。

しかし、失敗を糧に未来に向け、問題を解決し理想を現実化させて行く事はとても大変な事であると思います。

明確な目標と目的を持ち続け、時には今までの常識に逆らった方法で研究や実験を行う事となり、周りの人や世間から批判を受ける事も有ろうかと思えます。相当な知識と創造力、そして様々な困難を乗り越える為の精神が大切であると思います。和高専では専門的な知識や技術を学ぶ為、様々な課題に対し研究そして実験や体験をさせていただき、研究や実験をおとし困難に差し当たったとしても問題に対し冷静な判断と行動で解決していく方法や精神を養える環境が整っていると思います。

そしてクラブ活動や寮生活をおし仲間との絆、人間関係の大切さを学ぶ事が出来、とても充実した素晴らしい学校であると思います。

最後になりましたが、和歌山工業高等専門学校が未来に向け益々の御発展と、これからも「紀らめく和高専」であり続けていただけますようお願いと共に後援会としまして、これからも出来る限り支持支援をしていけるよう会員一同で盛り上げていこうと考えております。

社会に通じる一貫教育スタイル



同窓会長
電気工学科 2 期生
上野山 博実

この度は、和歌山工業高等専門学校創立 50 周年を迎えられ、おめでとうございます。

開校当初、2 期生である私の思い出を振り返ってみる。入学式の日初めて建設されたばかりの和高専を見た。校舎・食堂・一棟の寮だけが建っていて周りは石ころだらけの状態であった。ここで親元を離れ 5 年間を過ごすのかと思うと不安でいっぱいだったことを覚えている。さらに中学時代にあまり机に向かったことのなかった私は、授業中や寮では、周りに圧倒され、不安は助長された。入部したバレーボール部で、1 期生と一緒に石ころを拾いながらコートを作ったの練習が唯一の発奮の場であったが初めての近畿大会では先輩校の明石高専にこてんぱんに負かされ、これまた打ちひしがれてしまった。しかし 1 年生の後半になると同級生も何人か入部してきて、打倒明石の目標も立てるまでになった。コーチもなく本を読んだり、高校との練習試合で見てきたことを取り入れたりして目標達成は 4 年生になるまでかかったが、部活動に打ち込むことで徐々に種々の不安も消え、寮生活はもちろん学校でもみんなと家族のような学園生活を過ごせるようになった。また学校も体育館、プール、武道館の新設、校舎・寮の増設、土木工学科の新設、たくさんのクラブも設立されて卒業時には学校としての形が出来上がったことを実感した。初めての文化祭・体育祭・高専祭等もみんなが手探りで開催した。すべてが構築の時期であり、技術技能習得が目的の中、作り上げるということを実感し、自然と学べたと今になって思う。

就職については、日本全体が急激な工業化を目指していた時期でもあったため、就職には恵まれていた時代であった。私の就職先は、まだまだ未発展な半導体分野であったため、職場全体が勉強の時代であった。就業時間で実験とレポート、終業後は文献による勉強会の毎日で、学校の延長のようでもあった。英語の文献では苦労した。勉強会は上司や先輩・同僚達とのグループで、実験は関係部門と実験設備の製作から、レポートについても各部門から質問やコメントを頂く等大勢の人々からの協力を得ながらであった。またその後、開発した製品の量産化は信頼性・生産現場・応用技術・計画・営業等、さまざまな各部門との連携によるものであった。

今思えば、関係者と円滑に仕事を遂行できたのは和高専時代の生活が基礎となっていたからだと思う。高専はますます高度化・多様化が要求されてきているようだが、5 年間の一貫教育スタイルは、人間形成の点で他では得られないものがたくさん体験できたと実感している。それはどんな道に進もうが必ず役立つと思う。創立 50 年という節目を迎え、今後さらに社会に通じる卒業生を送り出せる「紀らめく和高専」としてあり続けることを期待します。

目次



CONTENTS



ご挨拶・祝辞

● 校長	堀江振一郎	2
● 理事長	小畑 秀文	4
● 第6代校長	興地 斐男	5
● 第8代校長	葦澤 弘志	6
● 上海電機学院学長	夏 建国	7
● 御坊市長	柏木 征夫	8
● 後援会長	川島 昌之	9
● 同窓会長	上野山博実	10

目次	12
----	----

校歌・航空写真・理念

● 校歌・航空写真	16
● 和歌山高専の教育理念	21
● 学校配置図	22

沿革

● 沿革	24
------	----

草創期

● 記念誌編纂委員長	楠部 真崇	28
------------	-------	----

50年の歴史回想

● 機械工学科	坂田 光雄	32
● 電気工学科	猪飼 健夫	33
● 工業化学科	高木 浩一	34
● 土木工学科	久保井利達	35
● 一般科目	吉川 壽洋	36
● 学生課寮務係	小林 和美	37

先輩からの熱きメッセージ

● 機械工学科	西畑 秀夫／松本 義幸／小竹 元基／秋山 宗之	40
● 電気工学科	堅田十三生／松房 次郎	42
● 電気情報工学科	木村 聡一／奥村 美優	43
● 工業化学科	中岡 元信／石橋幸四郎／栗山 昌之	44
● 物質工学科	南島 美沙	45
● 土木工学科	古家 和彦／山路 都子／宮田 洋好	46
● 環境都市工学科	増田 勝三	47
● メカトロニクス工学専攻	辻本 義孝／中 久枝	48
● エコシステム工学専攻	飯田 晴記／東谷 麻央	49

50年の歩み

● 知能機械工学科主任	檜原 恵蔵	52
● 電気情報工学科主任	佐久間敏幸	54
● 物質工学科主任	土井 正光	56
● 環境都市工学科主任	靄巻 峰夫	58
● 副校長	森川 寿	60
● 専攻科長	藤本 晶	62
● 教務主事	米光 裕	64
● 元寮務主事	山川 文徳	66
● 学生主事	中本 純次	68
● 保健室	小川 敏子	70
● 学生食堂・購買部		71

「写真で見る」教職員の変遷

● 歴代校長	73
● 機械工学科・知能機械工学科	74
● 電気工学科・電気情報工学科	75
● 工業化学科・物質工学科	76
● 土木工学科・環境都市工学科	77
● 一般教育科・一般科目・総合教育科	78
● 事務職員・技術職員	80
● 教育体制の変遷	88

施設の歩み

● 柑紀寮	北澤 雅之	90
● ものづくりセンター	檜原 恵蔵	92
● 国際交流会館	謝 孟春	93
● 地域共同テクノセンター	中本 純次	94
● ロボット教育センター	山口 利幸	96
● メディアセンター	野村 英作	98

産学連携

● 和高専産官学技術交流会	上西 一永	100
● 南紀熊野産官学技術交流会	濱口 公一	101
● 和歌山高専・鼎談		102

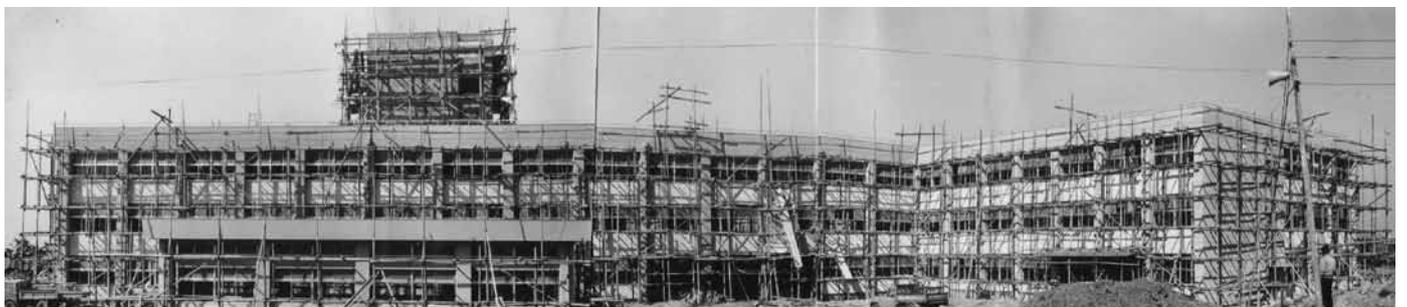
学生会・クラブ

学生会	114
体育系	115
文化系	136

資料

● 新聞記事	148
● 各種コンテストの成績	153
● 全国高専大会での主な成績	154
● 近畿地区高専大会での主な成績	155

50年周年記念事業	160
編集後記	163



校歌·航空写真·理念



校歌

作詞 四宮 春行
作曲 片山 穎太郎

一. 阿古根の浦の 碧き海

果てなく広き 汝が姿に

若人希望 いや遠く

学業修めむ ああ我が学園

二. 煙樹ヶ浜の 翠り松

常磐渝らぬ 汝が姿に

若人誓願 いや固く

真理究めむ ああ我が学園

三. 日高の川の 浄き水

流れて息まむ 汝が姿に

若人使命 いや重く

技術磨かむ ああ我が学園



昭和42年



昭和54年



昭和58年



昭和60年



平成元年



平成4年



平成7年



平成16年



平成26年

和歌山高専の教育理念

本校は、5年間の一貫教育を通じて、エンジニアとしての素養を身につける基礎教育と、実践を重視した専門教育を効果的にを行うことにより、工学を社会の繁栄と環境との調和に生かすための創造力と問題解決能力を身につけ、豊かな人間性と国際性を備えた人材の育成を目指す。

とりわけ自然環境に恵まれた和歌山県中南部に位置する本校は、地域社会の特色を生かしつつ、地球環境に配慮した新技術の開発に貢献することにより、新たな課題に挑戦する。

こうした環境と地域連携を考慮した教育・研究活動が、国際社会へもアピールできるよう努力を重ねる。

「学習教育目標」

- (A) 和歌山県の地域環境、地域社会との共生に関する理解および倫理観を身につけ、公共の安全や利益に配慮したものづくりの考え方を理解し説明できる。
- (B) 社会のニーズおよび環境に配慮し、工学の基礎的な知識・技術に基づいて課題を解決するデザイン能力を身につける。
- (C) 自主的・継続的な学習を通じて、自己の専門分野で学問的知識や経験を身につける。
 - (C-1) 自然科学・情報技術に関する基礎的素養を有し、専門分野での問題解決のためにそれらを駆使できる能力を身につける。
 - (C-2) 専門分野に関する学問的知識と実験・実習で得た多くの経験を持ち、それらを問題解決のために応用できる能力を身につける。
 - (C-3) 長期的視野に立ち、計画的に継続して自らの能力を向上させようとする習慣とそれを実現する能力を身につける。
- (D) 自分の考えを論理的に文章化する記述力、国際感覚を備えたコミュニケーション基礎力、プレゼンテーション能力を身につける。

アドミッションポリシー（学生受け入れ方針）

学校が求める学生像

- ・自らの考えを文書や口頭で説明し、理解させることができる学生。
- ・科学技術に興味を持ち、充実した高専生活を送りたい学生。

知能機械工学科

- ・機械はもちろん、コンピュータにも関心があり、自己を高めたいと考えている学生。
- ・将来、機械工学の知識を活かした仕事に就きたいと考えている学生。

電気情報工学科

- ・電気・電子・情報技術について興味がある学生。
- ・将来、電気情報工学の知識を活かした仕事に就きたいと考えている学生。

物質工学科

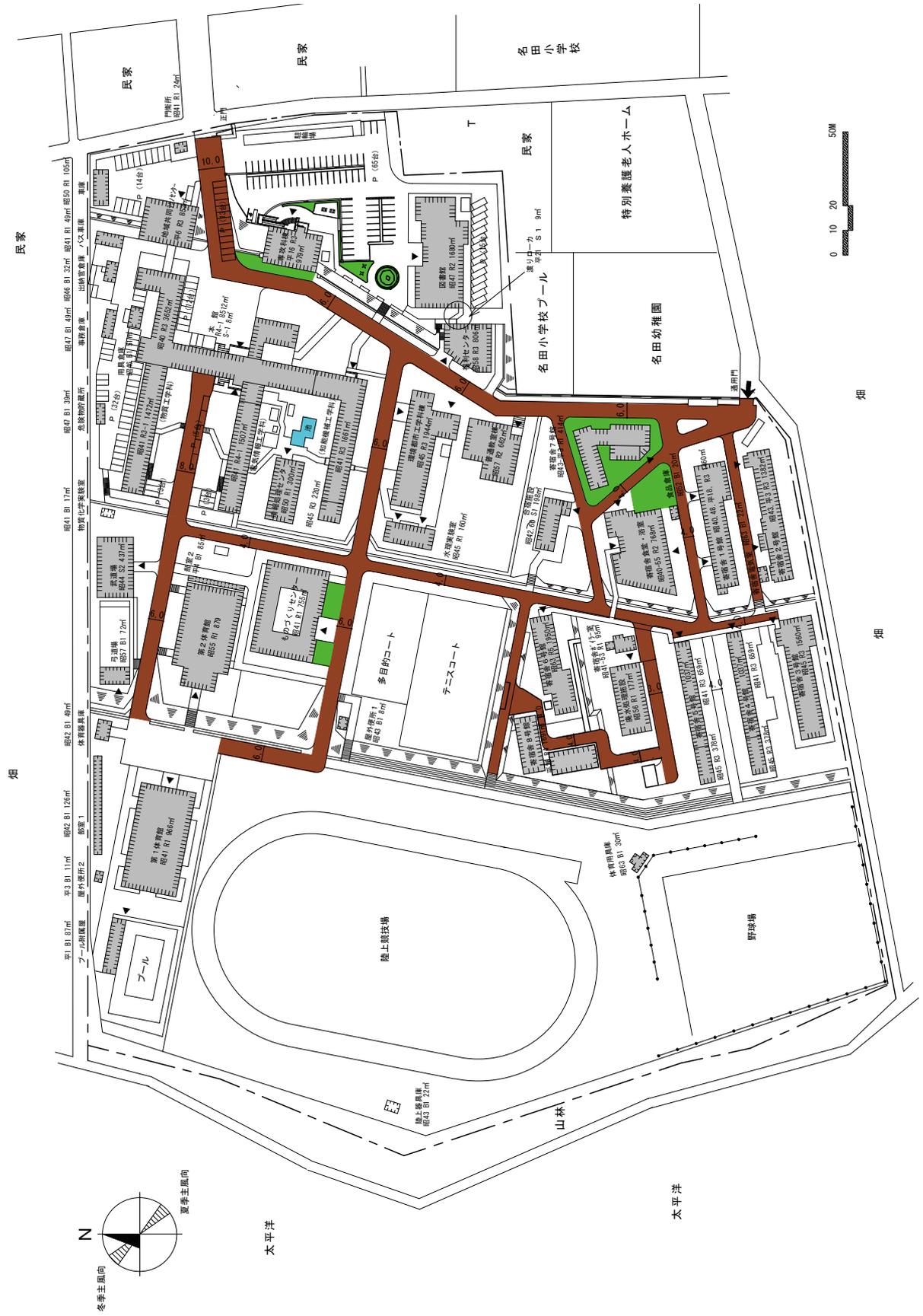
- ・化学や生物学の世界に興味がある学生。
- ・実験や観察が特に好きな学生。
- ・将来、化学や生物学の知識を活かした仕事に就きたいと考えている学生。

環境都市工学科

- ・街・道・港・橋などを作りたい学生。
- ・地球環境を守りたい学生。
- ・災害から人の命を守りたい学生。



学校配置図



沿革



沿革

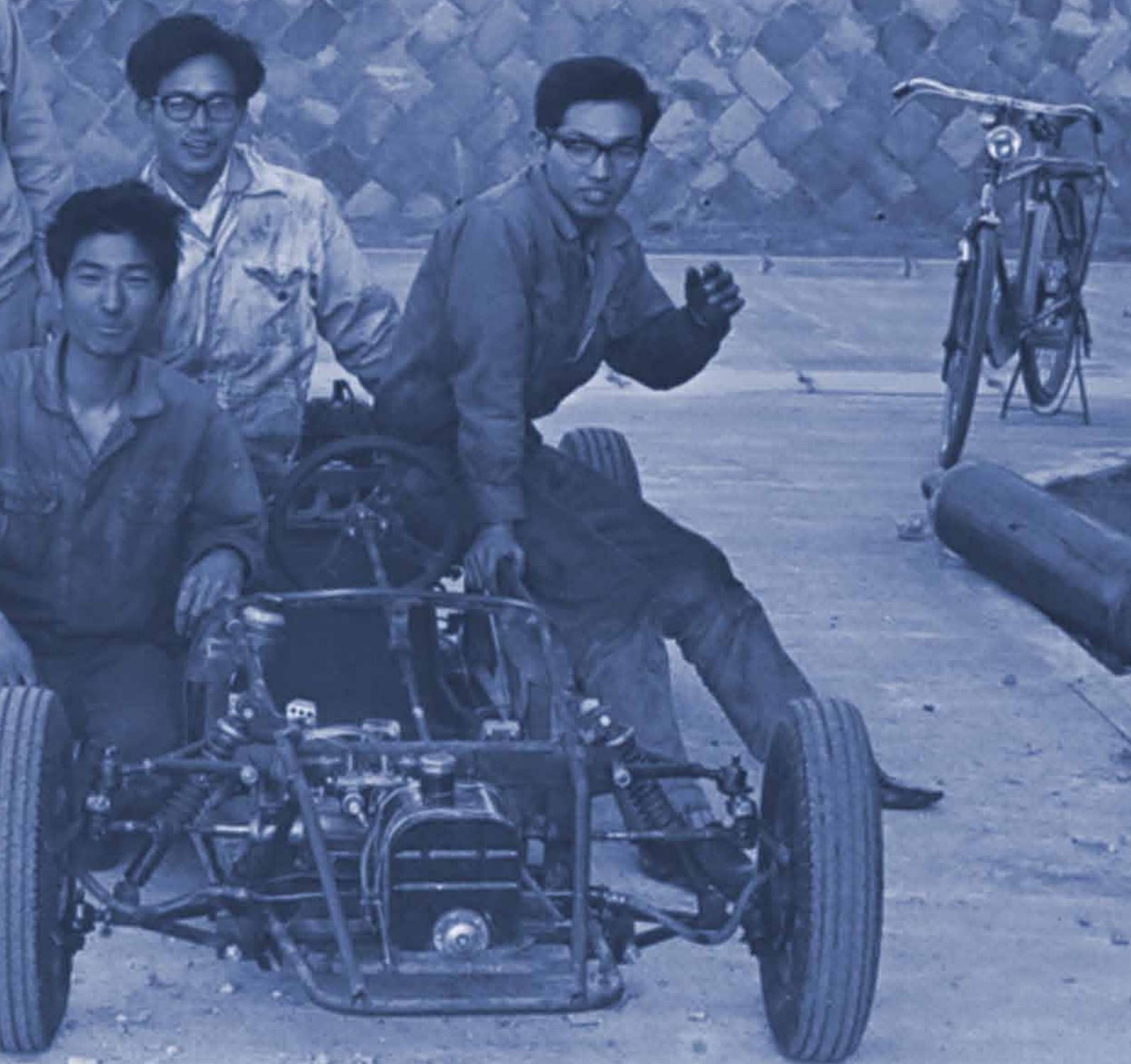
1964年 (昭和39年)	4月1日	県立日高高等学校西館（御坊市菌 263 番地）を仮校舎として機械工学科、電気工学科および工業化学科の3学科で発足した。（昭和39年法律第9号、入学定員各科40名、計120名）
1965年 (昭和40年)	4月12日	御坊市名田町野島77番地の本校舎に移転した。
		
1969年 (昭和44年)	4月1日	土木工学科を設置した。（入学定員40名）
1993年 (平成5年)	4月1日	工業化学科を物質工学科に改組した。（入学定員40名）
1994年 (平成6年)	4月1日	土木工学科を環境都市工学科に改組した。（入学定員40名）
1995年 (平成7年)	4月1日	総合技術教育研究センターを設置した。
2002年 (平成14年)	4月1日	専攻科（メカトロニクス工学専攻、エコシステム工学専攻）を設置した。（各定員8名、修業年限2年）
		
	6月27日	上海電機技術高等専科学校（中国）（現 上海電機学院）と学術交流に関する協定書に調印した。
2003年 (平成15年)	4月1日	総合技術教育研究センターを地域共同テクノセンターに改称した。
		

2004年 (平成16年)	4月1日	独立行政法人国立高等専門学校機構が設立され、同機構が設置する国立高等専門学校となった。 電気工学科を電気情報工学科に改称した。(入学定員40名)
2006年 (平成18年)	3月7日	和歌山大学大学院システム工学研究科と推薦入学に関する協定を締結した。
	3月20日	独立行政法人大学評価・学位授与機構による機関別認証評価の結果、高等専門学校評価基準を満たしていると認定された。
	3月29日	大阪大学工学部・大学院工学研究科と教育研究交流に関する協定を締結した。
	12月11日	上海電機学院(中国)と学生交流に関する協定書に調印した。
2007年 (平成19年)	3月28日	京都大学工学部・大学院工学研究科と教育研究交流に関する協定を締結した。
	5月14日	専攻科が、「地域環境デザイン工学」教育プログラムにより、日本技術者教育認定機構(JABEE)の基準に適合していると認定された。(認定開始年度:2006年度)
	10月30日	大阪大学基礎工学部・大学院基礎工学研究科と教育研究交流に関する協定を締結した。
	11月8日	和歌山県教育委員会と和歌山県内工業高校との連携協力に関する包括協定を締結した。
2008年 (平成20年)	3月3日	株式会社紀陽銀行と包括的な連携協力協定を締結した。
	5月19日	ロボット教育センターを設置した。
2009年 (平成21年)	4月1日	機械工学科を知能機械工学科に改組した。(入学定員40名)
2010年 (平成22年)	4月30日	国際交流会館を設置した。
2011年 (平成23年)	3月23日	上海電機学院(中国)と新たな協定を締結し、長期留学が可能となった。
	9月13日	近畿地区国立4高専で成都電子機械高等専科学校(中国)及び成都航空職業技術学院(中国)と交流協定を締結した。
2013年 (平成25年)	4月1日	実習工場を改修し、ものづくりセンターに改称した。





草創期



くすべ まさたか
楠部 真崇

物質工学科1期
平成10年3月卒業
物質工学科准教授



和歌山高専創立50周年を迎えるにあたり、記念誌の中に創立当時の様子を「草創期」としてまとめることとなった。当時をよく知る伏木博先生（一般教育科）、玉置邦太郎先生（機械工学科）、宮原一典先生（電気工学科）、富上健次郎先生（工業化学科）、中本純次先生（土木工学科）、中村慶治さん（事務部）、および2名の専攻科学



写真1

生谷川公実子、大隈ゆきを交えた会談（写真1）を平成26年7月4日に行った。会談では、創立10周年誌原本を拝見する機会を得た。それは60ページ程の薄い冊子ではあるものの、内容は創立当時の様子が詳細に描かれてある貴重な資料であった。

会談は、まず校歌の話題で盛り上がった。創立



第49回 全国高等学校野球選手権大会

写真2

後しばらくの間、校歌が無かったようである。しかしながら、初出場で当時の優勝候補である市立和歌山商業に惜敗した昭和42年第49回全国高校野球選手権和歌山大会（写真2）の応援時に、当時の事務部長である四宮春行氏が「これに勝っても校歌斉唱できない」という無念な想いをもち、応援の帰路に作詞されたという。第一節にある「阿古根の浦」とは万葉集巻1-12で使用されている野島周辺の海を指す。四宮氏は「海」「松林」「日高川」を学生の人生に喩え、その姿に祈りを込めて歌ってもらいたいと願っていたようである。



写真3

また、50周年記念碑（写真3）にも取り上げた一節「^{まなび}学業修めむ」「^{まこと}真理究めむ」「^{たくみ}技術磨かむ」には、四宮氏の工学技術に対する強い訓示と表現のセンスを感じる。

さて、本校は昭和39年に御坊中学校講堂で開校式および第1回入学式が執り行われ（写真4）、日高高等学校西館にて授業が開始された。機械、電気、工業化学の3学科1クラス40名で開始した第1期生の入試倍率をご存知だろうか？何と9.21倍という今日では想像もできない程の高倍率だったのである。さらに、当時は仮進級制度と



写真4

いうものがなく、留年無く無傷な状態で卒業する人数が今よりも少なく、当然の事ながら卒業生は極めて優秀で、技術立国を支えたと聞いている。

大きく様変わりしたのは、これだけではない。校歌の「煙樹ヶ浜の翠松」は今もその姿をとどめており、本校学生であれば校歌を思い浮かべながら、一度は目にした光景であろうと思う。しかし、開校当時はこれとは別に、学校グラウンド海側に立派な黒松が带状に自生していたようである。残



写真5

念ながら現在は跡形すら無いが、当時の学生の活動を収めたフィルムに偶然写っていた物がある(写真5)。この立派な松林はキャンパスが野島に

移動した数年後に突然松食い虫で全滅したのだと、当時の様子を語って頂いた。その後、もう一度「松」を復活させようと、松食い虫に強いとされるテーダ松の植樹に取り組んだが、台風による塩害等で上手く根付かせる事ができなかった。学内には今も数本の松が残っているが、おそらくそれらの木は当時植樹した苗木の一つだろうということである。

歴史を物語る写真がある(写真6)。この写真は機械工学科第1期生のクラス写真である。創立当時は制服、制帽、革靴、名札を正装としていたようだ。ところが、教員においても学生においても、ドレスコードを遵守する指導に力を注ぐことは、高専で学問に取り組む本質ではないという考えから、急遽全学的に制服を取りやめたことがあった。次の年は、寝間着のままドテラを羽織り、寮から下駄履きのまま登校する学生が急増したが、一時的な風紀の乱れは比較的迅速に収束したという。現在の学則にある下駄の禁止令は歴史の名残ともいえるかもしれない。

今回の会談は、松や学則に創立の歴史を感じつつ、今もその校歌を歌うことのできる慶びを得る良い機会となった。

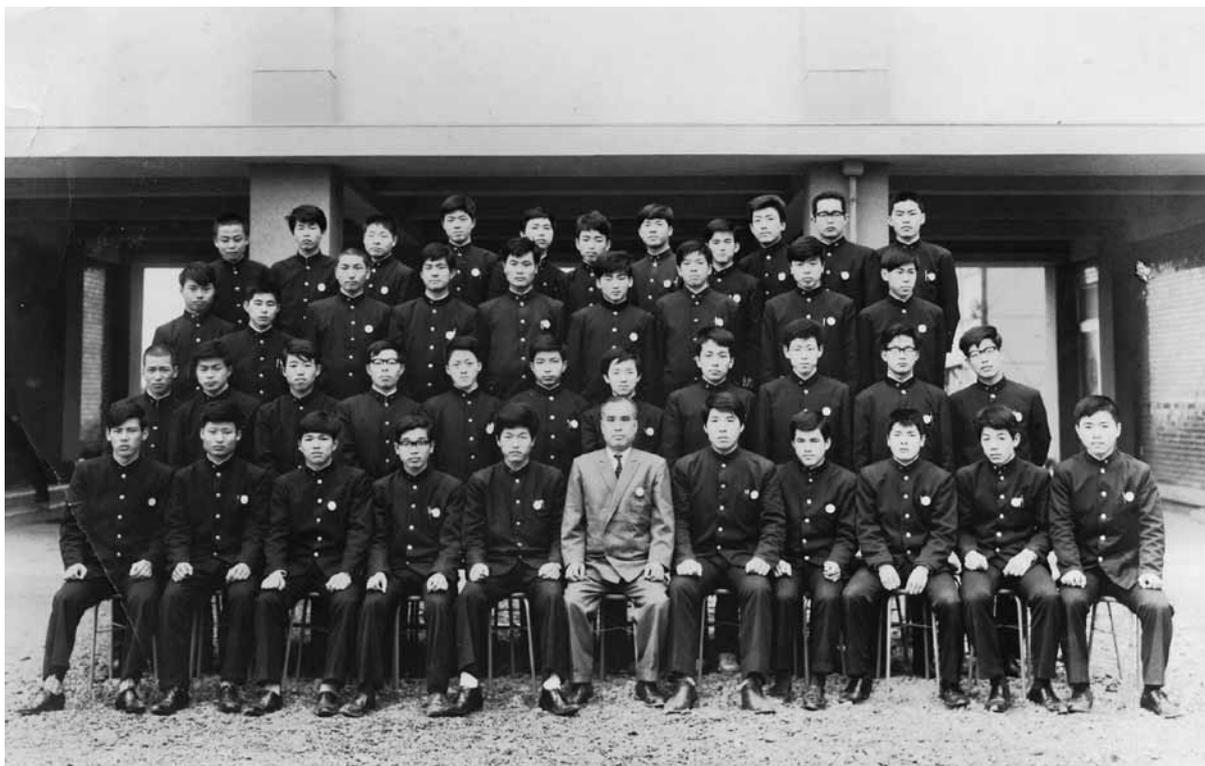


写真6



50年の歴史回想



50周年を迎えて

さかた みつお
坂田 光雄

機械工学科
平成25年3月定年退職



私は、1975年（昭和50）工業化学科助手として本校に着任し、1990年（平成2）に機械工学科に異動し2013年3月に定年退職するまでの38年間在籍しました。退職した3月の卒業式は、機械工学科最後の卒業生を担任として送り出しました。発足当時の学科名は4学科ともその名称を変更しています。基幹学科として自負していた機械工学科の名称も、2009年に知能機械工学科に変更しました。また、機械工学科の多くの学生が愛した実習工場が改修され、使いやすく新設備を有するものづくりセンターに生まれ変わりました。

創立から25年までは「二十五年史」に纏められていますので、その後の25年間を思い浮かべると、幾多の障害と大きな前進がありました。私が機械工学科に異動して4~5年経ったころ、高専制度もそろそろ転換期を迎えていると感じていました。国立高専の幾つかを合併統合して規模が縮小されるのではないかと感じていました。現在、確かに一部の高専で合併統合がありました。沖縄高専の新設や全ての高専に専攻科が設置されるなど予想に反して更なる前進と充実が図られています。素晴らしいことです。

1997年に興地校長が着任され、“和歌山高専の将来像を検討せよ”と助教授8名を集められました。特色を持ち夢のある高専にするため自由な意見交換を行なった結果、専攻科の設置しかないとの結論に達しました。既に10校以上の高専に設置されている専攻科を和歌山高専にも作ることを校長に提言し、全学をあげて取り組むことにな

りました。カリキュラムの全面見直し、教員資質の向上（教員研究費配分方法・学内研究発表会・相互授業参観など）、公開講座・出前授業などの地域貢献と様々な取り組みがなされました。そんな中、機械工学科のみが専攻科設置の条件である博士号取得者数を満たさず、その対策に苦労しました。他学科から博士号を取得している先生の異動や新規採用人事など全学的な協力と支援を得てなんとか条件を満たすことが出来ました。旧文部省への申請資料は、和歌山県における専攻科の位置付け・育成すべき専攻科生・出身学科の組み合わせなどの広範囲にわたる項目をまとめる作業を多くの教職員が徹夜で取り組んだことを思い出します。文部科学省に専攻科設置が認められ、2002年4月1日に入学試験を実施して最初の専攻科生が生まれ、専攻科教育が始まりました。修了生を世に送り出し始めて10年が経ち、和歌山高専は本科と専攻科が一体となり、それぞれの卒業生は共に社会で活躍されています。

和歌山高専の学生をみたとき、兄弟姉妹で入学している人達と卒業生のご子息の入学が多いと思います。実際に高専生活を体験した人達は、和歌山高専の強い支持者となっています。和歌山高専の益々の発展を祈っています。



旧実習工場



懐かしの実習風景

高専での思い出

い かい たけ お
猪飼 健夫

電気工学科
平成19年3月定年退職



採用面接のため、初めて御坊の地に降り立ってから40数年が経ちました。高専へ向かうタクシーから望む太平洋の美しく碧い海に感激し、面接後に主任教授から「来ていただけますか」と問われたとき、毎日このような美しい海を眺めながら生活できる喜びで胸が躍り、進路についていろいろ迷っていたにも拘わらず、「よろしく願います」と申し上げたのが思い出されます。赴任から数日後、朝から雨が降っていました。当時の上野官舎から歩いて出勤途中、横殴りの雨のため下半身ずぶ濡れになってしまいました。教官室から見る海は灰色で波高く荒れていました。海辺における晴天時と荒天時の余りの落差に驚きました。本校への訪問当日の天候によって印象に相当差異があるように感じました。

赴任当時の高専は学生運動が盛んな時期でもありました。元気な学生が多く年齢も近いということもあり、学生とよく議論したり一緒に遊んだりしました。卒研で一緒に合宿したり、旅行に行ったり、学生から見たら兄貴分のような存在だったのでは。当時は教職員（教官、事務官、技官）にも同世代の若い人が多く、各種交流が盛んで議論したり懇親会を行ったりと楽しい時間を過ごしました。

学生が希望する硬式テニス部や将棋囲碁部の創設に係わり一緒に活動したのも楽しい思い出の一つです。また学生の資格取得を援助する目的で電気技術研究会を創り、一緒に学びながら電験その他の国家試験に多くの合格者を出すことができました。

我が半生を和歌山高専で過ごさせていただきました。在職中は研究できる環境と多くの研修の機会を与えていただき、研究成果もある程度上げることができました。学会関係で役員（理事、幹事、評議員、協議員）、論文査読委員や各種委員を務め、また外部評価（JABEE 審査長、大学評価委員）にも携わりました。本校として初めて JICA の専門家としてインドネシアの学校建設に係わり、中小企業庁の省エネルギー相談員として県下の多くの企業の省電力相談に協力しました。

本校卒業生や企業関係者が本校を訪問時に、あるいは出張等で企業訪問したときに、卒業生が活躍しているのを見聞きするのは大きな喜びであります。現在までに多くの卒業生が各方面の第一線で活躍されており、少しはお手伝い出来たのではないかと考えています。

最後に創立 50 周年の節目を迎え和歌山高専がますます発展することを祈念します。



高専生と共に過ごして

たかぎ こういち
高木 浩一

工業化学科
平成21年3月定年退職



私が和歌山高専にお世話になったのは昭和51年4月からで、31歳の時でした。企業の技術者として6年間、高専出身の優秀な技術者の方と一緒に仕事をしてきました。そのような状況から教育畑への転身でしたので、最初、高専生との接し方にずいぶん悩み、迷いました。しかし、自分は自分でしかなく、生き様をぶつけるしかないと覚悟しました。特に卒研生に対してはストレートに生き様をぶつけましたので、ずいぶん煙たかった卒研生もいたと思います。しかし33年間、多くの卒研生と研究の話をするのが出来たのは幸せでした。

私と学生との付き合いでは、野球部のことも印象に残っています。約30年間、野球部の顧問として携わり、平成4-10年の間、高校野球の監督をしました。和歌山県では夏の県大会で1勝するのは非常に難しく、並大抵の努力ではできません。毎日、部員と時を過ごしていると、練習で地道な努力をコツコツ積み重ねた部員が夏の大会で結果を残すことがわかりました。そういう学生は次第に成績を上げてくることもわかりました。私は勉強とクラブ活動の取り組みには共通する部分があると信じています。真っ黒になって高校野球で一緒に過ごしていると、高専大会では7回も全国大会に連れて行ってもらい、それなりに成績を残すことが出来ました。野球部を起ち上げた先輩たちと話しますと、思春期をこの地で過ごし、同じクラブで生活をした彼らの野球部に対する愛着は非常に強いものです。

また寮務主事の時の学生とのかかわりも忘れら

れません。私がお引き受けした時は土足で寮内に上がり、汚く、これでは勉強する雰囲気ではないという印象でした。私は指導寮生を集め、「土足厳禁」を言い渡しましたが、実現は難しいものでした。そこでうまく運営している寮を見学しに行き、学生同士の話し合いをさせてもらいました。和歌山高専の学生はかなりショックを受けたようで、いろいろな取り組みに積極的になるようになりました。指導寮生による新寮生のウエルカミングパーティーや餅つきを兼ねた球技大会を始めたのはその頃でした。後を引き継いでくれた寮務主事の働きもあって、今では他の高専から訪問を受けるまでになっています。高専生はいつでも変わりうる潜在能力を持っていることを私は実感しました。

その時その時を一生懸命に学生と共に過ごしてきましたが、このような付き合いの仕方は良かったのかどうか今でもわかりません。あまり深く考えずに飛び込んだ教育と言う職場でしたが、学生と共に過ごすことで学生から学び、教えられ自分も成長できたと思います。これは私の大きな財産です。さらに100周年に向けて、和歌山高専のますますの発展を願ってやみません。



野球部練習風景



本校舎の化学実験室

現場見学の思い出と更なる充実を願って

くぼい よりみち
久保井 利達

土木工学科
平成26年3月定年退職



和歌山工業高等専門学校 50周年おめでとうございます。和歌山高専をこの3月に定年退職致しました。昭和50年に旧土木工学科に着任し、39年間在勤中お世話になり感謝しております。

環境都市工学科において学生達と一緒に取り組んだ現場見学について振り返ってみる。昭和55年、柴田祐三先生が土木工学科に着任された頃から、現場見学の重要性が見直され、数多く実施されるようになった。学年ごとに年1~2回の実施だが4年生は1泊2日で実施した。その頃は2年生が研修旅行（本校開設期は九州、後にスキー研修）を実施していたため、4年生でも宿泊研修を取り入れるという配慮だった。

さて、この現場見学は事前の準備が大変であった。教官は工事現場を探ることから始まり、現場の受け入れ時期が学校の見学の日時と合うかどうか悩まされた。そして日時が決まると、次は授業変更を行うので授業担当者の了解を得なければならない。またスクールバスの使用許可の手続きが必要になる。更に、運転手の労働時間を超えないように配慮しなければならない。四国の大鳴門橋の見学の時には和歌山港から徳島港間にフェリーを使用するので運転手の労働時間が制約されるなど、遠方への実施が困難になっていった。

実施日が決まれば、学生は事前学習だ。クラスを5班に班分けし、写真係・記録係・現場での質問係（質問事項を調べておく）などの役割分担を決める。現場見学終了後、学校に戻って、写真の焼増し、質問・現場での説明などをテープレコーダーから掘り起こし、説明資料や写真を貼り付け

たレポートを各自作成して提出する。学生も大変時間がかかったが記憶に残ったと思われる。

宿泊先に現場で仕事をしているOBを呼んで、夕食後、後輩に対してレクチャーをしてもらい、充実した研修となった。研修先は大滝ダム工事現場、大鳴門橋工事現場、明石架橋（橋脚・上部構造）工事現場、南港工事現場と大阪港橋梁群見学等、巨大土木工事の現場を肌で感じる機会を得たことに学生たちは目を輝かせていた。引率した私たちも感動したものである。

環境都市工学科の現場見学は、土木工事があって初めて成り立つものであるから、実施は非常に困難である。そのため達成出来た時の満足感が学生にとって非常に有意義なものである。学校と本学科には是非これからも現場見学を実施して、更なる充実を実現させてほしいと願う。



土木棟建設工事



コンクリート実験

思い出の一般教育科

よしかわ としひろ
吉川 壽洋

一般科目
平成13年3月定年退職



宇宙船アポロが月面に着陸した翌年のことであつたから、本校への赴任が昭和四十五年の春であつたのを容易に思い出すことができる。最初の教官会で澤井校長が本校は四つの専門学科からなる学校であるが、その他に一般教育を重要視する観点から一般教育科を設けて本校教育の十全を図るといった旨のことを述べられたのを覚えている。

早い技術者の養成が急務であつたため、高専では低学年から専門教育を施すことになっていて、そのカリキュラム編成の特色を楔型と呼んでいた。一般科目には、時間数には違いはあつたものの、普通科高校に似た科目が多くあり、他に図学や法学、経済学などが含まれていて、学校はどこへ行ってもさほど差異はないはずと思つていた身には驚きだつた。

赴任して間もなく全校で行う^{おいし}生石高原への遠足があり、積雪に足をとられながら苦勞して歩いたのを記憶している。しかし、この種の行事は生石登山で終りを遂げた。校内体育大会も年に四回ほど行われていたが、このほうも回数が減少して



行つた。

一般科の教官は一般に低学年の担任をすることが多かつたから、新入生の特別教育活動として計画され、高野山の宿坊や紀北青年の家、白崎少年自然の家等で実施された合宿教育や二年生での修学旅行は主として一般科主導で行われた。学生の多くが寮生であつたので、宿舎での寝具の整頓やセルフサービスによる食事の準備や後始末のスムーズな点において常に高い評価を受けた。

一般科目、専門科目の別なく学力は容易に身につくものではない。そのことは誰もが経験的に知っている。一般科では基礎体力及び基礎学力の育成を目標に營為努力を重ねて来たが、よほどの手間隙をかけない限り基礎力はつき難い、教育が手仕事であるゆえんである。大学では教養部の解体を見たが、本校では基礎科目の重要性が再認されて総合教育科として発展していることは大きな喜びである。



追い風の吹く「柑紀寮」は私の誇りです。

こばやし かずみ
小林 和美

学生課寮務係
平成24年3月定年退職



和歌山高専創立50周年おめでとうございます。50年前、大自然に恵まれたこの地に和歌山高専が設立されました。広大な敷地が整地され、いくつもの建物が建ち、環境設備が整っていくのを目の当たりにし、「ここに県下のトップクラスの中学生が集まってくるのか!」と思うと、なにもかもが憧れでした。

昭和50年12月「和歌山工業高等専門学校学生課米養士」に採用され、全国屈指の大規模学生寮（柑紀寮）が私の職場になりました。念願だった「青少年の心と身体の健康を創る仕事」ができるようになり、毎日毎日、寮食堂で、寮生の喫食状況等を見ながら、「先ず健康!ちゃんと朝ご飯食べてる?」、「好き嫌い言うな。何でも食べる!食べられないものは出してない!」と言い続けてきました。昭和61年4月寮食堂が業者委託され、寮生相手の仕事が寮務係での私の主な業務になりました。柑紀寮では、寮生は親元を離れた開放感からか、学寮規則もなんのその、連日連夜、修学旅行騒ぎで、いつまでも明かりの消えない不夜城状態でした。また土足であった寮内は、泥とゴミの山だらけで、教育寮とは名ばかりの、無法地帯?そのものでした。「男子寮はどこもこんなものなのか?」と思いつつ、この中で寮生のために自分に何ができるか?何をすべきか?「先ず健康!心も身体も健康であってほしい。ここでの5年間で社会に出ても通用する人になってほしい」と考えるようになりました。

平成7年4月寮務主事に高木先生が就任されると、柑紀寮は、針路を大きく変え始めました。



「基礎（基本）さえしっかりしていれば、崩れない。」という理念の下、寮内は、土足厳禁となり、寮生自身の掃除の徹底で見違えるように綺麗になりました。「指導寮生」を活用して学寮規則を厳守徹底させ、学寮関係の先生方は、早朝や深夜にまで巡回をしてくださいました。この方針は、藤本先生、米光先生と歴代の寮務主事に受け継がれ、よい伝統が築き上げられ、柑紀寮に追い風が吹き始めました。寮生は、人生の一番多感なこの時期を、「柑紀寮」で同じ釜の飯を食い、笑い、泣き、怒り、主張し合う仲間達と過ごします。ここで、どんなに世の中が変わっても、しなければいけないこと、絶対にしてはいけないことを判断する力、どんなに辛いことがあっても乗り越え、生きぬく力が養われます。「柑紀寮」は、和歌山高専の誇りの一つになりました。

柑紀寮にはいつも海風が吹いています。この風が常に追い風だと感じられる、そんな柑紀寮に勤めていたことが私の誇りとなっています。



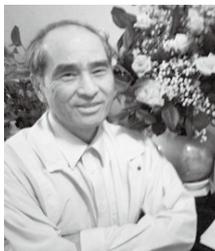




先輩からの
熱きメッセージ

和高専は、いつまでも未完成である。

にしはた ひでお
西畑 秀夫さん



機械工学科2期
昭和45年3月卒業
現在：H N Systems Inc CEO
神戸事業所インドネシア工場勤務

創立50周年おめでとうございます。和高専は、未来を創りだし世界に貢献し、永遠に未完成でありつづけて欲しい。

光陰矢のごとし、振り返ると、私達2期生は、一年間御坊市の仮校舎で過ごされた1期生の先輩達と一緒に名田町の新校舎に初めて足を踏み入れたのが、1965(昭和40)年4月、49年前のことでした。当時、正門から無舗装の坂道を雨の中、長靴で登校し、和高専の伝統を創るべく内外の期待を背負って、同じ釜の飯を食べ、助け合い勉強にクラブに熱中しました。良き尊敬する先生方や事務職員に恵まれ、下宿を提供して下さった地元の方々の温かい協力には感謝でした。

卒業後、多くの仲間が多分野で活躍し日本の成長に大きく貢献していることは和高専の誇りです。私個人は、しばらく社会人を経験した後アメリカの大学と大学院で学び、今なおグローバルな環境で仕事をさせて頂いていることは感謝なことです。

後輩へのメッセージとして、①夢とビジョンを持ち、②失敗を恐れず創造的アイデアに挑戦し、③本校教育目標にある国際的に適用するコミュニケーション及びプレゼンテーション能力を身につけて下さい。(学校にはカリキュラムの見直しを提案します。) 近い将来、地球規模(global)から、さらに宇宙規模(cosmic)へと活躍を広げる時代が来ます。

立ち止まらないで、今日の営みの上に明日の工夫を、明日の工夫の上にあさっての新たな思いを。この新鮮な気持ちをいつも持ち続け成長して下さい。

高専卒という仲間がいた

まつもと よしゆき
松本 義幸さん



機械工学科18期
昭和61年3月卒業
現在：和歌山高専技術支援室勤務

50周年おめでとうございます。我が母校と同じ年齢を人生重ねて来たかと思うと何かしら感慨深いものがあります。

卒業後は、化学系のメーカーに就職するもパツとせず流れに乗ってダラダラと人生を歩んで来た気がする。ただ会社内には昔から『高専卒』という縄張りみたいな核(コア)があり、同年代を超えて全国高専から色々な面々が集まって来た。仕事の内容・管轄は違えどお互い顔を会わせると意識しあい、先輩からはフォローして頂き後輩にはサポートしていくという風土が出来ていた。

転職は40代を迎える頃にやって来る。会社の業績が悪くなり職場の環境も一変していく。それでも10年は頑張れた。高専グループという面々がいた事で、メンバー同士が集まる事で何かしら発散できた。会社を辞める時も、温かく送り出してくれた。この事が長い会社人生をいい面で終わらせてくれたのだと今も感じている。

さて本校職員として働きはじめた現在、若い彼らに何を伝えて行こう?いまの彼らは私らがいた時代より優秀だ。ただ何事も一生懸命に取り組まなければ、人生からつま弾きにされてしまう。岐路にぶつかっても、自分の信じた道は突き進むべきだ。そういう方面を教えていければ、我が第二の人生も捨てたものじゃ無くなるだろうか。

興味を形にする素養・本質を 和高専で学べ。

し の もと き
小竹 元基さん

機械工学科 27 期
平成 7 年 3 月卒業
現在：東京大学工学部機械工学科
勤務

創立 50 周年、おめでとうございます。
和歌山県および日本をささえるエンジ
ニアの創生、楽しみにしております。



私は、高専時代、サッカー部に所属し、NHK ロボコン、エコラン・ソーラーカーレースと、興味をもち、それを実現できる環境が高専にあった。モノづくりが好きだったのか、バイクやクルマが好きだったのかはわからないが、動くモノを作り、そのモノを操縦することが好きであったことは間違いない。うまく動かず、仲間や先生達と悩んだ日々を覚えている。

今は、東京大学工学部機械工学科に所属し、研究室*を運営している。私の研究室では、高齢者や障害者、私も含む人間が、変遷する社会の中でどのように生活の質を向上させるか、“コト”を考え、それを機械工学、情報工学の知識を統合・活用することにより“モノ”を設計することを行っている。実際、社会実装や人間が使う心地良さまでを追求するため、人間の行動や運動・認知・生理・心理特性の理解やその特性を考慮した支援に関する研究を行っており、社会や生活環境における現場を舞台とするため、実学を通して知識が得られる。

実は、どの研究対象においても必須の知識がある。それは、高専生に親しみやすい“設計”という概念である。どの対象においても、問題把握と課題設定、要求機能の抽出と制約条件に基づく実装手順の過程を通る。この素養を早い時期から、楽しく体験し、学べる環境と教育体制が高専にはあり、私の原点になっている。

*: <http://www.sl.t.u-tokyo.ac.jp/>

高専ロボコンを振り返って

あきやま ひろゆき
秋山 宗之さん

機械工学科 45 期
平成 25 年 3 月卒業
現在：神鋼テクノ(株) 産業機械本
部 開発室

創立 50 周年を迎えられましたことを、
心よりお祝い申し上げます。



ロボコンで思い出されるのは上手いかなかったことばかりです。ロボット作りは理論通りに進むことはまずありません。例えば、教科書の問題ではこのような一文をよく見かけます。

「ただし、摩擦はないものとする。」

テストでは無視できる部分も、ロボット作りでは大変やっかいで頭を悩ませることになります。仕事が理論通りに進まなくても、そりゃそうだよな、と苦笑いできるのは、こういった学校では教えてくれないことを、自分の手を動かして学ぶことができたからだと思います。

ロボコンの醍醐味は新しい物を作り出すことにあると思います。新しい物を考えている間はとても苦しく、投げ出したくなります。部室のドアをバンッと閉め、もうこんなのやめた!と思って帰ったことも何度もありました。しかし、夕飯を食べ、風呂に入る頃には、すでにロボットの事を考えていて、布団に入る時には、もう少しだけ頑張ってみようかなという気持ちになります。それはきっと、苦しいだけでなくどこか楽しかったからなのだと思います。苦しくて楽しい。矛盾しているようにも見えますが、ロボコンはどうだったと聞かれれば、私はそう答えます。それがきっとロボコンの魅力なのだと思います。

50周年メッセージ

かたたとみお
堅田 十三生さん

電氣工学科 1 期
昭和 44 年 3 月卒業
元パナソニック(株) 勤務



50 周年おめでとうございます。世界的な視野を持ちグローバルで活躍できる人材の育成を。

創立 50 周年おめでとうございます。50 周年と聞いて、改めて歳月のすぎるのが早いものだと感じています。

御坊のプレハブの仮校舎で勉強した日々が懐かしく、あれからもう 50 年も過ぎたのだと思うと感慨深いものがあり、色々な思い出がよみがえってきます。

プレハブ校舎で先生方も生徒も、新しい学校に将来への大きな夢を持ってスタートしました。化学の授業は最初から英語で行われ、試験の問題が英語で出され、問題が分からず答えられなかった事や数学の問題集はどれだけ早く終わらせるかと競争をしたり、授業もレベルが高く、ついて行くのに必死で頑張った事を昨日の様に思い出します。

二年目からは名田の海のそばの校舎に移り、大きな新しい校舎で勉強出来る喜びを感じました。毎年、我々の成長とともに校舎も出来上がって行きました。

卒業してからの 40 年の会社生活も早いものでした。その間に海外で約 13 年、国内で海外関連の仕事を約 8 年と会社生活の半分を海外関連の仕事をさせてもらいました。

初めての海外勤務でタイに行った時は海外から見た日本にカルチャーショックを受けて、異文化の中で考える事の大切さ、異文化の中での仕事の難しさを学びました。ドイツでの勤務では海外でのマネジメントに戸惑いの毎日でした。しかし、国は違っても同じ人間であり、お互いの信頼が大切である事を教えられました。

後輩の皆さんに言える事は現在はグローバルに考えないと生きていけない時代だと言う事です。冷戦体制が終わり、急激にグローバル化が広がり、グローバル競争が激しくなり、真のグローバルな時代になっています。世界の情報は一瞬に世界中に広がります。日本もグローバル競争の中にあり、グローバルの中で勝ち抜いていかなければ生き残れません。

そのためには国際感覚を持つことが大切です。自分の専門職能を磨くと共に異文化を理解し、自分のアイデンティティと日本人としてのアイデンティティを持ち海外の人と一緒に仕事をして行く事が出来る様なグローバルビジネスパーソンになる事が必要です。

世界的な視野を持ちグローバルでの活躍を目指して頑張ってください。

ジ エンジニア

まつふさじろう
松房 次郎さん

電氣工学科 20 期
平成元年 3 月卒業
現在：有限会社 松房電機
代表取締役



50 周年、おめでとうございます。自由で寛容な和歌山高専文化をこれからも大切に。

私は、電氣工事会社の代表をしています。会社と言っても、私 + 妻 + 1 という超零細組織ですし、家業を継いだだけなので、高い志があったわけでもありません。学生時代に、電力、信号、情報処理、物性、電氣理論といった広い基礎知識を叩き込まれたおかげで、転職しても、なんとかやっていけています。

私の高専時代は、授業、実験、レポート、部活、試験と忙しく、また寮生活で友人とくだらない話を遅くまでしていました。そこで得たものは、「問題の解決策は一つでは無い」「人の考えは一つでは無い」という、当たり前の考えです。現在は、ネットワークの発達により、検索が省力化されました。あふれた情報は、玉石混交です。検索上位が正確、正解とは限らないし、ウソ、デマ、勘違いもあります。

他の回答にも理解を示すことも面倒だし、集めた情報の真偽を判断するのも面倒です。最初から自分の考えだけを通せば、両方の面倒から解放されます。しかし、技術者たる者は、慎重で、謙虚で、素直であるために、常に自分を疑い、広い視野と客観性を持ってほしいと思います。

和歌山高専の今後の発展を祈念するとともに、後輩諸賢の活躍に期待します。

「少数派」を生かせる高専生に

きむら そういち
木村 聡一さん

電気情報工学科 42 期
平成 22 年 3 月卒業
現在：パナソニック株式会社勤務



50 周年おめでとうございます。高専は今後も、学生にとって良い環境であり続けて欲しいです。

僕が高専在学中から高専に抱いていた印象は、「高専は少数派である」と言うことです。専門的な授業がメインであることや知る人ぞ知る学校であることが主な理由ですが、僕は高専に良い印象を持っています。

僕は在学中、高専ならではの実践的な授業も楽しむと同時に、副指導寮生や高専祭でのクラス企画など、勉学以外のことにもチャレンジしました。その中で印象に残っているのはプログラミングコンテストです。部活動の一環で参加し、チームとして知識も技術も高くはありませんでしたが、課題に対しみんなで様々な意見を出し合い、一つのを完成させました。僕は主将として、周囲を引っ張っていく難しさもありましたが、完成した時の感動は人一倍大きく、学ぶことも多くありました。

僕は皆さんに、少数派であることを生かし、自ら進んで多くのことにチャレンジして欲しいと思います。高専では勉学以外に寮生活や部活動、各種コンテスト、留学生との交流など、高校や大学で経験しづらいことが 5 年間という長い期間、経験出来ます。それらに積極的に参加し、周囲と協力しながら、少数派な高専生だからこそ、自分だからこそ出来ることにチャレンジし、より自分を成長させて欲しいと思います。それらの経験は将来、必ず生きてきます。

今しかできないことがある。
—5 年間の高専生活を経て

おくむら みゆう
奥村 美優さん

電気情報工学科 43 期
平成 23 年 3 月卒業
現在：(株)NTTファシリティーズ勤務



50 周年おめでとうございます。学生にとって楽しい自由な環境であって欲しいと思います。

高専に入学したものの、目に見えない電気はイメージもしづらく勉強が苦手でした。「どうせつかわんし、就職したら勉強したらいい。」先輩達にもそう言われて遊んで過ごした学生時代でした。

2009 年に NTT ファシリティーズに入社し、NTT の電力設備の保守に携わり通信インフラを支える立場となりました。現場で作業を行っている際に何気なく DC200V に触れてしまい、指にホッチキスの針であけたような穴があき、初めて電気の恐ろしさを実感しました。

私の場合ですが、高専時代に学んだ事は実際の業務に大きく関わっています。就職してからというものの、年数を重ねるにつれ、どんどん時間はなくなります。

4 年目の今は、太陽光発電の営業業務を行っていますが、システムの構成や、発電効率・設計等日々勉強の毎日です。「あのときこうすれば」と思うことは正直いくらでもあります。学生時代に戻りたいと思うことも多々あります。だから皆さんには、後悔しないように充実した学生生活を送っていただきたいです。やって無駄な事はありません。なんでも吸収できる今、大きな視野を持って何事にもチャレンジして行って下さい！

高専50周年に寄せて

なかおか もとのぶ
中岡 元信さん

工業化学科1期
昭和44年3月卒業
現在：和歌山県鑄物工業協同組合



和歌山高専の創立50周年を心より
お祝い申し上げます。

創立50周年の記念誌に寄稿できることを大変光栄に思っています。私が38年間勤務した和歌山県工業技術センターやその後のわかやま産業振興財団勤務で、国の研究開発にかかる補助金などの業務を担当する中で、和歌山高専の先生方にお世話になった縁で原稿を依頼されたと思うのですが、超低空飛行でお情けで卒業させて頂いた身としては、お恥ずかしい限りです。あえて恥を忍んで、在校生の皆様にごくごく当たり前のことをお伝えさせていただきます。私はとにかくポジティブに考えるということを心がけてきました。何かに直面した時でも、自分は運が強いから大丈夫、できる限りの努力をしたら何とかかなると思うことです。人より劣っていると思った時でも、特別な人を除いては、古今東西チョボチョボなのだから悲観しないことです。それと人間は日々変わり成長していくものです。1年では目に見えないが、5年後、10年後ではいろんなことで成長している自分を思い描いて、驕らず自信を持って事に当たってください。最後に、これまで高専が果たしてきた役割や重要性は今後も変わることは無いと思います。先生方には、社会からの本質的でない変な要望などに惑わされることなくご活躍され、高専がますますご発展されますことを心より祈念申し上げます。

工業化学科第7期生

いしばし こうしろう
石橋 幸四郎さん

(旧姓：西)
工業化学科7期
昭和50年3月卒業
現在：(株)石橋 代表取締役



50周年おめでとうございます。
日本の経済成熟期を支えこれからの
日本を支える技術人材育成機関とし
て、今後の発展を心から祈念します。

会社が近くなので母校を訪れ現役生と出会う場
面がよくあるのですが、学生さんの挨拶が好印象
でよい環境で勉強されているのだと感じます。

難しいことはわかりませんが、挨拶はその人間の
のすべてを表現しているといっても過言ではない
と思うのです。

「礼儀だから挨拶しなさい」とよく言われます
が、本当は自己の存在を周囲にアピールする手段
だと思うのです。ですから、「おはよう」と言っ
たら、「失礼します」と言ってその場を去る必要
があり、周囲に自分の存在を気付いてもらう為
には、大きく元気な声を出す必要があるのです。

そして、自分の存在が認められることで、所属
する集団や社会のために役立つことをしようと
いう気持ちが芽生え、周囲の理解や協力が得られ
ることに繋がります。

世界的に「ものづくり」の技術レベルは発展し
ており、今後日本のエンジニアにもっとメンタ
ルな強さが加われば、新しい「ものづくり」が誕生
するのではないかと思います。

時代の航海士

くりやま まさゆき
栗山 昌之さん

工業化学科8期
昭和51年3月卒業
現在:和歌山県立箕島高等学校



和歌山高専50周年おめでとうございます。還暦手前の我々にとって大事な母校です。ますますの発展を期待しています。

本年ここに、和歌山高専の50周年の節目を迎えることが叶いましたことを物質工学科(工業化学科)同窓会長として一言お慶び申し上げます。

8期生の私にとっても、卒業後35年以上経過しており当時の学生時代を振り返って見ると、何よりも寮生活を思い出します。中学校を卒業後、15歳で親元を離れ20歳前後の5年生と一緒に生活をするわけですから大変不安でした。また、4人部屋で上級生と同室でしたが1年生から5年生まで「同じ釜の飯を食った仲間」という一体感が非常に強かった様に思います。なお、当時は家族との連絡も公衆電話が1台あるだけで、しかも電話交換手を通じての公衆電話でした。今では寮も個室中心、家族との連絡も携帯電話と時代は変わっています。

混迷する現代社会においてグローバルな幅広い視野が求められています。和歌山高専生の志やスピリッツは「日本の中枢技術を支え社会の求める人材に成長していくこと」であり、昔と変わらず伝統として受け継がれていると思います。今後とも、進化と伝統を大切に和歌山高専が発展すること、巣立つ若駒たちが、社会の様々な分野で卓越したリーダーとして成長していくことをお祈りします。また、中学校卒業後すぐに自分の将来の方針を決め、目標に向かって勉強に励む時代の航海士である後輩達にエールを送り今後さらなる発展を期待します。

“リケジョ”歴 21年目

みなみしま みさ
南島 美沙さん

(旧姓:尾崎)
物質工学科2期
平成11年3月卒業
現在:三菱電線工業(株)技術開発部



最近、娘が私に似てきて、大きくなったら和歌山へ行くとか言うのかなと、密かに楽しみにしています。

和歌山高専創立50周年おめでとうございます。

ふと、数えてみたら、寮生活に憧れて和歌山高専に入学した日からもう21年目。社会人になって一番最初に携わった成形加工の技術開発の仕事が縁あって今も続けています。とはいえ、いわゆるリケジョのイメージからはほど遠く、作業着に軍手、安全靴という全く色気のない格好をして、モーター音が響く現場で実験やら試作やら。ボルトの締め方もすっかり上手くなりました。

新入社員の頃は、知識も経験もないくせに気が強くて生意気で、よく叱られました。でも、当時の上司に唯一誉められた言葉を今も覚えています。

「誰とでもコミュニケーションが取れるなあ。」

誰とでもとは言い過ぎですが、これは私が高専生活で得た最強の武器と断言できます。個性の強い面子の中で生き抜いた高専出身者ならいつのまにか身につけている技ではないでしょうか。仕事は人ありき、コミュニケーション力というのは高専出身者が職場で重宝される理由の1つなのかもしれません。現役の皆さんは大いに磨いて下さい。

さて、私もいよいよ中堅と呼ばれる世代です。目下課題は仕事と育児のバランス。主人や周りの協力があってこそと日々感謝です。・・・こんな話、友人や先輩後輩を交えて語りあいたいものです。談話室で女子会とか、いいなあ。

「本州と四国を橋で結ぶ」

ふるや かずひこ
古家 和彦さん

土木工学科 3期
昭和51年3月卒業
現在：本州四国連絡高速道路株式
会社 本社 安全防災監

創立50周年おめでとう。
本四連絡橋建設で土木のロマンを
体験！橋も和高専も永遠であれ！



漫画の「土木は地球に爪痕を残す仕事だ」の言葉に魅了され土木工学科に進んだ。高専時代印象に残っているのは、4年生の時、高専祭で関門橋の現場から工事中の大パネルを借り、自分たちで模型も作り展示したこと。教授の勧めで、橋の公団を受け本四公団に入社したこと。高専も公団も実力以上の所に入れたラッキー者である。

本四では、北備讃大橋等の建設や明石海峡大橋等の管理にも携われ、仕事は辛かったことも多かったが、世紀のプロジェクトであり技術者としてすごく幸せな思いをさせてもらった。

現在、本四の橋を200年以上良好に保つよう維持管理をしている。構造物を造り守ることは……。



明石海峡大橋塔頂

「和歌山高専の創立50周年を迎え」

やまじ みやこ
山路 都子さん

土木工学科 11期
昭和59年3月卒業
現在：和歌山市役所総務公室政策
推進部 交通政策課

和歌山工業高等専門学校開設が今年平成26年で50周年を迎えるに
当たり心よりお慶び申し上げます。



私が和歌山高専 土木工学科 11期生として卒業したのは、昭和59年(1984年)、今から30年前のことです。1年間の橋梁メーカーを経て、和歌山市役所に入庁、現在に至っています。入庁後、下水道部に配属され、2期生の坂本先輩にお世話になりながら、下水の「いろは」を教えてくださいました。その後、道路、財政、秘書と土木分野以外の部署も経験し、現在、交通政策課で公共交通の確保維持という大きなテーマで仕事をしています。

振り返ってみますと、どんな職域でも立向かってこられたのは、5年間親元を離れ、女性でも何か技術を身に付ける事が後の人生に役立つのではないかと考え和歌山高専に入学し、集団生活の中で土木技術だけではなく、自立心やコミュニケーション能力も身に付けたからだと思います。和歌山高専で学んだ5年間は私にとって大変貴重な財産です。

後輩の皆さんも名田町の素晴らしい環境の中で、目いっぱい学び、遊び、そして「ものづくりのセンス」と「人の輪をつくるセンス」の両方を身に付けてほしいと思います。工学系の技術の進展は目まぐるしいものですが、基本となるこの2つがあれば大丈夫です。皆さんの今後のご活躍を期待します。

「和歌山高専との出会い」

みやた ひろよし
宮田 洋好さん

土木工学科 21 期
平成 6 年 3 月卒業
現在：株式会社 総合技術コンサル
タント 大阪支社 構造Ⅲ部

圏央道／外環道／新東名／京奈和
／那智勝浦／奥瀬等の橋梁、神戸山
手線／淀川左岸線等の開削トンネ
ルの設計に携わり、柑紀寮からの一
人暮らしを継続中



私は、「ロボコン大会」で高専の存在を知り、平成元年（1989年）に土木工学科に入学した21期の卒業生です。

5年生の授業で、非常勤講師の方が就職説明会的な講義をされ、“自分自身で計画・設計した構造物が実現し、地図に載る、転勤が無い”の言葉に魅力を感じ、その講師であった久保田先生が勧める建設コンサルタント会社に就職し、現在に至ります。

TV番組で高専を知ったことで、クラス替えがなく15歳という若さで経験した寮生活により育まれた友人、誌面では書けないことを含め様々な問題で御迷惑をお掛けした先生方、他界されましたが私の人生の道標となった久保田先生等、和歌山高専には多くの出会いがあり、私にとって大きな財産となっています。

在校生の皆様、土木業界には他の高専を含め、多くの卒業生が活躍されています。翠松会名簿を利用すれば、諸先輩方との繋がりを感じますし、他高専の卒業生とも仲間のような繋がりを感じます。縁あって和歌山高専に入学したことで出会った先生や仲間、これから訪れる社会人生活において“和歌高専”や“高専”によってもたらされる出会いを財産とし、社会で活躍されることを期待します。



【那智勝浦道路 竹向橋：和歌山県那智勝浦町】

50周年おめでとうございます！

ますだ かつみ
増田 勝三さん

環境都市工学科 8 期
平成 18 年 3 月卒業
東海旅客鉄道株式会社、現在：ジェ
イアール東海建設株式会社（出向）

5年間同じ境遇で過ごす仲間とは一生ものの絆で結ばれます。絆はより深く、より強固に。



はじめに、和歌山工業高等専門学校の創立50周年並びに、環境都市工学科（旧土木工学科）の創立45周年にあたり心よりお祝い申し上げます。

さて、私は弊社のリクルーターとして卒業後も和歌高専との関わりがあることから、なかなか「懐かしいな」と思うことが少ないのですが、この機会に自分が高専在学中の頃を思い返してみますと、環境都市工学科特有のものか、勢いと団結力があり、その持て余した力を随分と遊びに注いでしまいました。その結果、今は学生時代の教本を片手に仕事をすることが多々あります。ぜひ皆さんにはこうならないよう専門技術力を高めていただきたいと思います。

また、土木・建設系の仕事を進めていくときにはたくさんの方との関わりが必要不可欠です。その中には環境都市工学科を卒業した1400名もの先輩・後輩と関わることもあり、自分自身も、会社は違えど3期生の大先輩にご指導を仰ぎながら業務を遂行したり、中本先生に技術相談をした経験がありますが、そのとき本当に信頼できる諸先輩方とつながりが持てていることに感謝しました。皆さんにもこのつながりがあることを忘れずに、困った時には頼ってもらえればと思います。

最後に、在校生の皆さんには和歌高専の更なる発展、および未来の土木建設産業の担い手となることを願っておりますし、共に頑張りましょう！

5 + 2 = ?

つじもと よしたか
辻本 義孝さんメカトロニクス工学専攻10期
平成25年3月修了
現在：村田機械株式会社

卒業して、まだ1年余り。けど和歌山高専は、すでに僕の帰る場所、第二の故郷になっています。

「高専というのは、本科が5年間で、専攻科が2年間なんです。ですから、私は同じ高専に7年間いたんです。」

就職してから、こんな説明を何度したかわからない。高専が5年間だということは、比較的、認知されているようだが、専攻科の場合は、その存在自体をご存知ない方のほうが多いようだ。とは言え、そんなことは専攻科在学中に就職を決めた時から、予想をしていたことで、さほど驚きはしなかった。

そんな専攻科での時間は、先生は変わらないが、授業スタイルというか雰囲気は少し落ち着いて、本科の延長線のように、そうでもないところもある、そんな印象だ。ただ、7年も同じ学校にいれば、かなりの数の人と接する機会がある。特に、長い期間を学寮で過ごした私には、多くの仲間ができた。これは、つくづく良い経験だったと思う。

たまに和歌山高専に行くことがあるが、その度に“帰ってきた”という感情になる。きっとそれは、楽しかったことや苦しかったこと、いろいろあったが、和歌山高専が今の、そしてこれからの自分の原点だと、意識せずとも、心のどこかでわかっているからだと思う。

You can do it

なか ひさえ
中 久枝さんメカトロニクス工学専攻8期
平成23年3月修了
現在：アークレイ株式会社創立50周年おめでとうございます！
母校のこれからのご活躍を楽しみにしています。

電気情報工学科を卒業して6年、専攻科を修了して4年と、時が流れるのは早いものだと感じている今日この頃です。現在、私は医療機器メーカーで主に電気設計業務に携わっています。電気設計以外にも、時には機械加工・ソフトウェア改良・細胞培養等の業務もすることがあり、在学時に培った様々な経験が今に活かされていると感じています。私の在学中の経験は、例えば、卒業研究で実験に使用する鉄箱や基板を入れるためのボックス加工を、他学科の先生の協力のもと作製したこともあります。それは、先生方の協力があったからこそ経験でき、すぐに実践に活かすことができたのです。

また、私は在学時から「人に痛みを与えることなく検査・治療ができる医療機器を作りたい」という夢を持っており、それを実現するために、インターンシップでカテーテルを作製したり、医療工学のテレビ講座を受講したりしました。自ら行動したり、何にでも興味を持って積極的に取り組んだりしてきた甲斐もあり、現在は少しだけ、夢に近づくことが出来ました。

そんな私から在学生のみなさんへのメッセージは、「何か一つ、自分のやり遂げたいことを持って、それを実現するために突き進んでいくこと。アンテナを張りめぐらせて、いろんなことに挑戦すること。」です。If you can dream it, you can do it!

専攻科を振り返って

いいだ はるき
飯田 晴記さん

エコシステム工学専攻 3期
平成 18年 3月修了
現在：株式会社ダイセル



卒業後、化学工場の設備管理として、化学工学の知識だけでなく機械電気、建築あらゆる分野の知識を学び、活用しながら日々仕事に精進しております。

この度、和歌山工業高等専門学校におかれましては、創立 50 周年を迎えられますことに対し、心からお祝い申し上げます。

さて私は同校のエコシステム工学科を卒業し、専攻科としては 3 期生にあたります。本科の時に第一志望の企業に就職できなかった為、それならばより専門的な知識を学べる専攻科に進学しようと考えました。今ではそれが良い選択だったと感じています。

専攻科の魅力はやはり本科から継続して研究を実施できること、そして先輩、後輩と研究を通じて同じ時間を共有化できることではないでしょうか。私は研究が好きで、よく夜遅くまで実験もしていました。また定例の勉強会や、高専シンポジウムなど対外的な場での研究発表にも参加してもらい、大変有意義な時間を過ごしました。研究以外では、研究室の仲間の誕生会をサプライズで企画していたことも良き思い出の一つです。このように、専攻科は様々な経験を積む事ができる素晴らしいところであり、またこの経験が次の新天地で力を発揮すると確信しております。

最後に、教職員の皆様や在校生並びに OB の皆様の方で、和歌山工業高等専門学校が益々ご発展、ご躍進をとげられるよう心よりお祈り申し上げます。

7 年間に感謝して

ひがしたに まお
東谷 麻央さん

エコシステム工学専攻 8 期
平成 23 年 3 月修了
現在：東京水道サービス(株) 施設整備部施設整備第二課



職場には和歌山高専出身者がたくさんいます。このつながりを大切にしていきたいと思います。

和歌山高専は第二の故郷とも言える場所で、様々なことを私に教えてくれました。

7 年間過ごした寮生活では、15 歳から親元を離れて 5 歳以上歳の離れた先輩や後輩と共同生活を送ったことで、自立心や協調性を身につけることができたと感じます。なにより寝食を共にし、お互いの長所や短所を知り尽くした、気の置けない生涯の友人ができました。

専攻科では、他学科だった同級生との合同授業、学会発表や学位試験等、本科や大学では中々できない貴重な経験ができました。学位試験は「まじめにやっていたらほとんどの人が受かるよ。」とは言われても、やはり結果がわかるまでは不安でいっぱい、合格通知がきたときはとても嬉しく、自分で学位を掴み取ったという充足感がありました。

就職後も、学位があるというのはやはり強みで、専攻科に入って良かったと感じています。

高専生活は長いようであっという間に過ぎてしまいます。興味を持ったことにはどんどんチャレンジして行って欲しいと思います。



50年の歩み



機械工学科の歩み —平成元年から今日まで—

かしはら けいぞう
榎原 恵蔵

知能機械工学科主任



本校創立 25 周年（平成元年）以降の機械工学科（現：知能機械工学科）に関する大きな話題を挙げるとすれば、平成 15 年に実施された機械工学科棟改修工事に伴う研究室・実験室の配置変更、および平成 21 年における機械工学科から知能機械工学科への学科改組に伴うカリキュラムの変更になるであろう。ここでは、機械工学科の大きな転機となった改修工事および学科改組について記したい。

(1) 機械工学科棟改修工事

校舎の耐震補強および教室の狭隘解消を主たる目的として、平成 15 年、まず機械工学科棟から改修工事が行われることになった。教員室の運用について、これまで教員 1 人に 1 部屋が割り当てられていたが、その個室制度を廃止、2～3 名の教官が大部屋に入ることになった。また、大部屋には学生のためのスペース（主に卒業研究用）

が設けられた（写真 1）。このようになった理由は、教員と学生が空間と時間を共有することで、意思疎通が円滑になり、教育的効果が高まるということだったらしい。この大部屋計画を聞いたとき、「論文執筆に集中できないのではないか」、「学生には聞かれては困るような保護者との電話ができないのではないか」、などを危惧したが、実際、慣れてくれば論文執筆に集中することができ、機密性の高い電話をするときは、学生に一時退室してもらうことで対処できた。何より学生と同室になることで会話が増えたことは、大部屋制度が有効だという証でもある。

改修工事に伴うもうひとつの変更点として、機械工学科棟 1 階にあった流体力学実験室の実習工場（現：ものづくりセンター）への移設、2 階の物理実験室および 3 階の製図室の閉鎖がある。製図室の閉鎖は、ドラフターを使った製図の必要性と膨大な維持管理費を天秤にかけ、ドラフターを使用しない、つまり製図室の閉鎖を選択したと記憶している。ドラフターを製図するための単なるツールと考えれば、必ずしもドラフターを使って製図する必要がなく、方眼紙を使うことで手書きの製図は可能だと判断した。また、この頃、CAD による製図も始まっていたので（写真 2）、1 年生では方眼紙を使った手書きの製図、2 年生以降は CAD を使った製図という教育体系に落ち着いた。



(写真 1)



(写真 2)

(2) 知能機械工学科への改組

近年、ロボット技術に代表されるメカトロニクス分野の発展が著しく、本校でもメカトロニクス関連教育を強化しようとする機運になってきた。これを受けて、「幅広い産業における機器やシステムの設計、開発、研究、保守、操業等の業務において、創造的且つ主体的に取り組むための基礎技術や制御・知能化技術を含めた総合力を身につけ、日々進歩する科学技術を推進できる基本的知識と知的好奇心を備えた機械技術者の養成」という教育目標を掲げ、機械工学科を改組し、学生を募集、平成21年4月より知能機械工学科第1期生を迎え入れた。改組に先駆けて、学科名称についての議論がなされた際、ロボット工学科という斬新な学科名が候補に挙がったが、卒業生の就職先がロボット関係企業だけではないということから、最終的に知能機械工学科に落ち着いたとい

う経緯がある。改組に伴うカリキュラムの変更については(表1)、機械工学科の開設単位数は97単位であったが、知能機械工学科は98単位とした。開設科目の主な変更点は、メカトロニクス設



(写真3)

計(2単位)を新たに開設し、工作実習(8単位)を工作実習(6.5単位)とロボット創作実習(1.5単位)(写真3)に分け、電子制御(3単位)を電子制御Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ(合わせて5単位)にした。制御・メカトロニクス系科目を増やしたことにより、当該分野を担当できる教員の採用を進めた結果、現在の知能機械工学科の人員配置は、力学・材料系教員2名、熱・流体系教員2名、情報・制御系3名、設計・工作系3名、専門基礎3名となっている。時の校長および学科主任の尽力により、全国にある高専機械系学科の中で比較的早期に改組を実行し、時代に応じたカリキュラムを構築することができた。

専門科目(知能機械工学科)		学年別配当					備考	
区分	授業科目	単位数	1年	2年	3年	4年		5年
必修科目	応用数学	4				2	2	
	応用物理	4			2	2		
	工業外国語	1				1		
	工業力学	2		2				
	創動工学	1					1	
	材料力学	4			2	2		
	材料学	3			2	1		
	熱力学	1			1			
	工業熱力学	2				2		
	水力学	1			1			
	流体力学	2				2		
	機構学	2			2			
	機構概論	1	1					
	機構設計法	3			2	1		
	機構システム工学	2					2	
	機構工作法	3			2	1		
	機構設計製造	8	2	2	2	2		
	工作実習	6.5	2	3	1.5			
	ロボット創作実習	1.5			1.5			
	電子制御Ⅰ	2			2			
	電子制御Ⅱ	2				2		
	電子制御Ⅲ	1					1	
	自動制御	2				2		
	コンピュータ入門	2	2					
	情報処理	3			1	2		
	メカトロニクス設計	2					2	
	機械工学実験	4.5				3	1.5	
	卒業研究	8.5						8.5
小計	79	7	11	19	24	18		
選択科目	材料力学実験	1					1	
	材料強度学	2					2	
	エネルギー工学	2					2	
	流体力学	2					2	
	工作機械	1				1		
	工業工学概論	2					2	
	計測工学	1				1		
	情報工学	2					2	
	電気・電子工学	2				2		
	デザイン工学	2					2	
	企業実践講座	1				1		
小計	19					19		
開設単位数合計	98	7	11	19		61		
修得単位数	82以上					注		

注 卒業認定単位数(進級規則 第10条)
一般科目75単位以上、専門科目82単位以上、かつ合計167単位以上修得すること。

(表1)

電気情報工学科の現在と未来 - Apple が電気自動車を売る日に備えて-

さくま としゆき
佐久間 敏幸

電気情報工学科主任



電気情報工学科へ私が赴任したのは平成 19 年でした。電気工学科から電気情報工学科へ名称変更されたのが平成 16 年でしたので、電気工学科を母体に情報工学を含めて複合学科としてから 3 年が過ぎていました。電気工学と情報工学を一つの名称とする学科名に当初は違和感を覚えながらも、本校創立 50 周年となる平成 26 年で 7 年目となります。この間、平成 20 年には電気情報工学科棟の耐震工事・改装が行われ、現在の建物となりました。同じ年の秋にはリーマンショックが



ハイブリッド配電システム

起こり世界的な金融危機により急速に景気が悪くなりましたが、卒業生の就職は求人数の落ち込みが多少あったものの順調でした。日本の基幹産業である電気・電子・情報産業はバブル後の失われた 10 年で 1980 年代に隆盛を極めたことすら忘れてしまうほどに勢いがなくなっていますが、21 世紀はエネルギーと環境技術の時代であり、エネルギーと情報技術およびエレクトロニクスを有機的に統合したシステム技術の重要性がより増してくる時代であると思います。電気情報工学科の目指す人材像はまさにその分野において活躍できる人材をこれからも輩出していくことであり、複合学科名称である電気情報工学科は非常に意義深いものと感じています。

1980 年代に隆盛を極めた総合電機メーカーはその成功体験から抜け出ることができず、80



情報系研究室風景

年代半ばに主力の DRAM から CPU 製造への戦略転換を果たした Intel やその CPU 上で動くディスクベースの OS とその OS のアプリケーションソフト群を開発した Microsoft、また Xerox PARC で開発された GUI を PC に実装した Apple Computer のような変革を行うことが出来ませんでした。1990 年代は日本企業が最も得意とした高品質を実現する量産技術が Motorola や GE といった米国企業において全社的な改善活動（シックスシグマ活動）により標準化されグローバルでの量産・品質管理技術として一般化していきました。2000 年には IT バブルが終息して経済はより混沌とした状態となりました。2008 年

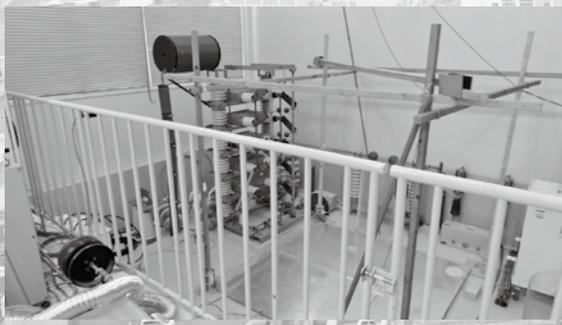
秋（平成20年）にはリーマンショックが起こり世界的な不況となりました。

日本企業の強みはデバイス品質と独自デバイスの量産体制でしたが、最終製品を差別化できず、液晶TVを例とするとその技術分野の水平分業型アーキテクチャへの転換を読み間違え設備投資競争を強いられた結果巨額の損失を被りました。かつては「材料を制するものはすべてを制する」と教えられ、3つの製品開発フェーズ-デバイスや材料の「新しい機能の提案」がある製品、デバイスや材料を組み合わせる「新しい使い心地や使い勝手の提案」がある製品、分野や国境を越えた「新しいライフスタイルの提案」がある製品-に対応した製品開発を自社ですべて抱え込んで研究開発を行ってきました。近年、テクノロジー企業のハードウェア事業への参入が一般的になってきていますが、これはEMSの普及とインターネットを基盤とした移动通信システムの統合というインフラの整備が進んだためと考えられます。ものづくりの要素であるデザイン・製造・品質保証において、製造はEMSに委託し、世界で売れる製品にするために何をどこまで汎用とするかを定義しデザインに注力する。また、オープンイノベーションで新しい技術をデザインに取り込むとともに、M&Aにより自社の研究開発プラットフォームを強化・生産規模の拡大・ブランドの強化・販路の拡大を行い、コア・コンピタンスを明確化しグローバルかもしくはニッチ市場におけるグローバル・ナンバーワンを目指すといったことが普通に行われるようになってきました。会社の名前や

事業内容が変わることも日常茶飯事です。

「幸運は準備された心に宿る」というパスツールの名言のとおり、技術者としてイノベーションを起こすために、技術の本質は知識であり、その背後にある能力であることを再認識する必要がありますと感じます。イノベーションは狙って確実に得られるものではなく偶然にまた予想外の帰結であることが多いですが、これには準備が絶対に必要です。一方、企業は存続しなければならず、この目的を最大化するために利用可能な資源をどう運用するかを戦略として、短期的な成功・失敗を判断基準とせず事前確率によって戦略を判断する必要が叫ばれるようになりました。大数の法則には背けないということでしょうか。

現在の日本の基幹産業である自動車産業は垂直統合型の産業であり、部品メーカーが供給する部品の「すりあわせ」が必要な産業です。しかしながら、エレクトロニクス化は急速に進んでおり、特に今後主流になると見込まれる電気自動車では産業構造が最終的に水平分業型になっていくのではないかと予想されます。そのときには、AppleやGoogle、日本の電機メーカーが電気自動車を売る日がくるかもしれません。その日に備えて準備できイノベーションを起こせる技術者を今後も輩出していくことを電気情報工学科の目標として考えています。



学生実験室（1F 強電系実験室）

物質工学科の歩み

どい まさみつ
土井 正光

物質工学科主任



昭和39年4月の本校設立と同時に、現在の物質工学科の前身である工業化学科も誕生し、今年50周年を迎える。この間、我々の学科は工業化学で29年そして物質工学で17年にわたり卒業生を輩出して来た。

昭和の時代（工業化学科全盛期）

実は私自身も本校の工業化学科を卒業している。当時の先生方には心苦しいが、昭和53年からの学生時代は部活が本業で余暇に勉強するというスタイルで、とても学生の見本と呼べるものではなかった。世間は、オイルショックの影響で景気も悪く、就職先も限られていたと記憶している。今と違い当時は留年する学生が多く、5年間で卒業できた同級生は驚くべきことに入学時の半数であった。反面、学生同士の連帯感は強く、例えば余裕のある者が留年しそうな同級生や後輩の勉強を手伝うのは当たり前で、寝坊して試験に来ない者を、今のように携帯はおろか電話も満足に持っていなかった時代で、走って近くの下宿まで起しに行くことが何度もあった。

平成初期（工業化学科変革期）

大学へ編入学し、助手として本校に戻って来たのは平成元年の春で、工業化学科は終盤を迎えていた。また、平成元年は設立25周年の式典が行われた節目の年でもあった。学生時代に教わった先生方のほとんどが在職されておられ、私の方は大学院を出たと言っても気持ちは学生のままであった。そのような中で、本来の講義や実験以外

に与えられた仕事の1つが物質工学科への改組と、もう1つが超電導型核磁気共鳴（NMR）装置の導入といった、共に大型予算の申請に関わるものだった。特に前者は学科の生残りを賭けたもので、当然文部省には簡単には認めてもらえず、これら2つの予算が同時に認められた平成5年まで、かなりの時間を費やすことになった。

重要な仕事だとは分かっているが、当時の自分には結果が出るまで5年と長期であったため正直重荷でしかなかった。これほど何年も申請を繰り返すのは当時でも異例で、今であれば間違いなく途中で見切りをつけられたと思う。その間、我慢強くご支援とご指導を頂いた教員や事務職員の方々には本当に感謝に堪えない。しかし、今ではどちらも普遍的なものとなり、私にとって当時の仕事は掛け替えのない財産であり思い出となっている。

工業化学から物質工学への改組は、バブル期に開花したバイオの分野を従来の工業化学の分野に加えると言ったもので、文部省主導であったが独自性に富み4年生から物質系と生物系の2コースに分かれるといったシステムは今もなお継続されており、さらに新棟増設と教員の定員増まで含まれていたため非常に大きな変化を伴った。特筆すべきは、これを契機に土木工学科改組（平成6年）や専攻科新設（平成14年）など、次々と本校にとって大きな変化がもたらされたことである。また、推薦入試が平成3年に始まり女子学生が急増したのも、創立初期からおられた学科の顔とも呼べる重鎮の先生方が定年などで学校を去られたのもこの頃からであった。

現在（物質工学科全盛期）

時は流れ、工業化学科卒のOBが教わったほとんどの先生方は既に退職された。寂しくはあるが、一方で改組後の物質工学科1期生が既に本校教員として教壇に立っており、存じ上げるだけでも私を含め本校に2名と他高専（旭川、東京、鈴鹿2名、新居浜）に5名の教員を我々の学科か

ら輩出していることは喜ばしい限りである。

高専は設立当初から実践的技術者の育成を目標に掲げ、実際多くの企業に卒業生を送り出して来た。そして、大勢のOBが非常に高い評価を受け、そのお蔭で今もたくさんの企業から求人を頂いている。50年の間にはオイルショック、バブル崩壊さらに近い所でもリーマンショックなど危機的な状況下で困難な時期もあったが、その度に県内企業をはじめOBの皆様のご協力でこれまで持ち堪えることができたと考えている。

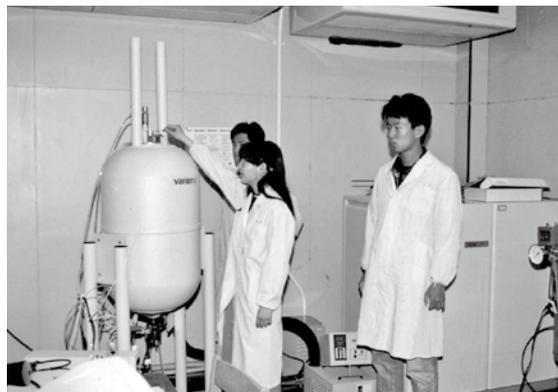
また、進学者数は年に5~10名と言う時代が長く続いたが、10年ほど前からは専攻科へ進む学生も増え、物質工学科ではここ数年に限ると進学者数が就職者数と同じか、上回る状況が続いている。中には、大学院を出て将来は高専の先生になりたいと明言してくれる学生もあり、微笑ましく思うと共に彼らを日々支えてくれている先生方には頭が下がる思いである。

未来へ

改めて思うのは、先輩教員の皆様のご苦勞され

そして実践された、一枚岩で学生指導に当たると言う伝統は今も引継がれており、学生にとってはある意味迷惑なことかも知れないが、これは何物にも代え難いものだと思う。現職の我々は一層身を引締め歴史に甘んじることなく、良き伝統を未来につなげる努力をしなければいけないと今更ながら感じている。

最後に、公私共に特にお世話になった故橋本巖先生、そして学生時代から尊敬する先輩であった故塩路修平先生に謹んで哀悼の意を表します。



NMR装置の導入（平成7年撮影）



物質工学科1期生（平成8年春撮影）

環境都市工学科の歩み

つるまき みね お
鶴巻 峰夫

環境都市工学科主任



(写真2)

たことが特筆される(参考例 写真2)。拡充は所属教員の専門分野のほぼ全領域にわたっている。

1. 概要

環境都市工学科は本校の開校に遅れること5年、昭和44年4月に土木工学科として開設された。したがって本校50周年の今年度は学科創設45周年に当たる。平成6年度に名称を現行に変更のうえ改組されて今日に至っている。ただし、英語名称については現在でも「Civil Engineering」を用いており、学科創設以来の基本的スタンスは、下記の求める学生像のように変わっていない。

- ①街、道、川、港、橋などを作ることや、私たちを取り巻く環境問題に関心が高く、将来この分野の仕事をしたと考えている学生
- ②理科や数学が好きで、さらに知識を深めたい学生
- ③何よりも強い学習意欲を持って高専生活を送ることのできる学生
- ④自分の考えを言葉や文章で説明できる学生

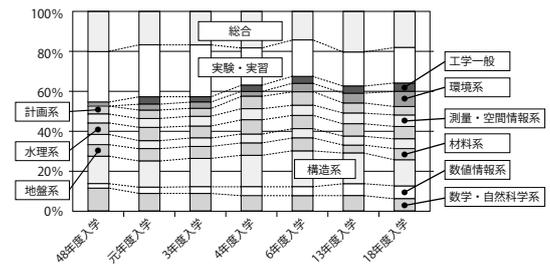
校舎は、他の3学科の学科棟が改修された一方で当科の計画はあったもののトイレ等の改修等一部の改修にとどまっている(写真1)。実験・実習設備については徐々に設備補強が進んでいるが、平成23年度末の大型予算で拡充がなされ



(写真1)

2. 教育課程

教育課程(カリキュラム)は、この45年間で6回改定が行われている(図1)。実学的な教育



(図1)

を目指す高専の特徴である実習・実験及び卒研を含む総合科目とともに構造系の科目が重視されている。コンピュータの必要性から数値情報処理系の科目が徐々に増加されるとともに改組に伴い平成13年度以降、環境系の科目の増設も行われた(測量実習の様子 写真3)。



(写真3)

専門科目における必修科目は初期に比較的単位数が多く、平成元年から平成3年入学生に適用された課程

では開設97単位中78単位が必修となっているが、現状では開設92単位に対して60単位となり、学生の自主性の重視と負担の軽減が考慮されている。今後も時代の要請に応じて改定が必要であり、

喫緊の事項としては高専機構から示されたコアカリキュラムへの対応が必要となってきた。

3. 教員

教員は初年度入学生が卒業した昭和48年度では10名であった。現状は11名でありほとんど人数的に変化はないが、専門分野別に見ると、昭和48年度では構造系3名、材料、地盤、水理系がそれぞれ2名、計画系が1名となっている。平成25年度での構成では、構造系、材料系、地盤系、環境系がそれぞれ2名、水理系、計画系と物理が1名である。環境系の教員は平成15年度と17年度にそれぞれ社会人を採用した。また、学校の方針で従前は総合教育科配属となっていた物理が専門の教員を当科のスタッフとして平成25年度に迎えている。専門課程の教員のみでは特に低学年の学生の情報が不足する場合があります、その点でも重要な戦力と言える。

当科の教員の特徴として、国や県、市町村が設置する諮問委員会への参加による社会貢献があり、他の学科の教員にはあまり見られない形の貢献を行っている。国の常設委員会では国交省近畿地方整備局和歌山河川国道事務所流域総合評価委員会、県では和歌山県事業再評価委員会、市町村では御坊市都市計画審議会など、他に臨時の委員会へ多数貢献している。

4. 学生の活躍

土木系の学生が挑戦できる競技会として「全国高等専門学校デザインコンペティション」(高専デザコン)がある。構造部門、空間デザイン部門、環境デザイン部門、ものづくり部門があり、構造部門以外は開催が年度によって多少異なる。当学科の学生は構造部門は継続的に参加しており、他の部門にも参加している。平成21、22年度には優秀賞(最優秀賞に次ぐ2位)に輝いている。また、近畿高校土木会が開催するコンクリートカーヌー大会に毎年度参加しており、平成23年度には総合3位に入賞している(コンクリートカーヌー

競技風景 写真4)。

研究の分野では、平成23年度に2名の学生が土木学会教育賞を受賞している。



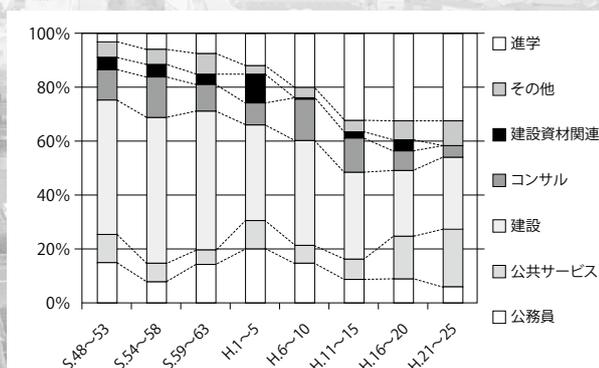
(写真4)

5. 進路

卒業生の進路の推移を5年ごとにまとめてみた(図2参照)。就職先の分類は公務員(国、地方自治体)、公共サービス(電力、ガス、鉄道、道路、水資源等)、建設会社、コンサル(建設コンサルタント、測量等)、建設資材関連(鉄鋼、セメント、コンクリート製品等)、その他とした。

進学が徐々に増加して平成11年度以降ではほぼ1/3で推移している。

就職先としては近年JRをはじめとする公共サービスに分類される企業への人気が高い。これらは本を正すと公社、公団等の公営企業であり、安定志向の表れと考えることができる。同じ安定性があっても公務員については就職決定時期や求人数の絶対数の関連で学生としては選択しにくいものと考えられる。



(図2)

総合教育科の歩み

もりかわ ひさし
森川 寿

副校長



和歌山高専の学生は4つの専門学科のいずれかに所属していて、表向き総合教育科に所属する学生は一人もいない。しかし、総合教育科が提供する一般科目を全学科の学生が履修し、その必修科目が75単位と、卒業に必要な167単位の約45%を占めていることを考えると、実質、高専生全員が総合教育科にも所属していると言えよう。その教育は、幅広く深い教養および総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養することを目標としている。一般科目を通して、学生は、専門学科の知識・技能を修得するための基礎学力を構築するだけでなく、国内外の急速な変化に柔軟に対応し、自ら問題を発見して解決に努力する社会人として必要な人間力を身に付けることが期待されている。本稿は、学生の実態や文部科学省、産業界など社会の要請に合わせて、一般科目教育が技術者教育の基盤を形成するためにどのように成長してきたかを振り返り、将来を展望するものである。

創立25周年式典を挙行了たのが平成元年であったので、50年史の後半はまさに平成の歴史であり、それは大幅なカリキュラム変更で始まった。まず、平成元年度には、それまで6単位あったドイツ語のうち、2単位を「外国語(Ⅰ)～(Ⅳ)」という選択必修の科目に振り替えて、英語とドイツ語の4種類の科目から選ぶことにした。これにより、5年生でも英語を続けて学習したいという学生の要望に応えることができた。次に、設置基準の大綱化で卒業に必要な単位が見直されたので、平成4年度から単位数を調整した。具体的

には、社会科、数学、英語、ドイツ語をそれぞれ1単位ずつ減らし、芸術は音楽と美術の1単位ずつであったが美術を廃止して音楽だけとした。一方、理科教育を充実させるために「生物」1単位を新たに開設した。



授業風景(体育)

平成10年頃から、全校的に教育内容の見直しを図る議論が活発化した。一般科目と専門科目における授業内容の連携が大きな論点となった。その数年後から、数学教育は、電気工学科(当時)では原則として専門教員が担当することになって現在に至っている。また、物理は機械工学科、化学は物質工学科が中心となって科目の授業計画を立てて教員を配置する体制にもなった。

平成13年度には、進級規定の改正に伴って、科目の単位を分割して、それぞれの授業目標と内容を分かりやすくした。例えば、社会科では、1～3年で世界史、日本史、政治・経済各3単位としていたが、それぞれ2単位とし、残りの1単位で1・2年では「環境と社会」、3年では「倫理」を開設して、現代社会の動向に対応して社会人として必要な教養を身につけるようにした。



授業風景(世界史)

なお、現在では2年生の1単位は「現代の世界」と内容を改めている。他の教科でも、数学では各学年を「 α 」と「 β 」に分割して、それぞれの科目で担当する分野を明らかにし、各学年で一括りにしていた英語も、「英語総合」「英文法」「英会話」「英作文」と分割した。なお、平成25年度から施行された高等学校指導要領に配慮して「英作文」を「英語表現」に改めて今日に至っている。

平成14年度には専攻科が発足し、一般科目として「時事英語」「実用英会話」「現代アジア論」「ビジネスコミュニケーション」「テクニカルライティング」が開設され、後に「技術者倫理」が加わった。科目名から推察できるように、専攻科では、国際的コミュニケーション力と技術者としての倫理性の涵養のために貢献している。専攻科1年生には、発足1年目から年2回TOEIC IPテストを実施して、実践的英語力の養成と意欲増進に努めている。TOEICは、次で述べる5年生「英語A」履修生にも実施し、平成21年度からは、4年生全員に受験させて卒業後に求められる実践的英語を実感させている。

平成16年度には、必修単位であったドイツ語を「第2外国語A～C」として4～5年生で合計5単位の選択科目とし、学生がドイツ語、フランス語、中国語の3か国語から選べるようにした。合わせて、英語とドイツ語から選べるようにしていた5年生の「外国語（I）～（IV）」の代わりに英語のみの選択科目「英語A・B」を開設した。



授業風景（英語）

また、同時に5年生で選択科目として開設された「地域と文化I～IV」では、社会科教員と外

国語教員が2科目ずつを担当している。さらに、平成20年度には5年生を対象に選択科目「知的財産権」が開設され、企業人として必要な法令の知識を教授することになった。

3年生対象の国立高等専門学校学習到達度試験は平成19年度に数学で開始され、翌年物理が加わった。本校では、当初あまり振るわなかったが、数学および物理担当教員が試験対策に尽力した結果、近年では全国の平均点を上回る成績を上げるようになった。

海外からの留学生が円滑に本校の授業に溶け込めるように、一般科目でも特別なカリキュラムを設定している。昭和63年度に最初の留学生を受け入れて以来、3年次の国語と社会科、さらに4年次の社会科の科目を、「日本語」と「日本事情」という留学生用の科目に置き換えて、外国人が日本社会をよく知ってもらえるように配慮してきた。

平成11年度から、一般科目でも公開講座を開始した。当初は御坊市中央公民館だけで開いていたが、17年度からは和歌山市の県立図書館文化情報センターでも開催している。専門学科の公開講座ほど受講者は多くないが、息長く続けている。

平成25年度から、教員集団名を一般科目から総合教育科に改めた。名称の改正は、少子化の傾向とともに学力にばらつきの出てきた学生たちが21世紀の国際的技術者に育つためには、その基盤となる知力、体力、社会人として必要な教養を総合的に涵養するように、教員全体が一丸となって努力を続けていく決意の表れである。



公開講座（平成24年9月）

専攻科のこれまでの歩みと今後への期待

ふじもと あきら
藤本 晶

専攻科長



【専攻科設置と歩み】

平成9年に赴任された興地斐男校長から専攻科設置の検討を指示され、機械工学科の坂田光雄先生と共に専攻科設置プロジェクトを立ち上げました。当時は「専門学科の助教授以上の1/2以上が博士号を持っていること」という、今では当然のこのようにクリアしている文部科学省の専攻科設置の条件すら満たせていませんでした。

在籍教員の博士号取得の推進や学科間の異動等、考えられることをすべて実行した結果、平成14年4月に「メカトロニクス工学専攻」と「エコシステム工学専攻」の二つの専攻からなる専攻科が設置されました。最初の専攻科が奈良高専と新居浜高専に設置されてから10年後のことでした¹⁾。

当初は、専攻科の授業だけでなく、外部単位の取得が義務づけられる等、独立性が担保されているのかどうか、怪しいものでした。しかし多くの関係者の努力によって、外部単位も不要になり、徐々に成熟した教育システムが構築されてきました。

知名度の低さから心配された就職や進学も、進路担当者の努力により、今日まで決定率100%を維持しています。最近では専攻科の欄を設けた求人票が当たり前になり、専攻科修了生だけを対象にした求人も珍しく無くなってきました。進学でも旧帝大等の有名大学の大学院への進学も増えてきました。また幾つかの大学院と推薦入学協定を結ぶこともでき、修了生の進路も徐々に広がっ

てきています。

【JABEE・機関別認証評価の認定】

欧米で始まった工業教育の質の保証の流れに呼応して、日本技術者教育認定機構（JABEE）が発足し、工科大が認定を受け始めました。それに合わせて専攻科も、本科4、5年と専攻科を併せた4年間で認定を受けることになりました。

専攻科がJABEE認定を受けるようになった時期と相前後して、法律で義務づけられた機関別認証評価の受審も始まりました。本校は平成18年に機関別認証評価を受審し、高等専門学校評価基準を満たしていると認定されました。翌平成19年には「地域環境デザイン工学」の教育プログラムでJABEEの基準を満たしていると認定されました。

これら二つの認定に共通しているのは、教育の質の保証と社会への説明責任でしょう。教育目標や卒業生像を明確にすることで、教育機関としての役割や使命を明確にし、また成績評価の根拠等を明らかにすることで、どのような指導をしているのかを社会に示すことになったのです。

【学位問題】

大学と同じ22歳まで教育を受けた専攻科修了生は、大学評価・学位授与機構にレポートを提出し、試験に合格することで「学士」の学位を取得することができます。これにより専攻科修了生は、社会的に大学学部卒と同等だと認められたことになります。

大学が自分達の判断で学生に学士を与えるのに対して、専攻科修了生は外部機関に個人で申請し、学士を取得する必要があるのです。申請の時期が早い、認定決定が遅い等に加え、当初は試験に落ちても、その理由が明確でない等、多くの問題点がありました。中でも指導した学校で判断できないことは、教育上大きな支障となっていました。

どこの大学でも出している「学士」を、自分達の判断で出せないという現実、上記の表面的

な問題だけでなく、教員やそこで学ぶ学生のモチベーションに直結する問題なのです。幸いなことに多くの方の努力によって、認定を受けた高専では平成26年度専攻科入学生から、高専の判断で学位を与えることが実現する予定です。

【改善すべき問題】

専攻科修了によって学士の学位が取得でき、JABEEの認定を通じて専攻科修了生は国際的にも大学卒程度と認められるようになりました。しかしこれは高専にとって必ずしも良いことばかりでは無いと考えています。

その最も大きな問題は、専攻科が大学学部卒と同程度だと社会から認定されることが、高専本科の立ち位置を下げかねないことなのです。専攻科修了生が学部卒と同程度なら、専攻科修了生より教育期間が2年短い本科卒業生は学部卒よりも到達レベルが低く見られるのです。

高専は今日まで、「専門領域において大学学部卒」を目指してきました。学部卒程度の力を持った本科卒業生に、更に2年の専門教育を行った専攻科修了生は、学部卒を超える実力を持っていても不思議ではありません。専攻科修了生が学部卒と同程度だとすることが、肝心の本科の立ち位置を下げているのです。これが専攻科設置に由来する最も大きな、そして改善すべき問題だと考えています。

【専攻科への期待】

色々な問題があるとしても、専攻科の設置は和歌山高専にとって大きな変革をもたらしました。その最も大きなことは、研究水準の向上でしょう。専門学科ではほぼ全員が博士号を持つようになりました。それに加えて、本科の卒業研究と専攻科の特別研究を合わせて3年間にわたって同じテーマで研究を続ける学生が出てきました。

これは年齢が2歳若いことを除けば、専攻科修了生は研究面で修士課程に匹敵する実績を持っていると言っても過言では無いでしょう。勿論研

究実績があるからと言って、専攻科修了生に修士を与えるというのは、余りにも無理筋です。そこで学士や修士といった既存の尺度ではなく、確固たる理念の下で²⁾独自の称号を検討しても良いように思います。

【今後に向けて³⁾】

大学の評価は主としてその大学の最高学年の成果、すなわち博士課程の学生の研究成果が目安になるでしょう。同じように高専では、専攻科生がどのような研究成果を出しているかで、その高専が評価されるのです。その意味で専攻科の持つ意味は、単に2年間の教育システムが付け加わった以上に大きいものがあります。

専攻科でどのような研究をし、どのような成果を上げるかが、これまで以上に問われるでしょう。このときの成果は、既存の大学と同じである必要はありません。むしろ大学とは異なる、高専だからできる、高専の特色を前面に出した成果が必要になるのです。高専の特色を持った研究成果が次々と出てくる、それが専攻科の高度化だと考えます。

高専に専攻科が設置されてまもなく四半世紀が過ぎようとしています。専攻科の設置は高専設立以来の最も大きな変革であり、大きなインパクトを与えたことは間違い無いでしょう。この専攻科をどのように発展させられるかが、高専の今後に大きな影響を与えるものと思います。今後の専攻科が高専全体にとってよりよい方向に進むことを願っています。

- 1) 藤本品, “10年遅れの専攻科設置”, 和歌山高専学園だより, 第66号, p.5.
- 2) 藤本品, “専攻科にも明確な『理念』が求められる”, 日本高専学会誌, Vol.17, No.2, pp.62-63 (2012).
- 3) 藤本品, “専攻科の発展に期待する — 解決すべき課題と将来への展望 — ” 日本高専学会誌, Vol.18, No.1, pp.3-7 (2013).

教務関係五十年の歩み

よねみつ ひろし
米光 裕

教務主事



(写真1) 生物系科目を取り入れ改組した物質工学科

高等専門学校（以下、高専）は、1962年、日本の高度成長期の工業発展を支える中堅技術者育成のため、「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的」（学校教育法第115条第1項）に、中学校卒業生を受入れる5年制の高等教育機関として全国的に創設された。和歌山高専はその2年後の1964年に、機械工学科、電気工学科、工業化学科の3学科で発足した。1969年には土木工学科を新設した。

和歌山高専は今年度創立50周年を迎えたが、創立以来多くの優秀な技術者を輩出し、各方面から高い評価を受けている。しかし、その間に国内外の社会・経済情勢は大きく変貌し、特に工学分野では、ロボット、情報、バイオ、環境等に関する技術が急速に発達し、それらを活用した産業が発展してきた。本校ではこの変化に対応するため、1993年に工業化学科を物質工学科に改組し、化学分野に加えてバイオ分野の科目を増やして物質（化学）と生物の2コース制を敷いた（写真1）。1994年には土木工学科を環境都市工学科に改組し環境分野の科目を整備した。2004年には電気工学科を電気情報工学科に改めて情報工学分野の科目の充実を図り、2009年に機械工学科を知能機械工学科に改めてロボット工学分野の科目を充実させた。これら高専本科の学科の改編とともに、2002年には高専本科卒業生が更に高度な知識や技術を修得できる専攻科（メカトロニクス工学専攻、エコシステム工学専攻）を設置し、7年一貫の高度技術者教育システムを構築した。

高専の育成する人材像も、時代の変化に伴い、設立当初の「中堅技術者」から「発想力豊かな実践的技術者」（「21世紀の大学像と今後の改革方策について」（答申）大学審議会 1998年10月）、「工学基礎教育、体験重視型の早期創造教育・人間教育により、基盤となる幅広い知識・技術とともに、特定の専門工学領域において基礎的知識・素養をしっかりと身につけた実践的・創造的技術者」（「高等専門学校教育の充実について」（答申）中央教育審議会 2008年12月）と変化してきた。本校の現在の教育研究理念もこれに沿った内容となっている。

近年、高等教育機関の質の保証が国際的に重要視されてきている。本校は、2006年に独立行政法人大学評価・学位授与機構による機関別認証評価で高等専門学校評価基準を満たしていると認定された。この機関別認証評価は7年以内毎に受審することが義務づけられているが、本校は2013年にも引き続き認定された。また、2007年には本科4年生から専攻科2年生までの4年間の教育が「地域環境デザイン工学」教育プログラムとして、日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定基準に適合していると認定された。JABEEは技術者教育認定の国際的枠組みであるワシントン協定に加盟していることから、その認定は、工学系高等教育機関で行われている技術者教育の国際的な質の保証といえる。本校では2012年にも引き続き認定された。以上のことから、本校は工学系高等教育機関としての質が国際的にも保証されて

いる。

本校の教育の質を維持・向上させるためには、教育システムの充実と同時に優秀な学生の確保も重要である。そのためには基本的に入試倍率（受験者実数 / 合格定員）を高くする必要がある。しかし、日本の人口は2004年をピークに減少に転じ、高専を受験できる全国の中学3年生の数も2004年の約131万人から2014年は約120万人まで減少した。和歌山県においても中学3年生の数は2004年の10,888人から2014年の9,877人まで減少している。このような少子化の流れの中で入試倍率をいかに高く維持するかが課題である。

本校では、先述の学科改組に加えて、学校説明会やオープンキャンパスの実施、教員による中学校への広報活動、公開講座や出前授業並びに女子学生対象宿泊型高専体験プログラムの実施等の努力を重ねてきている。また、入試方法についても検討を行い、2005年度から新たにAO入試（Admission Office入試、現体験実習入試）を全国の高専に先駆けて導入した。現在では、中学校長推薦入試（合格定員の30%程度）、体験実習入試（同20%程度）、学力入試（同50%程度）の3種の入試を実施して、多様な技術者人材の確保に努めている。これらの努力により、最近10年間の入試倍率には、年度による変動はあるものの顕著な減少傾向は見られず、おおむね1.5倍で推

移している。しかしながら、30年前の入試倍率（2.5倍）に比べると大きく低下しており、入試倍率の維持は今後も大きな課題となるであろう。なお、本校では1年次入学以外に、3年次に外国人留学生を1～3名、4年次に高等学校卒業生を数名、編入生として毎年受入れており、優秀な学生の確保に努めている。一方で、本校全学生数に対する女子学生数の割合は、物質工学科及び環境都市工学科の改組をきっかけに大幅に増加し、現在では約14%となっている。今後、女子入学志願者数の増加が優秀な学生の確保の鍵になると思われる。

卒業生の進路について、本校本科の目的は技術者人材を世に送り出すことであるが、一般的に高学歴化が進む中、本校においても進学率が徐々に増え、現在では卒業生の4割強が本校専攻科または大学の理工農学系学部（3年次編入）に進学している状況で、多様な進路となっている。

以上、本校の教育組織、育成する人材像、教育の質の保証、入学者の確保、進路の多様化について、変遷の概要を述べた。今後益々進む技術革新、グローバル化、少子化、財政減少等の社会・経済情勢の変化の中で、社会から今以上に必要とされる魅力ある和歌山高専に進化するためには、現在の教育活動の充実に加え、国際的に活躍できる人材や持続的な社会発展に貢献できるイノベーション人材の育成の工夫、また地域や産業のニーズに応える融合複合分野への教育研究内容の展開など、たゆまぬ改革が必要である。



(写真2) 認証評価認定証およびJABEE認定証

学生寮の歩み

やまかわ あやのり
山川 文徳

元寮務主事



はじめに

昭和39年4月に新入生男子77名を迎え入れ運用開始した学生寮は、昭和43年、寮生からの応募を元に「柑紀寮」と命名された。平成元年には総勢510名（男子499名、女子11名、この内留学生は男子3名）と収容者数を拡大、その25年後となる本年9月には8号館の新たな運用に伴い、総勢570名（男子491名、女子79名、この内留学生は男子6名、女子2名）を収容する全国有数の大規模寮として再スタートする。平成元年から現在に至る間には、寮監業務の教員分担、専攻科新設、国際交流事業の開始、女子学生および留学生数増加への対応、保安対策の強化、設備の近代化、居室の個室化等、本校や社会の変化に応じた様々な取り組みが学寮において行われてきた。これらの取り組みを交えながら、創立25周年に当たる平成元年以降の「学寮の歩み」を以下の5項目に分けて振り返る。

1. 学生寮の運営体制

学生寮の運営は、昭和42年に導入された寮務主事を中心とする体制（図1）を基本的に引き継いでいる。但し、昭和48年から採用された寮監1名の業務は平成14年11月より全教員で分担する事に変更となった。また、3名であった寮務主事補は平成26年から4名に増員された。寮務主事は、寮務主事補、学生課長、寮務係長および学寮委員等の学寮委員会メンバーと綿密に連携しながら寮運営の任に当たっている。その業務内容の主なものに、学寮委員会開催や次に記した指導

寮生および寮生会役員に対する指導等がある。この他、平成16年からの5年間に限っては、中国の上海電機学院と本校との短期交換留学を取り纏める国際交流委員長を兼務した。

2. 寮生の指導体制

寮生の日常生活における指導の多くは専任の寮監の業務に含まれていたが、上記のように平成14年に変更された後は、全教員が指導当直を交代制で担当する制度が取り入れられ、指導当直では低学年の寮生の指導に重点を置いてきている。

これとは別に寮生自身による2つの指導体制が代々継承されている。その1つが寮務主事推薦で校長が任命する指導寮生の制度であり、もう1つが寮生から選出され校長が任命する役員で組織される寮生会である。この内、寮生の生活指導に当たる指導寮生制度は寮生の日常生活を支える上で大きく貢献している。本制度に関しては、平成7年に初めて実施した他高専寮の視察とそこでの交流会が当時の指導寮生に大きな意識改革を呼び起こしたといわれ、以降の彼らの目覚ましい活躍が良き伝統となって今日の指導寮生に受け継がれている。一方、寮生会の方は、寮内での広報や環境整備、またレクリエーション等のイベントを企画する等の活動を行い、寮生の交流を推進する組織としてその役を立派に果たしている。

3. 清掃と生活指導

「ぴかぴかだった廊下が土足で汚され、再度ぴかぴか状態にしても程無く土足で汚される…」この言葉が、寮の清掃を業者が年3回行っていた当時の状況を表し、過言とは言い切れない過去があった。現在は視察者も多く訪れ模範寮としての評価が高いが、この間にはターニングポイントとなる何かがあったと考えられる。平成7年からの数年の間に、指導寮生による他高専寮の視察、共有スペース清掃の業者から寮生自身への切り替え、グリーンキーパー制度の導入等、新たな試みが次々に実施された事、同時に、歴代寮務主事を

中心に指導寮生研修会や全寮生対象の定期生活指導等が精力的に行なわれてきた事等と無縁ではないと思われる。

4. 寮食堂と寮設備

平成14年、食堂業者選考に関し、一般競争入札では順位がつかない事態への対応として試食審査が導入された。審査には学寮委員会メンバーの他、寮生の代表数名も参加し、食に対する関心を高める効果をもたらしている。1日3食の費用は永らく665円と全国でも有数の低価格を維持してきたが、寮生からの内容充実に対する要望もあって、平成25年からは725円に変更した。

寮の設備については、IH（平成18年）、エアコン（女子寮は平成19年、男子寮は平成23年）、学寮内ネットワーク（平成25年）等が順に整備され近代化が一段と進んだ。また、鍵の電子化および監視カメラの整備等による保安設備の強化が毎年のように進められ今日に至っている。

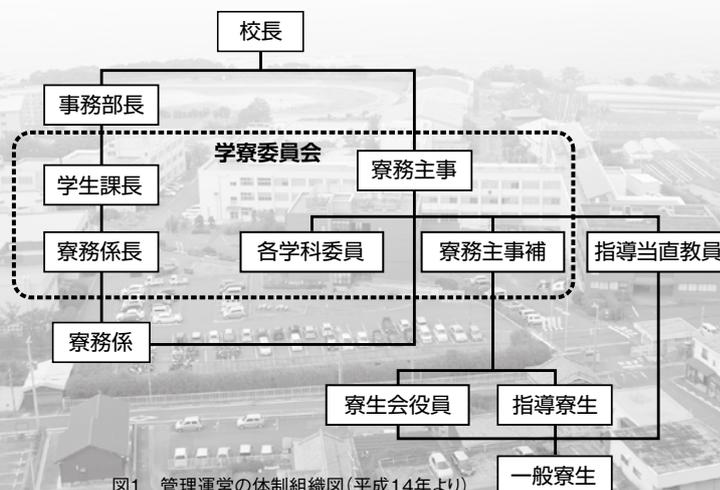
5. 入寮希望学生増加への対応

平成元年以降、専攻科新設による学生数の純増、女子および海外からの学生の全寮生に占める割合の増加、入寮希望者の大幅定員超過といった状況があり、次のような対応が行われた。

専攻科生受け入れ開始の平成14年から、専攻科1年生に対する部屋を6号館内に確保し、希望者全員の入寮を可能にした。女子寮は管理室と共に場所を移動させ、当初7号館にあったものを、平成4年に2号館の3階全部と2階の半分へ、平成7年に2号館全体に拡大、平成19年には耐震化工事に伴い全面改修した1号館へと移した。さらに、本年からは7号館を第2の女子寮として運用する事も始めた。留学生対応では、男子は6号館1階に、女子は女子寮1階に部屋を確保し、平成21年には、男子留学生専用の調理室が手狭となったため、調理室を2室に増やした。毎年、対応に苦慮してきた入寮希望者の定員超過問題については、本年、待望の8号館が竣工する運びとなり、解消に大きく貢献するものと期待されている。さらに、これに合わせて3人用の部屋は2人用となり、柑紀寮は全館が個室と2人部屋のみからなる学生寮に生まれ変わる。

あとがき

寮内の寮事務室を拠点に、寮生の傍らにて寮生と多くの時間を共有する寮務係長をはじめ寮スタッフの皆さんの献身的な働きなしで、今日のような柑紀寮の実現は難しかったと思われる。この場をお借りし感謝申し上げます。



厚生補導の歩み

なかもと じゅんじ
中本 純次

学生主事



二十五周年記念誌（平成元年11月刊行）においては、厚生補導関係には25ページが割り当てられているがその内のほとんどをクラブ・同好会関係で占めている。五十周年記念誌では、クラブ活動は別項目としてまとめられるとともに、体育大会関係の結果等については、資料編にまとめられることから厚生補導としては2ページの割り当てとなる。なお、十周年記念誌においては厚生補導関係としてのページは設けられていない。

厚生補導の目標は「学生の人間形成」にあるとされるのは創設時より変わらないと認識している。現行の厚生補導委員会規則は、平成5年4月に制定（最近改正16年4月）されたが、39年度の設立当初より現在まで厚生補導委員会という名称は変わっていない。

以下、二十五周年記念事業以降の特筆すべき事項や学生の動向について触れたい。

体育施設の計画的更新について

体育施設・設備の老朽化による安全性・機能性の低下が近年の大きな課題となっている。これは、本校のみならず全高専共通の悩みである。今後、応急的対策とともに計画的な整備・更新を推進していく必要がある。

課外活動について

現在、体育系20クラブ、文科系11クラブ、その他ボランティアやコンテストなどの7グループがあり、概ね活発に活動している。一方、クラブ数の増大に歯止めがかかっていない状態であり、活動場所の確保とともに、引率指導等活動に対する顧問の業務が増え、複数体制で指導してい

るものの本来業務を圧迫しかねない状態の改善が課題である。外部人財・内部人財に活躍して貰える環境整備を進めていく必要性を痛感している。

これまで、クラブ活動等は夜間（21:00まで）練習を認められてきたが、学生の本分は勉学にあること、学寮の日課（自習時間）との整合性を持たせるために、今年度より19:00までに変更した。

高専体育大会

女子学生の増加（本科生113名：外国人留学生2名を含む）に伴い、バレーボール部およびバスケットボール部においては、女子チームが結成され高専体育大会でも活躍するなど女子の活躍が著しい。平成4年の完全週休2日制の導入に伴いクラブ活動時間が減少したこと等による一時の低迷期を脱して、近年地区大会を勝ち抜いて全国大会に出場するクラブが増えていることは大変嬉しいことである。



補導・交通安全

昨年度、外国人留学生（私費留学生）による刑事事件が発生し、退学処分が下されたことは遺憾である。

近年、倫理観の欠如したSNSの利用、犯罪への悪用等ネットに係る犯罪等が社会的な問題となっている。学生においては、無断で他人の写真や情報等を投稿したり、自分の情報を無造作に掲載するなどが多発する状況にある。SNSに関する講演会を複数回開催するなど対応しているところである。

交通違反、交通事故については減少傾向が窺えるものの、数年に一度程度死亡事故が起こっており、交通安全講習会や二輪車安全運転講習会を開催す

るなど安全意識と技術の向上に取り組んでいる。

高専祭

高専祭は、昭和41年度から学生の自主活動の場として始まった。以来、学生会の最大のイベントとして毎年開催されている。近年は、土日の2日開催で、中夜祭にはビンゴゲームで大いに盛り上がっている。1年生による演劇コンテスト、カラオケ大会、ダンス、屋外演奏、漢前コンテスト等々盛りだくさんの出し物とクラブバザーが人気で毎年多くの来場者で賑わっている。昨夏、福知山市の夏祭りで多数の死傷者を出す火災が発生したことを受け、厳重な管理を指導した。

学生相談室

学生相談室は、学生一人一人が悩みつつも成長していけるよう、担任、教科、学寮、厚生補導などとは独立して、どんな相談も受け入れ、秘密は厳格に守りつつ、解決への方向を共に考えサポートすることを目的として設置されている。カウンセラーによる相談は、国際交流会館のオレンジルームで行っている。カウンセラーは、2名が週2日（各1日）来校して頂いている。平成25年度は、カウンセラーへの相談件数が延250件、看護師への相談が180件と相談者数は年々増加傾向にある。なお、相談のほとんどは、健康・精神衛生上の相談である。

学生指導支援

近年、ADHDなどいわゆる発達障害を抱え支援を必要とする学生が増加傾向にある。当該学生が深く関わることになる担任、学生相談室長、学科教員、教務および学寮関係教員、看護師など個々の学生に応じた支援WGを早期に結成するとともにきめの細かい支援を目指している。

人権教育

学内差別事象を受けて昭和49年8月に発足した同和教育委員会は、永らく同和問題を中心に活動を行ってきたが、活動が幅広く人権を対象とするようになっていたこと、また地対財特法が次年度期限切れとなる平成12年4月に人権教育委員会に衣替えされた。近年は、SNSを通じたいじめや誹謗中傷などが大きな問題となっていると認識

している。また、近畿地区7高専では、人権教育推進連絡協議会を毎年持ち回りで開催している。

進路対策

学修時間の確保および外国留学の推進等を目的として、平成27年度卒業生から就職活動にかかる「広報活動」は3月以降、「採用選考活動」は8月以降に後ろ倒しされることとなった。今年度については例年通り（広報活動12月、採用選考活動4月）で進路指導は順調に推移しているが、来年度については不透明なところもあり、情報収集に努めているところである。

優秀学生表彰

「卓越した学生に対する平成24年度授業料免除について」平成24年3月付の高専機構理事長裁定を受けて、5年生1名を選考する申し合わせを制定して対応するとともに、同年度末に制定された「独立行政法人国立高等専門学校における卓越した学生に対する授業料免除について」の理事長裁定が施行されることとなった。

防災対策

平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う巨大津波による甚大な災害及び同年8月25日に発生した台風12号による豪雨災害はいずれも激甚災害に認定される大規模で壊滅的な被害となった。それ以降も集中豪雨による甚大な災害が連続して起こったことを受けて、平成25年8月30日から気象庁においては「特別警報」が運用されることとなった。また、近い将来起こるとされる南海トラフによる巨大地震に対する防災に関する関心の高まりを受けて、防災力強化を図るべく取り組みを開始した。その一環として、平成25年度に和歌山高専オリジナルの「大地震対応マニュアル」を全員に配布するとともに、常に携行させ常日頃から災害時に即応できる心構えを求めている。さらに、授業時間中における避難、クラブ活動中の避難および学寮における夜間避難のための訓練を実施し、24時間をカバーできる体制としている。また、平成26年度より安否確認システムを導入し、運用を開始した。

学生なんでも相談室

おがわ としこ
小川 敏子

看護師



和歌山高専『学生なんでも相談室』は、学生一人一人がさまざまな悩みをかかえながらも充実した学生生活を送り成長していけるよう、通常の担任・教科担当・寮・クラブ・厚生補導とは独立して、どんな悩みについての相談も受け入れ、相談内容の秘密は厳格に守りつつ、解決への方向を共に考えサポートすることを目的として、平成16年4月に設置されました。

当初、相談室員は相談室長1名（教員）、各専門学科と一般科目の教員7名、寮務係長、看護師、計9名でしたが、平成17年度からは心療内科医を委嘱して月1回カウンセリングをおこなっていただいています。

平成19年1月から臨床心理士1名、平成20年4月からは臨床心理士2名が交替で毎週1回来校され、学生や保護者、教職員に、よりきめ細かく対応できるようになりました。

平成23年度から、よりいっそう気軽に活用していただけるよう匿名のメール相談も受け付けはじめ、現在は、臨床心理士2名が毎週2回オレンジルームへ来校され、御坊市内の精神科医、学校医の指導を受け、学生相談室長を含め各学科の教員6名、寮の事務職員、看護師が心身の様々な相談に対応しています。





「学生食堂・購買部スタッフ一同」



「写真で見る」
教職員の変遷





澤井八州男



近藤 繁人



市原 松平



阿河 利男



岡本 平



興地 斐男



山本 博



蕨澤 弘志



堀江振一郎

校長

歴代	氏名	在職期間
1	澤井八州男	昭和39年 4月 1日～昭和47年 3月31日
2	近藤 繁人	昭和47年 4月 1日～昭和55年 4月 1日
3	市原 松平	昭和55年 4月 1日～昭和60年 3月31日
4	阿河 利男	昭和60年 4月 1日～平成 3年 3月31日
5	岡本 平	平成 3年 4月 1日～平成 9年 3月31日
6	興地 斐男	平成 9年 4月 1日～平成15年 3月31日
7	山本 博	平成15年 4月 1日～平成16年12月30日
事務代理	谷口 邁	平成16年11月 8日～平成17年 3月31日
8	蕨澤 弘志	平成17年 4月 1日～平成21年 3月30日
事務代理	高木 浩一	平成21年 3月31日～平成21年 3月31日
9	堀江振一郎	平成21年 4月 1日～

■教職員の変遷

氏名	昭和	平成
	39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26
●機械工学科・智能機械工学科		
笠井 久	 S:40.01.01 S:50.04.01	
菊池 喜久男	 S:40.04.01 S:51.04.01	
橘 高知義	 S:40.04.01 S:45.08.31	
玉置 邦太郎	 S:41.01.01 H:07.03.31	
山岸 昭英	 S:41.01.01 H:10.03.31	
安藤 公雄	S:41.04.01 S:43.03.31	
山本文雄	S:41.04.01 S:41.12.31	
河合 彊	 S:42.04.01 S:48.10.31	
田縁 正幸	 S:42.04.01 H:18.03.31	
中川 生一	 S:43.04.01 S:50.03.31	
山根 靖生	 S:43.04.01 H:09.05.01	
吉田 正二	 S:43.04.01 S:54.04.01	
久保井 徳洋	 S:44.04.01 H:19.03.31	
矢野 久由	S:44.04.01 S:46.03.31	
矢野 敏雄	 S:46.04.01 H:22.03.31	
瀧本 豊	 S:47.04.01 電気工学科 S:60.04.01 機械工学科 H:02.03.31	
舟田 敏雄	 S:49.04.01 H:02.03.31	
坂田 光雄	 S:50.04.01 工業化学科 H:02.04.01 機械工学科 H:25.03.31	
西本 圭吾	 S:51.04.01	
相馬 哲郎	 S:52.04.01 S:60.03.31	
辻 昌宏	 S:54.04.01 S:58.03.15	
伊藤 欣也	 S:58.04.01 H:17.03.31	
樫原 恵藏	 H:03.04.01	
青山 歓生	 H:11.01.01 機械工学科 H:06.03.01 電気工学科	
三原 由雅	 H:07.01.01	
濱田 俊彦	 H:07.04.01	
富川 久男	 H:08.04.01 H:11.03.31	
谷口 邁	 H:11.04.01 H:18.03.31	
溝川 辰巳	 H:12.10.01	
藤原 昭文	 H:13.04.01 H:24.03.21	
津田 尚明	 H:17.08.01	
福田 匡	 H:18.04.01	

教育の変遷

創立周年	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
西 暦	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981
年 度	昭和 39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56
学期制	学校週 6 日制																	
	二学期制																	
本 科	機械工学科 [64.4 ~ 09.3]																	
	電気工学科 [64.4 ~ 04.3]																	
	工業化学科 [64.4 ~ 93.3]																	
	土木工学科 [69.4 ~ 94.3]																	
専攻科																		
教 務																		
	編入学 (4 年次編入) 試験実施																	

創立周年	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
西 暦	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
年 度	57	58	59	60	61	62	63	平成 元年	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
学期制	学校週 6 日制										学校週 5 日制							
	二学期制																	
本 科	機械工学科 [64.4 ~ 09.3]																	
	電気工学科 [64.4 ~ 04.3]																	
	工業化学科 [64.4 ~ 93.3]												物質工学科 [93.4 ~]					
	土木工学科 [69.4 ~ 94.3]												環境都市工学科 [94.4 ~]					
専攻科																		
教 務																		
	推薦入試実施																	
	編入学 (4 年次編入) 試験実施																	
	外国人留学生 (3 年次編入) 受入開始																	

創立周年	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
西 暦	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
年 度	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
学期制	学校週 5 日制														
	二学期制														
本 科	機械工学科 [64.4 ~ 09.3]										知能機械工学科 [09.4 ~]				
	電気工学科 [64.4 ~ 04.3]					電気情報工学科 [04.4 ~]									
	物質工学科 [93.4 ~]														
	環境都市工学科 [94.4 ~]														
専攻科	メカトロニクス工学専攻 [02.4 ~]														
	エコシステム工学専攻 [02.4 ~]														
教 務	推薦入試実施														
	体験実習入試実施														
	編入学 (4 年次編入) 試験実施														
	推薦による編入学 (4 年次編入) 試験実施														
	外国人留学生 (3 年次編入) 受入開始														
	仮進級制度の導入														
90 分授業の導入															
学修単位の導入															
J A B E E の認定を受ける															

施設の歩み



学生寮の沿革

寮務主事 きたざわ まさゆき
北澤 雅之

- 昭和 39 年 4 月、仮寄宿舍として旧日高高校寄宿舍の一部を改修して使用し、新入生 77 名を収容した。
- 昭和 40 年 4 月、現在の地に寄宿舍 1 号館、食堂、浴室などが整えられ、寮生 120 名を収容した。
- 昭和 41 年 3 月、寄宿舍 4 号館などの第 2 期工事が完成した。
- 昭和 41 年 12 月、寄宿舍 5 号館などの第 3 期工事が完成した。
- 昭和 43 年 3 月、管理棟（寮務係事務室）、寄宿舍 2 号館などの工事が完成した。
- 昭和 43 年 4 月、学生寮の名称を寮生から募集し、「柑紀寮（こうきりょう）」と命名された。
- 昭和 45 年 3 月、女子寮、寄宿舍 3 号館などの第 4 期工事が完成した。
- 昭和 45 年 4 月、新しく管理棟に設置された女子寮に 5 名が入寮した。
- 昭和 62 年 8 月、浴室の改修工事が完成し、低学年用と高学年用とに浴室を分けた。
- 昭和 63 年 3 月、寄宿舍 6 号館が完成した。全室個室で、留学生用にシャワー室、補食室を設けた。
- 昭和 63 年 4 月、マレーシア政府派遣留学生 1 名を入寮させた。
- 平成 14 年 4 月、専攻科 1 年生を入寮させた。
- 平成 19 年 1 月、寄宿舍 1 号館の改修工事がなされ、女子寮として利用し、寮務係事務室、宿直室も移転した。
- 平成 23 年 12 月、男子寮室にエアコン設備を導入した。
- 平成 25 年 2 月、全室にインターネット接続端子、談話室とアメニティスペースには無線 LAN が整備された。
- 平成 26 年 4 月、寄宿舍 7 号館を女子寮にする改築工事が竣工した。
- 平成 26 年 8 月、寄宿舍 8 号館（男子寮）が完成した。個室で 100 名が収容できる。



学生寮全景（昭和42年）



学生寮全景（昭和54年）



学生寮全景（平成元年）



学生寮全景（平成26年4月）



8号館（平成26年8月完成）

実習工場からものづくりセンターへ -この50年の変遷-

知能機械工学科主任 かしはら けいぞう
 榎原 恵蔵

実習工場（現ものづくりセンター）は、ものづくりを通じて技術者教育を行う本校の中核施設であり、機械工学科が主にその運営に携わってきました。実習工場は設立当初より存在したようで、1967年の資料 [1] によれば、実習工場は木工工場、鑄造工場、鍛造工場、溶接工場、機械工場で構成されていました。資料を読むと機械工作の基本である鑄造、鍛造、溶接、切削、手仕上げの実習ができるようになっていたことがわかります（写真1）。



(写真1)

時代は変わり、産業界で工作機械のコンピュータによる制御が主流になってきたことから、実習工場でも平成元年から順次、マシニングセンター、産業用ロボット、ワイヤーカット放電加工機およびCNC旋盤が設置されました。これらの工作機械を工作実習の授業で使うことにより、加工プログラムの作成方法やプログラム制御下での工作法を学ぶことができるようになりました。

平成15年、本館の耐震補強工事のため機械工学



(写真2)

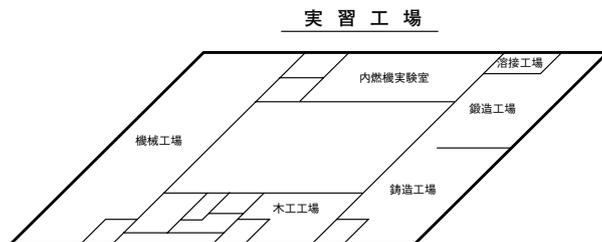
科の研究室および実験室の再配置が行われ、本館にあった流体力学実験室が実習工場内に移されることになりました。その移設に伴いキュボラが鎮座していた鑄造工場が閉鎖され、残念ながら鑄造技術を教えることができなくなりました。鑄造工場の閉鎖は、限られた工作実習時間の中で、加工プログラミング実習やロボット創作実習など、新しい実習課題が導入されたためであり、仕方ないことかもしれませんが、我々機械屋としては苦渋の選択でもありました。

平成24年に実習工場の耐震補強工事が行われ、平成25年度から実習工場は新たに「ものづくりセンター」として発足しました（写真2）。ものづくりセンターはCAD/CAM室、FA室、機械室、溶接室、ものづくり工房、および流体力学実験室、熱力学実験室から成り、バリアフリー・ユニバーサルデザインが取り入れられました。平成24年度の補正予算により、ワイヤーカット放電加工機2台、汎用旋盤6台、シャーリングマシン1台を更新し、既存の工作機械共々、汎用性の高い最新の工作機械を多数保有するようになりました。

本校設立当初からある実習工場はものづくりセンターに名称を変え、施設内の役割、保有設備も時代とともに変化してきました。今後とも、ものづくりセンターは、ものづくりを通じて本校学生の技術者教育を行う施設であり続けますが、紀南唯一の高等教育機関のものづくり拠点として、地域連携事業を通じて外部の方々にも貢献できるように、現在、改革を進めているところです。

謝辞 資料提供をいただいた佐伯様に感謝申し上げます。

資料 [1] 和歌山高専祭プログラム、和歌山高専、1967年、pp.9-12.



(資料 [1])

国際交流と国際交流会館

国際交流副委員長 しゃ もうしゅん 謝 孟 春

和歌山高専の国際交流は、1988年に最初の留学生を受け入れてから始まった。2014年度までに、本校に編入学した日本政府の国費留学生とマレーシア政府派遣留学生は、イラン、インドネシア、カンボジア、ケニア、コロンビア、スリランカ、バンラデシュ、フィジー、ブラジル、ベトナム、ラオス、マレーシアの計12ヶ国、約70名である。そのうち、半数余りが国費留学生で、残りがマレーシア政府派遣留学生である。前者は来日後1年間東京の日本語学校で研修を受け、後者は2年間のマラ工科大学国際教育カレッジ（INTEC）での予備教育を受けた後、本校の3年次に編入している。本校卒業後は、大半が大学へ進学し、その後研究者の道を選んだり、企業に就職したりして、日本国内や祖国で幅広く活躍している。

2002年に中国・上海電機技術高等専科学校（現上海電機学院）と交流協定を締結し、2004年から両校の学生短期留学が始まった。これまでに、両校でこのプログラムに参加した学生は250人を超えている。また、2011年3月には上海電機学院と長期留学生の交流協定を締結した。この制度の下、こ

れまでに上海電機学院から2名の学生が、研究生として半年間の特別聴講の研修を経て特別編入学試験を受け、4年次に編入した。そのうち1名はすでに卒業し、日本の大学に進学した。一方、本校からも2名の学生が1名は半年、もう1名は一年間上海に留学した。

本校で勉強している留学生及び本校を訪問する留学生などの交流の場として、2010年5月に国際交流会館がオープンした。国際交流会館は、3階建ての福利センターの2階と3階を占め、2階には3部屋、3階には4部屋ある。各部屋は壁に収納するタイプのベッドを備え、会合と宿泊の2つの機能に利用できる。同会館は、国内外から本校を訪問する留学生の家族や友人、他の高等教育機関の共同研究者に宿泊の便宜を図っている。特に協定校である上海電機学院からの訪問団一行は、会館の完成によって滞在中の環境が大きく改善された。

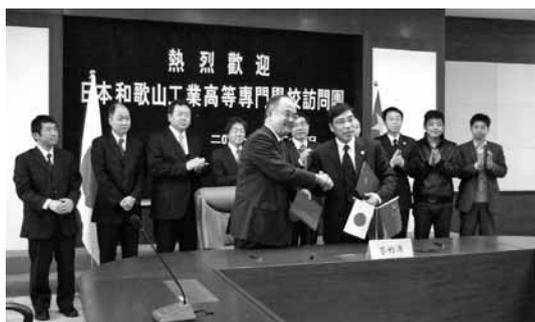
本校は、日本のみならず、世界の技術者の育成に大きく貢献してきた。国際交流を通じて「グローバルに活躍できる創造的、実践的技術者の育成」の拠点として、益々発展していきたい。



上海電機学院訪問団の送別会（2010年7月）



国際交流会館開所式（2010年5月）



上海電機学院との長期留学交流協定調印式（2011年3月）



国際交流会館で歓談する留学生

地域共同テクノセンター

前地域共同テクノセンター長 なかもと じゅんじ 中本 純次

紙面の制約上、詳しく内容を説明することができず、トピックスを羅列する程度になることをお許し願いたい。また、開校31年目に開所し、創立二十五周年記念誌には記載がないことから、ここでは時系列に説明させて頂くこととする。

地域共同テクノセンターは、その前身である総合技術教育研究センターが平成7年（1995年）4月に開所し、学生の産業技術教育の充実、教職員の共同研究の推進、地域産業との技術交流、卒業生・企業技術者の再教育、公開講座等に貢献することを目的として、新材料研究部門、情報計測制御研究部門、環境機能研究部門、エネルギー応用技術研究部門の4つの研究部門でスタートした。

平成9年1月10日には、本校が所在する地元御坊商工会議所のお骨折りで、地域産業界との技術交流を現実的なものとするために「和歌山工業高等専門学校産官学技術交流会」を発足した。センターの設置以来必ずしも活動が活発とは言えない状況であったことから、平成9年度に業務の活性化をテーマとして取りくむこととし、成果の公表や地域社会に関連のある研究テーマへの支援などを具体的な施策とした。平成8年度から研究協力・技術相談申込書を作成して広報したこともあり、平成9年度から技術相談が持ち込まれるようになった。活性化の議論の中で、学内研究テーマに対する支援の考え方がでて、平成10年度から「学内奨励研究」助成制度がスタートした。

平成10年から田辺異業種交流会へのアプローチを開始し、同会の近畿ブロック技術・市場交流プラザ和歌山大会「異業種交流と融合そして新たな創造」が田辺市で開催されたことから、連携強化の機運が高まり、南紀熊野産官学技術交流会として、平成11年5月12日に発足した。産官学の連携を強め、技術交流や情報交換等、地域技術および産官学それぞれの振興を図ることを目的とし、各分野での情報交換、新技術の紹介、地域技術の課題解決、人的交流を推進した。学外との交流活動は、「情報を提供するだけの待機型から、その後の交流活性化を目指す積極的行動」への展



開を図ることとした。

平成13年8月には和歌山県下の高等教育機関と県が連携・協力し、地域への貢献と魅力の発信を目指して高等教育機関コンソーシアム和歌山が設立され、本校も参画した。総合技術教育研究センターの受け入れ態勢を整備し、地域企業との技術交流がさらに活発になることを願って平成13年3月には定期発行しているセンター広報に加えて「利用のしおり - 地域との連携を目指して -」を作成して、和歌山産官学技術交流会および南紀熊野産官学技術交流会の会員および関連企業に配布し、さらなる地域連携の強化を図ることとした。

平成14年度から専攻科が設置されるとともに、独法化に向けての動きが始まるなどこの頃から教育、研究環境が大きく変化することとなる。平成15年4月1日総合技術教育研究センターを地域共同テクノセンターに改称するとともに、副センター長を新たに配置し、体制の強化を図ることとした。

平成16年4月1日から「独立行政法人国立高等専門学校機構」が設置され、同機構が各国立高等専門学校を設置することとなった。独立行政法人は、従来国が行ってきた事務・事業の一定のものについて、その効率化を図り、より良い行政サービスを提供することを目的としたものであり、テクノセンター関連で言えば、非公務員化することにより兼職や兼業が緩和され、産官学連携の推進や地域社会への貢献が一層進むことが期待

された。一方で、産業界が求める技術者教育への即応、教育研究能力の向上、外部資金の獲得、知的財産の保有など数々の成果が求められることとなった。

平成 17 年度からは、研究助成金の受け入れ、公開講座・出前授業等々の成果を目に見える形で広報することとなった。また、この頃から、紀州材、梅、花卉、ジャバラなどなど地域に根差した研究、人材育成に力を傾注していくこととなる。

平成 18 年度には、ロボットコンテスト、ブリッジコンテスト、コンクリートカヌー大会など、ものづくりに関わる活動が活発になっていく。平成 18 年度から、それまで発刊していた「研究紀要」を廃止する一方で、「和歌山高専シーズ集」を発刊することとした。これは、研究紀要が十分に活用されていない状況に鑑み、地域連携をより活性化させるためには和歌山高専が持つ研究シーズをよりわかり易く地域に発信することが重要であると判断したものである。

平成 19 年 10 月から、和歌山高専、和歌山高専産官学技術交流会、南紀熊野産官学技術交流会、NPO 法人次世代エネルギー研究所が主催する「和歌山高専次世代テクノサロン」を本校教員および実業界で活躍する本校卒業生などの講師を招いて毎月 1 回開催することとした。機を同じくして、「日高港エネルギーパーク」が開園されることとなり、本校のみならず、地域として科学技術立国日本の土台を支える人材育成に弾みがつくこととなった。

平成 20 年 3 月技術相談や共同研究等および地域における企業に役立つ情報を共有すること等を通じて連携を強化し、地域経済の活性化に貢献することを目的として、「連携協力に関する協定書」による包括的な連携協力協定を株式会社紀陽銀行と締結した。そして、その協定の最初の活動とし

て 12 月 12 日に本校体育館で同行との共催による「和歌山県内企業合同説明会」を開催した。

さらに、平成 21 年度には「きのくにものづくり人材支援ネットワーク事業」および「中小企業との連携による若年ものづくり人材育成事業」の新規 2 事業に取り組むこととなった。また、1 期卒業生が 60 歳を迎えるタイミングに今後の和歌山高専における技術者教育や地域連携をより一層推進するためには様々な分野の実績を有する卒業生に協力を得るシステム「和歌山高専人材バンク」を創設した。

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分に発生したマグニチュード 9.0 の地震とそれに伴う巨大な津波は、広域、大規模、壊滅的地域の存在など今までに類を見ない特徴を有するものであった。加えて、原子力発電所事故が状況の悪化に拍車をかけた。また、同年 8 月 25 日に発生した台風 12 号による大雨が 9 月 2 日～9 月 3 日にかけて和歌山県を襲った。激甚災害が立て続けに発生したことから、23 年度から 24 年度にかけては、従来の技術協力依頼・技術相談に加えて、地元・県域からの防災関係の講演依頼、助言要請が相次ぎ、地球を救う技術講演と銘打って学内外の講演会も開催した。

平成 24 年度（21 巻）までは、センター広報とシーズ集 2 種類の冊子を発刊していたが、この度一冊に合本しより使いやすい形に変更した。

また、24 年度には、文部科学省より募集のあった「学校施設の防災力強化プロジェクト」に採択され名田教育クラスターの総合的な防災力強化を図った。

平成 25 年度には、平成 24 年度補正予算（緊急経済対策）で多額の研究設備費が措置され、研究環境が大いに充実され、今後の競争的資金の獲得、地域共同研究の活性化が期待される。

年度(平成)	7～8	9～10	11～13	14	15～16	17～18	19～20	21～22	23～24	25～26
センター長	黒田	橋口	山川	藤原	田縁	大久保	米光	野村	中本	山口

ロボット教育センター

ロボット教育センター長 やまぐち としゆき
山口 利幸

和歌山高専におけるロボットに関わる教育の進展と地域におけるロボットを活用した科学技術の理解促進に貢献することを目的として、本センターを平成20年度に新設した。センター開所式には仁坂知事も出席いただき、葦澤校長とともに看板を機械工学科棟2階に掲げ、知事から激励のお言葉をいただいた。



センター開所式



きのくにロボットフェスティバル

本センターでは、主に、きのくにロボットフェスティバルの企画運営、ロボットに関わる教育と地域貢献、高専ロボコンへの支援等を行っている。

きのくにロボットフェスティバルは、高専ロボコン2006全国大会で本校チームが準優勝したことを契機にして、県内の子供たちにもものづくりや科学技術に興味を持ってもらい、和歌山県や日本の発展を支える人材に育ててほしいとの願いから、和歌山県、和歌山県教育委員会、御坊市、御坊市教育委員会、御坊商工会議所、和歌山高

専、和歌山高専産官学技術交流会が実行委員会を組織して、平成19年から毎年開催している。近畿・東海・関東・中国・四国地区の高専等と連携し、文部科学省、経済産業省、高等専門学校連合会、国立高等専門学校機構に後援いただき、二つの大臣賞の特別表彰がある全国規模のイベントである。本イベントは、全日本小中学生ロボット選手権やスーパーロボットショー等で構成されている。全日本小中学生ロボット選手権では、県内外17ブロックで行われた予選会で選ばれた代表の小学生、中学生が決勝大会を行い、スーパーロボットショーでは、世界最先端のASIMOなどロボットの実演が行われる。

ロボットに関わる教育と地域貢献では、出前授業の実施や「科学技術フェスタ in 京都」などのイベントへの出展を行うとともに、地元の祭りに登場する鈴振りさん（笑い男）をモデルにした「WARAI ロボット」を卒業研究のテーマにして製作した。



鈴振りさんとWARAIロボット

高専ロボコンでは、2010年大会から本センターが支援を行っている。高専ロボコンは、全国から57校62キャンパスの高等専門学校が参加する全国規模の教育イベントで、1988年から毎年開催されている。各キャンパスから2チームがエントリーし、全国8地区で開催される地区大会で選抜された25チームにより全国大会が開催される。本校は、1991年の第4回大会から参加し、この年に近畿地区大会を突破して全国大会

高専ロボコンにおける和歌山高専の記録

回	年	競技課題	近畿地区大会出場ロボットと結果		全国大会出場ロボットと結果	
19	2006	ふるさと自慢特急便	ウメタロウ	2回戦敗退	ウメタロウ	準優勝
			清 姫	初戦敗退		
20	2007	風林火山ロボット騎馬戦	紀州軍団	優勝	紀州軍団	準優勝
			戦国牙太郎	初戦敗退		
21	2008	生命大進化	すっぱいダーマン	準優勝	すっぱいダーマン	ベスト8
			吉宗の動く城	初戦敗退		
22	2009	DANCIN' COUPLE	ウメボーイ	優勝	ウメボーイ	ベスト8
			インスパイアー	ベスト4		
23	2010	激走!ロボ力車	ウメンライダーW	優勝	ウメンライダーW	準優勝
			濱口 梧 稜 伝	初戦敗退		
24	2011	ロボ・ボウル	ウメトラマン	ベスト4	ウメトラマン	ベスト8
			光線をクエ	初戦敗退		
25	2012	ベスト・ベット	八咫等鳥	優勝	八咫等鳥	2回戦敗退
			ミパンダ	2回戦敗退		
26	2013	Shall We Jump?	ウメンジャー	ベスト4	ウメンジャー	ベスト8
			シャパデュビジャンパー	ベスト4		

にも選抜された。以来、全国大会出場15回を数え、2006年からは連続出場(8回)を続けている。近畿地区大会の成績は、優勝が7回で、全国大会連続出場の8年間で4回優勝している。全国大会では、最近8年間の成績が、準優勝3回(2006年、2007年、2010年)を含めベスト8以上が7回と上位の成績を収めているが、悲願の優勝には一步届いていないことが最大の課題である。



全国高専ロボコンで本校初の準優勝(2006年大会)



全国高専ロボコンで連続準優勝 対説間(2007年大会)

メディアセンター

メディアセンター長 のむら 野村 えいさく 英作

図書館と情報処理教育センターが組織的に統合され、メディアセンターとして発足したのが平成17年4月である。図書館は書籍、雑誌などの利用が主であるが、電子ブックや電子ジャーナルが普及してきた昨今では図書館もデジタル化に対応する必要に迫られている。事実、この十年間で図書の間貸出冊数は約1万冊から約5千冊へと漸減してきた。また、年間入館者は30%程度減少した。本校のみならず全国的にも図書館の活性化が課題となっている。このため、めざましく進歩する情報通信技術に合せて、紙媒体を主体とした図書館と電子情報を取り扱う情報処理教育センターとを有機的に統合して運用することが有効となる時代が到来したといえる。効率的な教育・研究支援や各種情報を提供する施設として利用者増を目指すことが必要である。

本校では、老朽化した図書館の改修計画を策定中である。現在の図書館棟に別棟の情報処理教育



センターを集約しメディアセンターとして名実ともに運用を図る計画である。電子情報を有効に利用するための教育と電子情報と書籍を含めた各種情報を効率よく取得することができる施設としての役割を持つ。また、図書館としてのこれまでの役割や機能に加え、学内に少ない「憩いの場」を提供することが重要となる。計画では、友人と気軽に訪れ、学習や雑談も可能な場を提供するために、グループ学習や憩いのスペースの確保が織り込まれる予定である。これまで通りの書籍の利用だけではなく、多くのメディアを介して情報を手に入れることができるとともに、友人やクラス仲間、また、1人でも時間があれば図書館に行こうという思いを持てるような施設にすることが望まれる。

さらに、計画では現在二階にある図書館を一階に配置して利用しやすくするとともに、情報処理教育センターを二階に配置して分散している三つの演習室を集約する予定である。二階には、情報処理教育の他に100名以上収容できる多目的講義室やセミナー室を設置して各種講演会などの催しを開催できるスペースも確保できる予定である。

以上、メディアセンターの現状と将来構想について述べたが、図書館棟がメディアセンターとして多くの学生・教職員をはじめ地域の人々に愛され将来に渡り利用され続けるように進歩していくことであろう。

産学連携

平成24年度 厚狭地区の防災力強化プロジェクト
防災力強化実施委員会



和高専産官学技術交流会 —祝辞—



和歌山工業高等専門学校
産官学技術交流会 会長

上西 一永

このたび、和歌山工業高等専門学校が、創立 50 周年を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

私が、和歌山工業高等専門学校産官学技術交流会を、前会長の田端淳二様から、平成 16 年に引き継いで、早や 10 年が経過致しました。

当会は、地元企業と、和高専との橋渡しの場として、平成 9 年に発足し、18 年がたち、その間、いろいろな事業に取り組んでまいりました。

その中でも、印象深いのは、平成 17 年にミニロボコン大会を、地元小中学生を集めて開催したことです。御坊商工会議所の青年部の方や山口先生はじめ、教員技官の方々や学生さんにご協力頂き、開催方法や、スケジュールを調整しながら進めていったことを思い出します。最初は、どうなることかと思ったのですが、何とか、参加者も小学生部門が 32 名、中学生部門が 23 名集まり、盛況のうちに、終了することが出来ました。これは、地元の子供たちに、技術の素晴らしさ、楽しさを体験してもらい、地元を盛り上げてほしいという気持ちから出たものでした。そんなことが続いた後、和高専が、高専ロボットコンテスト全国大会で、準優勝するという快挙を成し遂げられ、今のきのくにロボットフェスティバルの開催に繋がりました。今年度で第 8 回目を迎えます。子供たちの技術向上意欲をより高めていって頂きたいものです。

また、平成 18 年から 5 年間、御坊商工会議所主催の経済産業省のものづくりに関する人材育成事業に和高専と共に取り組み、大勢の方に受講頂き、地域の技術向上に繋がっています。

さて、和高専は、平成 14 年に専攻科開設、平成 15 年には地域共同テクノセンター設置、昨年には、ものづくりセンターの供用開始等々、設備面、人材面での充実が図られているところですが、さらなる向上を期待しています。地域の活性化のために、当会も学校と一丸となり、活動を広げてゆきたいと考えています。

この地域の発展のために、優秀な人材を輩出し、理工系高等教育機関としてますます活躍されますことを祈願するとともに、さらに地元企業との技術交流が深まり、地域の発展に繋がることに期待しつつ、お祝いの言葉とさせていただきます。

南紀熊野産官学技術交流会 —祝辞—



南紀熊野産官
技術交流会会長

濱口 公一

まずもって、創立 50 周年を迎えられました事、お祝い申し上げます。
創立以来、歴代校長はじめ先生方、又学生や OB の皆様が、和歌山工業高等専門学校の精神にのっとり現在まで受け継がれて来た事が、今日、大きな社会貢献の出来うる高専として発展をして来た所以でもありましよう。

改めて敬意を表します。そして地域の皆様方にもささえられて今日を迎えられた事が、結果として和歌山高専の名声を上げて頂いた事にもなり、感謝を忘れてはいけないと思います。県下唯一の高専として、これからは技術革新は当然の事、専門校のリーダーとしての気持ちを持って、学校運営にあたって頂ければ和歌山の知名度も上がって行くだろうと確信をしています。期待をしております。

学校のレベルアップだけではなく、地域企業との連携を密にして、企業力、地域力を上げて頂ければ、こんなうれしい事はありません。是非お願い致します。その為には、今ある地域共同テクノセンターをもっともっと活用、発展させて企業とのコラボを強力に推進していかねばいけません。

50 年と一口に言いますが、その間には幾多の試練があったと思います。その度、志をつらぬき発展させてこられた事に感謝を申し上げます。過去の 50 年は今後の 50 年を保障するものではありません。自らの努力で次の 50 年を発展させ歩んで行って頂きたいと思っています。そして和歌山高専が研鑽を積んで日本一優秀な高専になるよう頑張りたいと思います。よく「企業は人なり」と言いますが学校も同じで、良い優秀な先生と学生が必要です。ますますこの学校力のアップが求められるでしょう。今後はより一層の研鑽が求められ、学校間競争に勝ち抜かなければなりません。厳しいようですが、やりがいもある事だと思っております。是非、勝利して下さい。

今後共、和歌山工業高等専門学校、田辺異業種交流会、南紀熊野産官学技術交流会がより連携を密にして、地域の発展に寄与して行きたいと思致します。

最後になりましたが、今までの 50 年を礎として、今後の 50 年は「飛躍の 50 年」になりますよう、お祈り申し上げまして、祝辞と致します。

和歌山高専・鼎談

『未来の産業支える技術者育成 地域と共に歩む開かれた和歌山高専』

平成 21 年 7 月 24 日
於 南紀白浜ホテル川久



小堀 基二

財団法人わかやま産業振興財団
前専務理事

浦 聖治

株式会社エスアールアイ
代表取締役社長

堀江 振一郎

国立高専機構和歌山高専
校長

聞き手：中 久枝

国立高専機構和歌山高専
専攻科修了生

中：今日は現在の開かれた和歌山高専と地域産業活性化を踏まえた技術者育成についてご議論したいと思います。まず、高専の果たす役割として、地元の産業界を高度な技術で支える人材の育成が期待されていると思いますが、和歌山高専の四十六年の歴史の中で、その役割をどのように果たしていると思われますか。

小堀：いきなり難しい質問ですね(笑)。地元の産業界で、高専の卒業生に頑張ってもらっているという話は聞くんですが、さて卒業生たちのどれだけの人数がその全体的な割合として入っているかということについては把握できていませんね。私など県庁にいますと、県庁には高専の卒業生はたくさん来てくれていますし、工業技術センターに県の県土整備部にも相当入ってる。地元の企業でも何人か来てくれますよという話を聞いています。実際にはどうなのでしょう。卒業生の就職先として、県内の企業にはどれぐらいの割合で入ってるんですか。

堀江：そうですね、就職については半分以上が県外に出ていく、さらに進学者を含めると県外への進学ということでは、専攻する学科にも依りますが、県内に残る数は全体として二割に満たないかも知れませんね。

浦：化学関係の企業などは和歌山県北部に多いですね。そういった意味で、化学専攻の卒業生たちが地元企業で活躍されているという印象を私などは持っているのですが、そのほかの分野となるとやはりほとんどが出て行ってしまっているという事実を、高専四十六年という歴史を見てもそうした傾向があるのかなと思っています。だけど私も白浜でソフト開発の会社をやっていますが、今後はやはり IT 産業というのは、特に東京とか大阪でなくても良いわけですし。私どもの会社はいま社員が七十名近くになっていますが、その多くが地方でやれる仕事になっていますので、今後は高専の優秀な卒業生の皆さんに来ていただける環境は十分に整ったと思っています。

小堀：私も高専の一期生として在学していた関係で、この間四十五年ぶりに同窓会に出席させていただき、そこで色々な話が出ましたけれど、県庁とか公務員になっている人が意外と多くて少々驚きました。高専出身者で県内の企業に勤めているという話は正直、あまり聞かなかったですね。住金に行っていて辞めてる方とかそんな人はいましたけれど、浦さんも仰ったように高専の卒業生たちはみんな県外へ向けて就職していくということが多いんじゃないでしょうか。

堀江：確かにこの経済状況が厳しい中、今年の五年生を見ましても、卒業を控えて就職活動をするのに、一人の卒業生に対して五社から十社の求人をいただけるという状況が続いているというのは本当にありがたいですね。そうした中で、学生もどこを選ぶかというとき、自分が卒業まで続けてきた研究がいくらかでも続けられるような環境とか、少しでも手取りの給料が多いところとか、そういうところに惹かれるのも、まあ自然なことだと思います。私たちが彼らの気持ちを引き留めるといったことなどできません。去年、仁坂知事が私たちの高専にお見えになって、学生たち十人と『いきいきトーク』というのをやってくれました。そのときに知事から『どうも皆さんは地元の企業のことをあまり知ってもらっていないみたいですね』というお話がありましてね、そこで今年からはもう少し地元の企業の方々にも私たちの学校に来ていただき、自社はこういう職場環境です、こういうテーマで製品、新規開発をしています、などといった会社の事業内容についてご紹介していただく、そんな機会も増やしていきたいと考えております。昨年までは学園祭のとき、そして十二月の進路指導のときの二回、企業説明会をやってきました。毎年十二月には地元の紀陽銀行と合同でやっているのですが、今回はそれを併せてやろうかと。知事の方からは和歌山市内で大々的に就活のイベントを仕掛けてやろうという話がございまして、高専だけでやるにはあまりに規模が大きくなってしまいますので、そのガイダンス方法については県にお任せしております。

小堀：和歌山県に限らずどこでも地方都市の企業などは特に県内の優秀な人材を求めていますね。切実な話ですよ。地元の大学や地元の高校から採らないと県外から優秀な人材を獲得することはやはり難しい。中小企業の人たちに話をお聞きしていても、できるだけ地元から優秀な人材を確保したいというのが本音でしょうね。だから今「知らない」という話の中でね、地元の大学とか高専とか高校とか色んなところで、もうちょっと地元企

業の良さや魅力について、本当に和歌山県にはオンリーワン企業がいくつもあるんだから、そういったアピールポイントをもっと上手に宣伝して、優秀な学生たちに入社してもらい、地場の企業を支える、そういうシステムを早急に構築していかないと地方の産業界全体が益々疲弊してしまいます。

浦：素朴な質問なんだけれど、学生さんの志向性としては良い仕事、良い会社があれば県内に残りたいという人は何割ぐらいあるのですか。実は私なんかは和歌山からとにかく飛び出たくて仕方がなかったんですけれどね(笑)。

中：就職した先輩(ひと)の話など色々聞いた部分では、やっぱり都会に出て行きたいという人は多いと聞くんですが、まず県内には特に電気系の企業が少なく、私の場合は、医療機器メーカーの方に進みたいと思っているんですけど、県内に企業がなくて、やはり外に出ていかざるを得ない状況にありますね。

浦：じゃあそういった希望する分野の企業がもし県内にあるとするなら、本当は県内に残っていたいと思っているのですか。

中：はい、そうですね。

小堀：大学という話になると、御坊市に住んでいる私なんかは、大学へ行くイコール都会(まち)へ行くというイメージがどうしてもあるんですね。同じく、就職ということについても就職イコール都会(まち)に出るという考えがあるのではないかと。ただ、今年もお盆シーズンになると経営者協会等々では、特にUターン希望者を対象とした就職案内会を開催するのですが、一度都会へ出て行っても、田舎も良いよねっていう人も必ず出てくるんです。だから盆とかで帰省することが多い時期に、就職面談会を開催すると、田舎で再就職するという話によくありますよ。地元企業の人たちはむしろそういった時期の方が採用しやすいと思ってました。都会が良いと思って都会へ憧れて出て行ったんだけど、現実を知れば、まあこんなものかと。それだったら全体の生活の



小堀 基二（こぼり もとじ）

財団法人わかやま産業振興財団 前専務理事
和歌山県御坊市出身。和歌山高専第一期生として入学後
進路変更、県立日高高校を経て東京大学農学部を卒業後、
和歌山県職員として中小企業振興公社事務局長、東京事
務所長などを歴任。

豊かさなど考えて、田舎のほうが良いんじゃないか、上手く自分に合うような働く場所さえ見つかれば戻ってこようか、そんな考え方もありますよねえ。

堀江：なるほど興味深いお話ですね。しかし学校としてはできるだけ本人の持っている能力、本人が持っている興味や関心ごと、それに一番見あった教育を準備して、それらを一番伸ばしてあげたいと思っています。そして伸びたときに本当に能力がどれくらい身につくのか、私たち教師側もつねに日々努力です。その努力の結果、先ほど中さんもお話されたように、自分が続けたいと思う研究課題をさらに応用して使うことができる企業が県内に多いとは言えないということは残念です。学校としては全国各地で五十五ある高専の各校として、ある意味、みんな厳しい生き残りを賭けた競争のなかで、他校を制してどれだけ豊かな良い教育を提供し、国立の高等教育機関として成果を上げていけるか、それが問われていると思うのです。その一方で、地域への貢献という視点から申し上げますれば、私たち和歌山高専の学生たちが卒業後には、彼らがぜひとも就職したいと希望する地域の企業が県下に一社でも多くなって欲しいと

願っております。

浦：七年前からこちらで始めたんですね、白浜の方でね。私どもの会社には今、和高専から二人来ていただいています。さらに来年は二人入っていただくことになっており、今後はそのパイプをどんどん広げてお互いにあそこに行けばこういう仕事ができるといった、そんな事業内容をよく理解していただき、世界に打って出られるようなヒット商品を作りたいと思っています。前年入社した和高専出身の社員は本当に優秀で、中さんの一つ先輩ですかね、上司や同僚のスタッフから評判も非常に良いですね。学校を出てすぐにあれだけ出来るというのはやっぱり高専の勉強も含めて、仕事ぶりを見ていると、プラス自分自身がその仕事を好きで彼なりに努力したのかなということが良く分かりますよ。私も非常に助かっておりまして、こういう人がどんどん入社してくれたら心強いなあ、なんて思っています（笑）。あと、高専にはコンピューターのクラブがありますよね、今後はそのクラブともつながりを持って、社会に出たらこんな仕事があるよ、こんなことが出来ますよといった事を、学校にいるうちから体験していただけたら良いかななんて思っています。実はもうすでにちょっとやってもらっているんです、和高専の三年生の二人にですね、アルバイトという形で、我々の社内で使うソフトとかアプリケーションを作ってもらって実社会での製品づくりについて体感してもらっています。

中：ではその関係の質問なんですが、地元産業界が抱える技術課題や新製品開発に向けた研究に、身近な研究機関として、和歌山高専の先生方の力を貸して欲しいという要請があると思うんですけど、和高専の卒業生でなくても先生に相談することは出来るんでしょうか。

堀江：もちろん出来ます。卒業生だけの技術相談じゃなくて、和歌山県以外からも大阪や名古屋、三重などを含めて、ご相談があれば日本中どこでも、ご相談の窓口は常に開けているつもりです。ただ、まだまだ私たち高専の教授、准教授の先生

方みんながそういう姿勢を普段から取っているかどうかということについては、一層の努力が必要だと思っております。

小堀: 十年ほど前、わかやま産業振興財団の前身の中小企業振興公社で、そのとき初めて大学等の技術シーズを基にして、地元の企業と一緒に交流会をやるという話があって、県のほうから少し補助金を出しましてね、そうしたらたくさんの研究テーマが上がってきて、高専とか、和太、近大、県立医科大からもいくつも上がってきて、そのときいちばん人をあつめたのが、高専のソーラーの研究会、田縁先生の研究会、六十名以上集めたんですよね。特に田辺や紀南地域からたくさん集まっていたね。あれなど十年ぐらい前に始めた事業なんですけど、高専はそれ以前からもそういうことをやってきていたんです。高専の先生方は地元企業の人、技術者の人と常に交流会をやりながらね、技術交流していく土壌があったんやと。その延長線上として共同研究とかね、そういう話があるんです。例えば、今は財団では「都市エリア産学官連携促進事業」など、国の大型委託研究事業を四件やっています。その三件に高専の先生方も参加してもらっているんですよ。特に発展型ということで、事業化に向けて、野村先生などもそのメンバーとして入ってくださっています。そんな意味で、今いわれたような卒業生とかそんな狭い話でなくて、地場の企業の人と直に一緒になって新しい製品づくりを推し進めていくとか、高専の先生から技術指導を受けたりとかね、さまざまな企業ニーズに対応していただいております高専の先生方は大きく地域に貢献されていますよ。

浦: 例えばそういった今まで一度も出会いのなかった企業さんが、和高専の先生、あるいは学生さんたちと共同して研究できる、そのようなきっかけとなる受け皿みたいなものは何かあるのですか。

中: 私の場合、去年は和歌山市内にあるドライクリーニング研究所というところから要請があって、二年ほど前からなんですけど、ドライクリーニ



聞き手 中 久枝 (なか ひさえ)

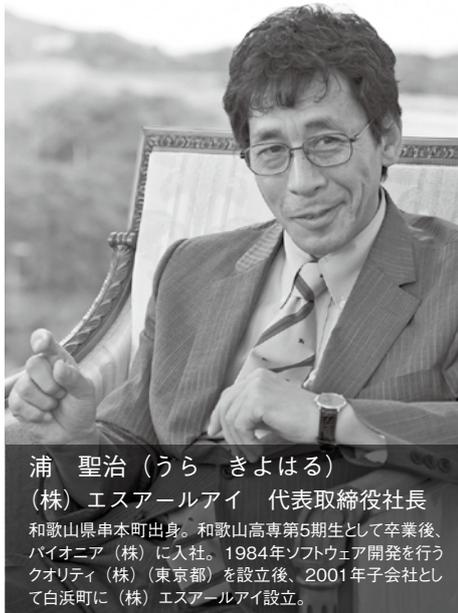
和歌山県串本町出身。平成 23 年 3 月和歌山工業高等専門学校専攻科メカトロニクス工学専攻修了。

ングの乾燥機器工程でセンサーを使ってドライクリーニングの時間を制御する、そういう研究をしていました。このケースは県からの要請で声が掛かりましたね。今年は不況ということも手伝ってか、その研究はちょっとペンディングになってしまい、新たに今年からは湯浅醤油の発酵工程をセンサーで監視できたらいいか、という研究をさせていただいています。

浦: それはどういったルートで依頼が来るわけですか。

堀江: 和歌山高専も地元の企業、特に工業系の企業の方とふれあいの機会をもって田辺の方でも研究会をやっています。たぶん和高専次世代テクノサロンという形で、そういう機会などが一つのスタートとなる切っ掛けではないのかなあとと思います。

小堀: 私ども「わかやま産業振興財団」では、技術開発支援から販路開拓支援まで企業の育成支援を行っています。産学官の連携支援を目的に、たとえば高専とか大学、あるいは商工会議所、商工会、銀行といった色々な支援機関が連携して、私ども産業振興財団がその中核的な窓口となってわかやま地域産業総合支援機構いわゆる「らいぼ」



浦 聖治（うら きよはる）
 (株) エスアールアイ 代表取締役社長
 和歌山県串本町出身。和歌山高専第5期生として卒業後、
 バイオニア（株）に入社。1984年ソフトウェア開発を行う
 クオリティ（株）（東京都）を設立後、2001年子会社とし
 て白浜町に（株）エスアールアイ設立。

をつくっています。ここでうちの宣伝やっていたいかならないんだけど（笑）、産業復興財団になってからいまで六年目なんです。で、ワンストップサービスということで県内中小企業の方々の様々な経営相談を受ける総合窓口というのをうちの方でやっております。そうした企業ニーズに応えるため、専門家派遣、共同研究、商品商談会等々様々な事業を実施しています。テクノ振興財団と中小企業振興公社、別々の支援機構があったんですが、その二つの組織が統合して一緒になって六年目に入ったわけなんです。私自身はこの六月に就任したのですが、これで二度目なんです。最初に産業振興財団が出来たとき、二年間やってそのあと三年ほどあいて、またこっちに戻ってきているんですが、設立当初と比べて本当に財団の機能が一層多岐に渡り、内容的にも格段に充実しています。仁坂知事に替わって、二年前には長期計画が出来たこともあって、その長計に即して知事もだいぶテコ入れしてくださっています。企業のOBの方々、今私たちの財団で、アドバイザーとかコーディネーターという肩書きを持って専門的に企業支援をやってもらっている人が十二名ほどいるんですが、皆さん長い間、大手企業で経験

と実績を積んできた精鋭の人ばかりですから、ものすごく実践的なアプローチをされます。その人たちの持つバックグラウンドというか、人的ネットワークなども大変有効ですね。そうしたものを活かしながら、企業のいろんな要望に応えようとしているんですね。扱う分野も観光が入ったり、農商工連携も担当することとなり、農林水産業の分野を扱うようになったり、国際経済のサポートとかね、これなんかも商社のOBの方が担当してくれています。体制的にも充実していますし、全ての産業の支援を担うこととなっており、是非何か提案や課題があれば、当財団に相談していただきたいと思っています。課題解決の手懸かりぐらいは見つけれられると思っています。もちろん我々は高専の先生方々もどのような経歴をお持ちで、今どんな研究テーマに取り組んでおられるか、おおよそ把握しているつもりですので、企業の要望に応じて是非ご協力をお願いいたします。
堀江: はい、ありがとうございます。私たちは産学官連携というお話でいうと「地域共同テクノセンター」という窓口を設けておまして、そこに突出して対応させていただいております。その建物というのが、うちの高専に入っていた一番最初、入り口から五メートルほど校内に入った、すぐ右手にある建物がそうできて、皆さんに一番最初に立ち寄っていただきたい場所として開放しております。私たち六十名近い、工学系の先生方がいるんですが、その先生方一人一人が普段どういった研究をしているかということ、一人ひとりのプロフィールについて冊子にして作成し、皆さまには『研究シーズ集』という形でお目に止まるようお配りさせて戴いています。それをご覧になり、あっ、この人にちょっと話を聞いてみたい、興味があると思っていただければ幸いなんです。

小堀: いかにして「やる気のある企業を発掘するか」というのが私ども産業振興財団の一番の仕事でしてね、受け入れる体制はできていたとしても、こちら側が企業のニーズをきちんと把握して

いなければ上手くマッチングさせることができない。だから先ほどの技術交流会なんかでもそうですが、六年ほど前に商工会や商工会議所と一緒に企業ニーズを発掘するため、「企業プロデュース事業」を始めました。申請していただいた企業の中から何人かの専門家チームを組みその企業の問題解決をするということをやってきましたが、その企業ニーズ等を審査する委員に高専の先生は最初から入ってもらっているんですよ。今五年間やってきて、申請している案件が千二百六十件ほどになっていると思います。それと今うちでは毎週木曜日は情報メールを発信しています。三千件ほどになっており、もし高専で企業等に情報を発信したいということがあれば、是非利用していただきたいと思っています。情報内容についてはたとえば国、県の支援制度についてであったり、イベント開催のお知らせであったり各支援機関等から様々な情報を発信しています。知らせたい、企業側に知ってもらいたい、そういった内容を定期的に提供しています。これを中核機関の重要な役割と考えています。

浦: 私なんか高専の五期生で、ずっと昔ですけど、あの当時は学問を習ったという感じがしています。けれど今の先生方のプロフィールなど拝見していると、もうすぐにでも今の産業界で使えるようなことをやっている、これはすごいですねえ、あれを見せていただき衝撃でした。あんまり私、他の分野のことはよく分かりませんが、電気情報の分野なら先生方のやられている研究について、仕事上私も理解できるので、ああこれはもう産業界でやって来た人だなんてすぐに分かりましたね。だから今後、私たちが仕事をやる中で、きっちりおつき合いしていただけるという感じを受けました。ぜひ産学連携でやっていきたいと思えますね。

堀江: いま仰っていただいていたいへん嬉しく思います。ただ小堀さんをご摘されたように「産学」の連携だけではなく、官、役所・県庁の機関にも入ってくださって、もしかすると私たちの学校と



堀江 振一郎(ほりえ しんいちろう)
和歌山工業高等専門学校 校長

鳥根県松江市出身。東京大学教育学部を卒業後、文部省へ入省。在米大使館書記官・文部省海外子女教育課長、宮内庁東宮侍従、東京藝術大学副学長を歴任、2009年4月から現職。

県庁の機関とが一緒になって企業のところに手を組んで研究に出かけるということが出来るということが実現できるのなら刺激になって、きっと現役の学生の皆さんの勉強もきっとより深い部分で関心を持つようになり、絶対成果が上がると思います。

小堀: 財団では様々な共同研究を行っています。だから企業と先生方からそのような話が出てきた場合、中さんのような若い学生たちにもぜひその輪の中に入れていただき、現場の空気を肌で感じてもらいたいですね。

堀江: 先ほど中さんの話に出てきた醸造企業でのセンサーの研究、あなたも工場現場まで実際に出かけて行ったのですか。

中: はい、醤油の方は依頼があったんじゃなくて、県内の産業に貢献できるような研究がしたいということで、私の方から湯浅醤油の本社を訪問して、工場見学させていただき、こういう研究がしたいいんとご相談を持ちかけたのです。中紀地方ならやはり湯浅醤油や金山寺味噌が地場産業として栄えていますので、私が在籍する研究室がセンサー工学専門ですから、そのような食品の製造についても興味があったんです。

小堀：へえ、あなたご自身で研究させてくれて営業してきたの。それは偉いなあ、立派なことや(笑)。その積極的な姿勢こそこれからの時代を担う若い人たちには大事やと思います。

堀江：うちの学校の先生方は大学を出て、博士号を取り、すぐ高専の教員として着任されるというケースが段々とメジャーではなくなってきましたね。むしろ例えば企業の研究所などで長く研究開発などをやっていたという人がある一定のキャリアを積んで年齢に達したとき、高等教育機関で後身を育てて見たいと志願され、公募によって先生になったというケースがいま半分以上でしょうか、徐々に多くを占めるようになり、新規採用の場合など、純粋に学問だけやっていたという人はさらに少なくなっています。また、高専に採用される前の経歴を拜見しても、皆さん、工学博士、理学博士の称号をお持ちの方ばかりで、さらにそこから企業で働きながら学会などで研究発表されたり、実践的な研究を積み重ねてこられた先生方が多くなりましたね。

小堀：私の知ってる人で、ある特許をもとに、産学官連携の共同研究を行い事業化した製品を世に送り出して特許収入を得ている人もおられます。ここ何年の間で、大学の先生方の経歴や出身などもずいぶんと変わりましたよ。たとえば和太など、とくに工学系の教授陣のなかに民間企業ご出身の先生方が増えましたね。時代の趨勢なんでしょう、産学連携によって産業界をより一層発展させることのできるイノベーション力を早急に身につけることが求められているのかも知れませんね。だから私たち産業振興財団も頑張らんとあかんわけですよ。うちがいかに元気な企業を発掘できるか、その企業ニーズをしっかりと把握して総合的にサポートできるかということでしょうねえ。共同研究の話だけじゃなくて、販売が課題であれば、商談会を開催してマッチングさせたり、商売相手まで見つけてきて引き合わせる。あるいは製造現場で、ここをこういう風にしたらもっと効率化できるとか、生産力がアップするといった具体的なア

ドハイスが必要となってくる。大手企業で長いこと製造現場で合理化、効率化に携わって来られた方、第一線でやってこられた方を中小企業の現場に送り込んで診断してもらおうと、どこがムダか、何が欠けているか一眼で見抜く。さすがだと思いますね。経営のノウハウみたいなことまで教える、製造現場の効率化をレクチャーする、さらに販促に携わるし、新製品の開発にも参画していく。総合的な支援を重ねていかないとなかなか上手くはいかないことが多々ありますね。産学官連携により新商品が開発されても様々な過程で、支援を重ねる必要を痛感しています。

浦：学生さんから見て、県内で就職するとしたらこういう企業であって欲しいというか、地元企業がこうあって欲しい、その理想像ってどんな感じですか。

中：やはりどんな企業であるのかという情報をもっと細かく知りたいですね。そんな情報を得ることができる機会が少ないので、先ほどお話にあったように企業紹介していただける会場などを設けていただき、私たちに多くのことを宣伝していただきたいと思います。

浦：私ども企業側としてもちょっと努力が足りなかったということですね。今は反省をしているところです。そういう場所にもっと積極的に行って、県内にもこんな魅力的な会社があるんだということを学生の皆さんには分かってもらわないといけない。でも前に誰かに聞いたんだけど、高専に入った段階で、学生諸君はすでにもう県外へ行くんだと端から決めているって(笑)。そんな覚悟を持って入学してくると聞いたんですけれど。

中：ええ、そういうわけでもないんですが、和歌山の場合、とくに工業系の仕事がないようなイメージがあるというのは確かですね。

浦：ただ、ものづくりについては和歌山県の場合、和泉山脈があって、紀伊山地があって、まずモノを運ぶの大変ですよ。最近では船もあまり使わないから、トラックで42号線走ってたら効率が悪

いし、採算合いませんよと。だからものづくり産業は正直いってむずかしいのかも知れないけれど、もっとソフトな産業というか、サービスだったりね、サーバーの監視しますなんていうのは別にオフィスがここにあっても日本全国はもちろん、世界中のコンピュータの監視をしてもいいわけですからね。さらにソフトウェアを組むとか、ウェブデザインをするとか、そういったIT系の産業だったら別に和歌山でやっても良いかなって思いますよね。今後はそういう産業がどんどん出てくるだろうし、一緒にやりましょうよ。

堀江: 私たち、学生たちを育てて世に送り出す、その立場にいる者としては、就活する際にまず最初に県内企業を考えなさいという指導をすることは中々できませんが(笑)、本当に自分の行きたい所へ行きなさいということ、そして出来るだけ自分で高い能力を学校で学ぶ間に身につけなさい、就職したらそれは給料を貰う、会社のニーズに応えるということに汲々とするかも知れない。だからそれまでに出来るだけ自分の実力を蓄えなさいということを一生涯懸念伝えています。今後ますます国際化の進むなか、一気に東京といわず、県内企業であっても、ASEAN(東南アジア諸国連合)ですとか、中国ですとか、そういった国々に生産拠点をつくって、活動エリアを大きくシフトさせていく企業が出てくるかも知れない。そんなとき、そういう時代の波にもちゃんとあわせて乗って、まずはある程度の国際的な経験を持つ必要があると思います。今私たちの学校では早い段階から英語教育について力を入れております。また教育方針の一つとして、海外、なかでもASEANとか中国からの留学生を多く受け入れています、同じ寮のなかで、学生たちは彼らと朝夕のご飯を一緒に取り、授業を一緒に受け、ときには彼らが少し理解しづらい日本語について解説してあげる。その反対に彼らから語学や異文化のことを学ぶこともあります。留学生の中にはTOEIC(国際コミュニケーション英語能力テスト)満点の学生さんもいるんですね。彼らアジア諸国

の人々は小学生のころから、学問というのはぜんぶ英語で勉強する人もいます。だからそういう教育環境で育ってきた留学生たちとつきあって、いろんな生活体験を含め、一緒に高専で学んだことがその後、きっと役立つことがある。和歌山の企業であれ、関西の企業であれ、活動する拠点を海外に移していくとき、高専の卒業生たちはそのとき経験した外国人とのふれあいを通して色んなことを自然と学んでいるので、そういう意味でもかなりの戦力になると信じています。

浦: すばらしいことですね。ただ高専の学生は一般的な評価として他の大学生と比べてやや外国語が弱いという印象をまだ持っておられる人もいるとか聞いているのですが、そのあたり如何でしょうか。

堀江: はて、そうでしょうか。確かに大学の受験英語的な知識や受験テクニック、そういった面で例えぼうちの四年生と、進学校から大学に入ったばかりの学生と比べて、知っている単語の数とか文法の正確さあたりなどは確かに若干弱い面があるかも知れませんね。しかし恐らく県下の進学校の中で、こんなに多くの留学生を抱えている学校は私どもの高専以外にありません。留学生の数というと、常時クラスで勉強している学生はいま二十名ほどでしょうか。先ほども申し上げましたように彼ら留学生たちの存在があって、高専の学生たちの意識もずいぶんと大きく変わってきたように思います。彼ら留学生たちと接すると、まずアジアにこんな優秀な学生がいて、自分たちも負けてはいられないという強い思いに駆られます。彼ら留学生たちはいずれ母国に帰って恐らくその国でも一流の技術者となり、母国の産業界を支えていく人たちですからね。そういうことに気づけば、自分たち日本人が研究開発とか品質管理などプロセスにおいて手を抜いたり、粗悪な製品をつくってしまえば、恥をかくのは自分ですからね。この間私たちは国立高等専門学校機構という組織の中で、理事長から直接ヒアリングがあったとき、和歌山高専は全国で五十五ある高専の一つではあ

るけれど、学校独自にその特色を出すためにも、もう少し多くの留学生を受け入れられるよう定員枠を増加できる調整をお願いしたいと申し入れ致しました。

浦:それは良いことですね。そういった留学制度が進めば和高专の実力がより国際的になって、さらにレベルアップするかも知れませんからね。私も高专を卒業後、パイオニアという会社に就職して、会社のお金で外国体験をさせていただきました。今あらためて考えると、そのとき海外で学んだことは私の人生の中でものすごく大きな影響力を持ってその後の生き方に強く投影されていると思っています。海外で長く生活していると、まず自分と違った考え方をする人間がこの世界にはたくさんいるんだということが分かる。日本人同士だどうしても同質な考え方をもちたがるけれど、外国で暮らしてみても初めて異文化にふれたとき、自分とはまったく異なった価値観を持った人間がいて、この世界は回っているんだという事実が気づかされるんですね。この経験は大変ありがたかったですね。

堀江:仰る通りですね。このあいだ二週間ほど、中国から十一名の学生が訪問して、授業と一緒に受けてもらいました。その他にも一部、日本の工場見学とかしていただきました。上海電機学院という大学なんですけど、そちらと提携を結んでおりまして、私たちの学校の学生も短期間ですが、毎年留学できるようになっています。

中:二年前ですが私もあちらで授業を受けさせていただきました。基本的に情報系がほとんどだったんですが、情報系の授業をあちらの先生が英語でやる。現地の学生に混じって授業を受けたり、中国の企業、三菱エレベーターだったけれど見学させていただきました。あと四年生の時は修学旅行で台湾に行く機会があって、そのときも現地法人の NEC に連れていってもらいました。

堀江:中さんはその二回のプログラムで海外経験を積んだということですね。どちらもアジア、今後の世界の生産拠点ですね。上海電機学院とのつ

ながりをより一層強くしようと、来年四月に新しく学年が始まりますが、その時には向こうから学生が一人うちの高专に留学して一年間勉強することになっております。そして明けた一年後の九月には向こうの新学期が始まりますから、順調に進めば、うちの学生から一人、今度は最低でも一年間、あちらの上海電機学院で勉強することになっています。

浦:それは非常に好いですね、上海ならうちの関連会社の拠点がありますので、ぜひお立ち寄りください。今は世界のフレームワークがなくて何も考えられないですからね、そういう国際感覚を身につけた人がどんどん出てくると楽しみです。私どももクオリティという会社は営業の会社として東京にありますけれど、ものづくりはこの白浜でやっていますからね。この白浜が田舎とはいわれていますが、私は白浜からも上海へはしょっちゅう出張しているわけで、国際的にやるしかないわけですよ。ですから国際感覚を持った学生さんが育ってくると非常にありがたいと思います。

中:話しが少し戻りますですけど、和歌山県には六つの大学とか高专、短大といった高等教育機関がありますけれど、連携事業も進んでいるみたいですが、中紀にある御坊市に位置する和歌山高専の役割について、どのように思われますか。

浦:いやもう、地域の発展については和歌山高専なくして語れないのではないのでしょうか。中紀以南では、やっぱり和歌山高専の貢献は大きいし、私どもは和歌山大学とはちょっとお付き合いができていないんですけど、やっぱり工業的な意味からしたら、和歌山高専に期待するところは大きいなど。今こうして卒業生が入ってくれるようになっていますし、もっともっと学生さんにも産業界の仕事をしてもらおうとして、お付き合いを始めようとしていますからね。緊密になっていく中で、やっぱりここに産業を創れるような人が育て欲しいなと思います。私どもも会社をしてみたいけれど、自分が種になって新しい会社をつくっ

てね、そういう風な人が育つように我々も動きたいなと思っておりますし、ぜひとも一緒にやりたいですね。

小堀: 県の長期計画にもね、有田市から白浜町ぐらまでの地域までを紀伊半島沿岸産業集積ゾーンとして位置づけられています。このエリアの唯一の高等教育機関は高専ですので、高専が産学連携の拠点として、この地域を担ってもらふ意義というか、その使命は非常に大きいと思いますよ。今後とも共同研究とか、色んな分野に進出して欲しいなあという風に思います。もちろん、紀中、紀南だけでなく、県下全域の高専であって欲しいですね。和高専といえばロボコン全国大会で連続準優勝とかそういった方面の話題でもその名は知られていますけれど、財団では高専の先生方のご協力を得まして、夏休みに小中学生を集めた科学教室を、もう十年以上やっています。私も現場に行ったことがあるんですが、負けず嫌いの小学生が泣きながら一生懸命模型づくりやっていますよね。競争みたいになってしまっただけで、泣きながらやっている子を見ると、おお、この子は将来良い科学者、技術者になるなって思っています。子どもたちに科学の夢を与えるようなイベントにも貢献していただいています。とくに紀中、紀南では、製造業が少ないでしょう。こうした事業を通じて高専がもっと、こういうような世界があるよということを知らせた子供たちに知らせたいですね。私は子どもは新しい窓を開いてあげればその方向に向かって行くのだけど、このあたりに住んでいると海と山と畑しか見られないし、職業も限られている。様々な世界で活躍してきた人が次の窓を開けてくれたら、そういう世界もあるという話になってくるじゃないですか。そういう窓を幾つも開いてくれるようなことを、これまでも高専は果たしてくれています。今後さらに力を入れて欲しいと思っています。

堀江: 体験講座ですとか出前授業ですとか、これは私たち高等教育機関で教授、准教授が教えているんですけども、一方で高校生段階のところ

入学者がいるわけですので、そこを逆手にとって、中学生、そして小学生の人たちをターゲットにできるだけ理科というのは楽しいんだ、実験というのはこんなに不思議なんだ、とということを経験してもらふことについては力を入れて活動しています。それは例えばこの間ですが、日本の陸地では四十六年ぶりとなる皆既日食があったでしょう。あの時も私たちの学校で教室を開きまして、硫黄島とそれから中国からの中継映像をずっと流し流しして、そして三十人ほど親子で来ていただいて、その子どもたちが時間をかけて少しずつ、みんなが黙って見ているんですよ。重なって行って最後にぱあっと真っ暗になる瞬間にわっと声が出る、また時間をかけてぱっと明るくなる、これはニュースなど三十秒の報道を見ていて、知識として知っているというのとやはり違うんですね。この時は和歌山大学さんとかビックユーとも協力してやったんですが、これからも児童、生徒たちの理科好き、数学好きの人たちにぜひいつでも遊びに来てもらって、そういう理科の体験、実験の体験などをしてもらって、そんな学校づくりをしていきたいと思っています。そしてそれを通じて、私たちの入試も変えました。社会の試験をやらないということで、国語、数学、理科、英語ということで試験をしようという方向で現在動いています。それだけではなくて「体験実習選抜入試」という試験方法がありまして、各学科の三割程度は、実験実習をやらしてもらいその特性を見出したのち、選抜して技術者として素養のある学生を採用と。これなども全国に先駆けて行っている画期的な入試の方式です。

浦: 私どもでも期待していることが一つあるのですが、地元の産業がですね、発展していくにはどうしてもITに頼らざるを得ない、そのあたりがまだ、これはたぶん和歌山だけじゃなくって、都市部じゃないところの県は弱いと思うんですね。やはりITのリテラシーをもう少し固めて仕事の上でももっと使えるようにすること。それを実現しなければいけないんですけど、その時に人材

がないんですよね。その中でたぶん高専の学生だったら三年、四年ぐらいになったらユーザーとしても十分な使い手になっているはずなんで、そういう人たちが何らかの形で地域の発展のために手伝ってくれることによって、地域のIT武装を促進する、そんな風なことが出来るのなら、それがねアルバイトという形なのか何か色々アプローチできる方法はあると思いますが、先ほど校長先生から皆既日食のお話がありましたけれど、この時代、インターネットを使えばとりあえずたいがい事が出来る、そういう手段が出来ているんで御坊にいながらにして、例えば北山村の何かをお手伝いできるとか、そういったことが可能になってきているんで、そういった意味でも和歌山高専は貢献できるのではないかなと。

同じく私も白浜に会社をつくった段階でそんなような使命は持っていると思っています。ですからお互いが協力し合って、この地域で企業がIT武装する上でのお手伝いができると思いますよ。

堀江:そうですね、私たちの学校というのは国にとって、そして和歌山県にとって、なければいけない欠かせない高専であるんだという実績をこれからも、今まで以上に固めていきたいと思っています。固めていきたいということは決して保守的になるとか、何かパターン化したものをやっていくということではなく、常に時代で必要としているものを先取りをしながらもやはり教育機関ですし、十五才から二十才という若い人を育てるところです。青年期の若人をお預かりして、そしてその人たちがオトナになっていくまでのプロセスを支えてあげるという貴重な五年間なんだということ。ある意味では親としての愛情のようなものを持って、常に優しい学校でもありたいと思っています。そういう形で学校の先生たちが一生懸命、授業をそして研究を進めていけば必ずや背中をみて立派な学生が育っていくものという風に思っております。私もできるだけ学生たちと直接に話し合う機会を持ちたいということで、校長ブログを始めました。四月から学年が始まる始業式の最初

の挨拶で四月中にはブログを始めますから皆さん読んでくださいということでスタートして、まあ週に一回ぐらいですけど、今までに十二本ぐらい書き込みました。学生たちからもいろいろな反響、意見、質問なども届いています。そういう対話というものはいまの時代は校長室に来なくてもキーボードを通じて、私のところにドキッとするような質問も来ています。これも先ほど浦さんが仰ったように、ITの時代ですね、学生との対話というのはこういうかたちでやっていいんだろうと。そのドキッとする質問を貰ったときに大変うれしく思いました。こういう形でコミュニケーションってちゃんと取れるんだということが分かりましたからね。

中:今日は和歌山高専の現状とこれからの地域産業発展に貢献できる技術者育成について大変貴重なお話を頂きありがとうございます。和歌山高専への期待の大きさに充分対応するためにも今後ますます精進する必要があることを確信しました。今日はありがとうございました。

(本対談の一部は平成21年8月21日(金)付毎日新聞に掲載されました。)

学生会・クラブ



学生会

平成 26 年度学生会長
電気情報工学科 4 年

なかに けんじ
中谷 建志さん

—自由さの守り方—

私は現在、学生会長として二年目となる年を送っていますが、その二年間だけでも、和歌山高専は大きく変化しています。学業の面ではもちろん、寮

生活やクラブ活動等の様々な場面で新たな取り組みや改革が起こっています。時代の変化に対応していくために常にあらゆる面で変化し続けることはとても素晴らしいことです。ですが、一部の制度改革の中で和歌山高専の魅力であった自由さというものが少しではありますが失われてしまったように感じており、私自身、それはとても残念なことだと思っています。

いま、和歌山高専では自由な校風のなか学生達はのびのびとした生活を送り、それぞれのペースで自主的に勉強やその他の活動に取り組んでいます。私は、学生がそのように過ごしている和歌山高専がとても好きです。しかし、自由には責任が伴います。ただやりたいことだけをやってはいけません。そのような行動を繰り返しては、自由さというものは少しずつ失われていってしまうでしょう。

自由を許されているということは、信頼されているのだということを実感し、自分の行動に責任をもち、したいことだけではなく、しなければならないことにも能動的に取り組んでいかなければなりません。学生全員がそうしてこそ、和歌山高専が伝統的に守ってきた、自由さを守っていけるのだと私は考えています。

この 50 年という歴史の節目で、私達在校生は、いまいちど、和歌山高専の自由さを守っていく決意を新たにするとともに、和歌山高専がこれから 50 年先も自由さを失わないよう、これからの新しい世代の後輩たちに自由さの守り方を伝えていきたいと思っています。



空手部

平成 26 年度主将
電気情報工学科 3 年

みやわき ゆうし
宮脇 祐志さん

いまの空手部の現状として実質活動している部員は 4 人しかいません。このままでは部が無くなってしまいう危機にあります。そもそもこの空手部は、以前は活動していたのですが、その後しばらくのあいだ休部状態になっていたという歴史を持っています。そして、いまの 5 年生の先輩方が活動を再開させ、現在に至っています。

せっかく再開させた部活をまた休部状態にしてしまうのは現部員としてなんとしてでも阻止したいところです。そのためにはやはり、部員をたくさん集め

ることが不可欠です。部員を集めるには、大会で実績を残して、部の知名度を上げることが大事だと思います。

ですが私達は今まで大会でこれといった実績を残したことがありません。大会に出るたびにまだまだ実力が足りないことを痛感させられます。しかし、私達は敗戦の悔しさをバネにして勝つためには何が必要なのかを考え、新しい練習に取り組んでいます。例えば、強豪校と合同練習をした時の経験を参考にした練習メニューを考え、自分たちの苦手分野を克服するような練習をしています。いつの日か大会で優秀な成績を残すことを目標に、日々集中して練習に取り組んでいます。

いまは部員の少ない寂しい部

活ですが、徐々に発展させていき、多くの部員がいる活気あふれる部活にしたいと思っています。

【基本情報】

部員数：12 人
活動場所：武道館、第一体育館
活動状況：火・水：室内練習
木：外練習
部長：山吹先生
顧問：山川先生

【年間の動き】

5 月末 総合体育大会
7 月 夏合宿、高専大会
8 月末 橋本の選手権大会
11 月 新人戦
3 月 春合宿



弓道部

平成 26 年度主将
電気情報工学科 4 年

やまもと しゅん
山本 峻さん

— 弓道部の歴史といま —

我らが弓道部は歴史的に見て、非常に規律正しく礼儀に厳しい部活であったようです。これは単なる噂話ですが、和歌山高専の部活のなかで一、二を争うほど厳しく、辛いと言われるほどです。その影響もあり、弓道部を卒業していった先輩方の姿は皆、凛々しく格好のよいものでした。

そんな弓道部が、年月とともに変わってきつつあります。今では、練習時間中に小話をする部員が増えてきています。さら

に、一日の練習が終わったところには、部員同士の会話が弾み、笑顔が絶えません。卒業生が見ると少し驚かれるかもしれませんね。

しかし、そんな部員たちも、先輩やコーチの先生方が指導をしてくださる際には、真剣な表情で耳を傾け、とても前向きに弓道に取り組んでいます。和歌山高専弓道部の基礎を築いてくださった先輩方の意思を引き継ぎ、部員同士の心の距離も近くなっている、そんな今の弓道部の姿は、私の誇りです。

我々が目指しているものは、二段、三段という高い段位を取得すること。そして、高専大会を主とする弓道の大会にて上位に入賞することです。我々は今、その目標に向け日々の練習に取

り組んでいます。今後も弓道部の発展と成長を暖かく見守ってくださると幸いです。

【基本情報】

部員数：35名
活動状況：毎日
活動場所：弓道場
部長：三原先生
顧問：謝先生、福田先生
辻原先生

【最近の戦績】

H 26 年度高専大会
男子団体準優勝
男子個人優勝 山本 峻
女子団体準優勝
女子個人 3 位 徳田 恋
H 24 年度高専大会
男子団体 3 位
男子個人 2 位 垣内 拓也
H 21 年度高専大会
男子団体準優勝 女子団体準優勝
H 20 年度高専大会
女子団体優勝



剣道部

平成 26 年度主将
環境都市工学科 3 年

せむら だいち
瀬村 大地さん

— 剣道部の歴史といま —

剣道部は、「克己」と「至誠」の教えを重んじている伝統あるクラブです。その言葉のとおり、私たちは剣道の技術を磨くとともに、剣道を通じて誠実で自中心のそなわった立派な人間に成長するために日々鍛錬を続けています。

私たちの稽古場である武道館には、「克己」の文字をあしらった部旗と、「至誠」の文字が入った試合用の手拭いが飾られており、これらはそれぞれ第三期生と第三十期生の先輩方が作成してく

ださいました。部旗の作成を提案した三代目部長の柳瀬さん(故人)は「克己」の権化のような方だったとお聞きしています。

和歌山高専剣道部は過去に三回全国高専大会で優勝しており、先輩方はその絶え間ない努力によって素晴らしい伝統を築いて下さいました。我々はそんな先輩方を尊敬し、誇りに思います。また、近年は近畿地区高専大会で三連覇しており、先輩方には剣道の素晴らしさだけでなく人との繋がりについても「剣」をもって教えて頂いています。

「今」の剣道部を支えるのは私たちです。今年の近畿地区高専大会も部員が一丸となって四連覇を目指して精進し、和歌山高専剣道部の伝統に恥じない試

合を行う所存です。

【基本情報】

部員数：23名
活動状況：月曜日～金曜日
活動場所：武道館
部長：楠部先生
顧問：中本先生

【最近の戦績】

H26 年度第 49 回全国高専体育大会
団体の部 3 位
H26 年度第 51 回近畿地区高専体育大会
団体の部 優勝
個人の部 優勝 石徹白 翔太
H25 年度第 48 回全国高専大会
個人の部 3 位 小出 健太
H25 年度第 50 回近畿地区高専体育大会
団体の部 優勝
個人の部 優勝 小出 健太
H24 年度第 47 回全国高専大会
個人の部 3 位 山本 有祐
H24 年度第 49 回近畿地区高専体育大会
団体の部 優勝
個人の部 優勝 山田 真希人
H23 年度第 48 回近畿地区高専体育大会
団体の部 優勝
個人の部 2 位 山本 有祐



硬式テニス部

平成 26 年度キャプテン
知能機械工学科 2 年

いわはし りょうや
岩橋 亮弥さん

— 硬式テニス部の歴史といま —

毎日、テニスコートから快音を鳴り響かせるクラブ、それが和歌山高専硬式テニス部です。硬式テニス部は今年で創部から 34 年、今や高専内でも中堅的な存在に位置するクラブです。

「楽しく!! 真面目に!! 強く!!」がモットーであり、初心者から経験者まで同じコートで練習しています。また、普段は 1~3 年生で活動しているのですが、休日などには、4 年生や 5 年生の先輩方も来てくださったりするので、とても練習になってい

ます。部長の榎原先生もごくたまに、ラケットをもってコートに足を運び、私たちと練習をされたり、試合をされたりする 때가あります。

昔は、とても人数が多く、さらに、高専大会や高体連の大会でも優秀な成績を取ることがあったと聞いています。しかし、ここしばらくは、部員数が減り(一時期、現 2 年生は 2 人)、県内でも弱いクラブになり、個人でも団体でも結果を残せていません。それでも、もう一度、先輩たちのような硬式テニス部の黄金時代を築こうと私たちは、日々練習に励んでいます。

先輩たちが築き上げてきた、この硬式テニス部の伝統は、途切れることなく次の後輩たちへと繋げていきます。そして、い

つになるかわかりませんが、いつかきっと、先輩たちのように強く活発な「和歌山高専硬式テニス部」を再興したいです。そのために私たちは毎日の練習を怠らずに頑張ります。

【基本情報】

部員数：31 名

活動状況

平日 16:30 ~ 18:50

土/日 13:00 ~ 17:00

活動場所 テニスコート (海側 2 面)

部長：榎原先生

顧問：右代谷先生、霧巻先生、野村先生、山川先生

【年間の動き】

6 月 高体連総体

7 月 高専大会、夏合宿

8 月 サマーテニストーナメント、新人戦

11 月 室内テニス大会

3 月 春合宿、スプリングステージ



硬式野球部

平成 26 年度キャプテン
環境都市工学科 3 年

こにし こうすけ
小西 康介さん

— 硬式野球部の歴史といま —

硬式野球部は昭和 40 年に創部され、和歌山高専の中でも長い歴史のある部活動の一つです。硬式野球部がこれほどまでに長い間部活動として活動してこられたのは、野球部を応援してくださる OB の方々の支えがあるからこそだと思います。また独立した立派な野球場があるのも理由の一つだと思います。

硬式野球部では学生が監督、コーチとなり指導をする学生監督という制度が伝統になっています。学生が監督をしているの

でチームの雰囲気がとてもいいのがこの制度のいいところだと思います。ここ最近の公式戦では良い成績は残せていませんが、学生監督、コーチ、選手、保護者の方々全員で一丸となって勝利を目指しています。

今年是和歌山高専創立 50 周年という記念すべき年でもあるので、とにかく夏の大会勝利にむかって日々練習に励んでいます。数年前には現在では OB にあたる先輩方が夏の大会で過去最高に並ぶベスト 8 に進出したこともあります。

硬式野球部は約二十年前に高専大会の近畿予選を数年間連続で優勝していたこともありましたが、ここ数年は予選敗退が続いていました。しかし今年は先輩方が強豪チームのひしめくな

か素晴らしい試合をしてくれて十年ぶりに見事近畿優勝を果たしてくれました。和歌山高専硬式野球部は永遠に不滅です。

【基本情報】

部員数：43 名
活動状況：ほぼ毎日
活動場所：野球場
部長：岩本先生
顧問：徳田先生、中本先生、早坂先生、平岡先生

【年間の動き】

4 月：春季大会
7 月：激励会、夏の大会、夏合宿
8 月：夏合宿、新人戦
9 月：秋季大会
11 月：冬の練習スタート
3 月：春合宿



サッカー部

平成 26 年度キャプテン
環境都市工学科 3 年

たいら りゅうた
平 隆太さん

サッカー部は開校と同時に創部され、50年という歴史を持っています。これも内外の方々およびOB・OGの方々のご協力のおかげだと感謝しております。

創部以来40年代は1部リーグに籍を置き活躍しました。50年以後は一時3部リーグに籍を置いた時期もありましたが、ほとんどの期間1部リーグに籍を置いていました。平成25年度からは高体連に籍を置くようになり現在に至ります。

平成25年度の戦績は総体、選手権共に1回戦負け、新人戦は県ベスト16で、平成26年度

の成績は総体1回戦負けでした。

サッカー部には伝統として受け継がれていることが2つあると思います。まず1つ目は先輩・後輩の間で仲がいいことです。僕が知っている限り、仲が悪い先輩・後輩というのは見たことがありません。現在も1年生から5年生まで非常に仲が良く、練習するときは集中していて、休憩になったらいろいろなところから笑い声が聞こえてくるようないい雰囲気の中で練習をしています。

次に2つ目ですが、それは寮の指導寮生が多いということです。現在、指導寮生になれる3年生以上の寮生13人のうち、実に8人がサッカー部員です。これはサッカー部の部員が、責任感があり、信頼できる人間だ

と認められている証拠だと思います。このことは我々サッカー部員の誇りです。

最後になりましたが、土曜日・日曜日にも練習をしているので、OBの先輩方には、是非練習に来ていただけたらと思います。先輩方と一緒に汗を流しながら色々なことを学べたらと思いますのでよろしくお願いします。

【基本情報】

部員数：42人
活動場所：グラウンド
活動状況：月曜日～金曜日
部長：赤崎先生
顧問：大久保先生、北澤先生、Marsh先生、森川先生

【年間の動き】

5～6月 高校総体
7月 高専大会
8月 中紀大会
10～11月 選手権大会
1～2月 新人戦



柔道部

平成 26 年度主将
知能機械工学科 5 年

てらしま よしひろ
寺嶋 良寛さん

和高専の柔道部といえはかなりの歴史と実績のあるクラブです。もちろん学校内で知らない人はないくらいの有名なクラブです。このようなクラブになれたのも歴代の素晴らしい先輩や良い環境などの様々な要因に恵まれたからで、特に次の3点は大きいと思います。

1つ目は、本格的な指導者があまりいない和高専のクラブの中で、柔道部は的確な指導を行ってくれる顧問の先生に恵まれたこと。2つ目は、先輩方が上手く部費をやりくりして購入した豊富なトレーニング器具が

揃っていること。さらに3つ目は、柔道部の長い歴史の中で培ってきた技術や経験を歴代の先輩方や顧問の先生が、途切れさせることなく教え続けてくれたことです。

現在は、5年生が持つ技術や経験をより多く後輩に伝えるために、週に1日5年生がその日の練習メニューを決め後輩を指導する日を設けています。また最近は行っていなかった新歓を復活させ、新入部員ができるだけ早く柔道部にとけこめるようにするなどの取り組みも行っています。

このように、これからも柔道部の伝統を受け継ぎつつ、自分たちでも新しい伝統となるようなことを行っていきたいと考えています。そして、文武両道の

柔道部として今後も活躍していきたいと思っています。

【基本情報】

部員数：12人
活動状況：週6日程度
活動場所：和高専武道館
部長：桑原先生
顧問：後藤先生、直井先生

【最近の戦績】

H25年度近畿地区高等専門学校体育大会
団体の部 第2位(2年連続)
個人の部 60kg級第2位 藪田大晴
H25年度全国高等専門学校体育大会
個人の部 60kg級第2位 藪田大晴
H25年度和歌山県高校総体
個人の部 60kg級第3位 藪田大晴



少林寺拳法部

平成 26 年度主将
知能機械工学科 3 年

いけだ みつし
池田 光志さん

少林寺拳法部には現在 14 人の部員が在籍していますが、私が入部した 2 年前は 5 人ほどでした。入部のきっかけは、クラブ紹介で体の小さな先輩が背の高い体の大きい先輩を簡単に投げのを見てすごいと思ったからです。それとあまり聞いたことのない「少林寺拳法」に対して好奇心を持ったからです。先輩方は全員親切で、私はすぐに先輩方と打解けて気軽に話をすることができました。同級生の部員は 1 人だけでしたが、楽しく過ごすことができました。

去年は、9 人も 1 年生が入部

し、賑やかな部に変貌しました。そして、今年にはさらに 3 人の新生が入部してくれました。入部のきっかけは、様々だと思いますが、一生懸命頑張り、真面目に技の練習に取り組む後輩ばかりです。

今、私は主将をさせてもらい、しっかりしているかと言われると失敗もあり、あまり自信がありません。しかし、そんな自分を七転び八起きの精神で徐々に変えて行き、いつか自信が持てるようになりたいと思っています。これまでの少林寺拳法部の主将は、とても頼りになる先輩方ばかりでした。これからは自分がそんな先輩になり、またそのような後輩を育てられるような部活動にして行きたいと思っています。

【基本情報】

部員数：14 人
活動場所：武道館
活動状況：平日 週 2～3 日
部長：土井先生
顧問：網島先生
監督：表先生

【最近の戦績】

平成 25 年県高等学校少林寺拳法新人大会
5 組出場
平成 25 年県高等学校少林寺拳法新人大会
自由組演武 5 位 尾上 敦紀、中原 睦貴

【年間の動き】

5 月 海岸清掃
6 月 新入生歓迎会
7 月または 8 月 夏期研修会（合宿）
11 月 高専祭出店
3 月 春期研修会（合宿）



女子バスケットボール部

平成 26 年度キャプテン
物質工学科 3 年

ぬま ゆう
沼 優さん

一女子バスケットボール部 OGの方へー

女子バスケットボール部は和
高専でも数少ない女子部員だけ
の部活です。部員は少しずつ増
え、高校生の大会にも出場でき
るようになりました。それでも、
女子だけで練習中に試合をでき
るだけの人数がないので、他
の学校と練習試合をしたり、男
子バスケットボール部の1年生
に相手をしてもらったりして、よ
り実戦に近い状態で練習でき
るように考えながら活動していま
す。そのおかげもあって、少し
ずつ試合に勝てるようになって

きました。

他にも色々といい変化があり
ます。まず、今まで男女バスケッ
トボール部だったので予算が男
子と一緒にでしたが、今年度から
女子バスケットボール部になっ
たので、予算が別々にもらえる
ようになりました。また、練習
場所が以前の第1体育館から
第2体育館へと変わったので
クリアボードを使って練習でき
るようにもりました。さら
に、本革ボール8球とボール
カゴが女子バスケットボール部
にやってきました。

このようにどんどんと良い環
境で練習できるようになってい
て、部員は楽しみながら一生懸
命に練習に励んでいます。チー
ムでジャージや移動着をそろえ
たことで一体感もさらに増し、

これまで以上に仲の良いクラブ
へと育ってきました。

私たち現部員は、先輩たち
が作り上げた女子バスケット
ボール部の部員であることに誇
りを持ち、これからさらに発展
させるために頑張っていくつも
りです。先輩たちにも成長した
私たちの姿を見てもらえたらと
思いますのでお時間があれば
ぜひ来てください。いつでも
Welcome です。

【基本情報】

部員数：10名
活動状況：毎週月、水、木
活動場所：第2体育館
部長：林(和)先生
顧問：小池先生

【年間の動き】

4月 中紀大会
5月 高校総体
7月 高専大会
11月 ウィンターカップ



女子バレーボール部

平成 26 年度キャプテン
物質工学科 3 年

みやざき ちほ
宮崎 千保さん

五年前から同好会としてスタートした女子バレーボール部はまだ歴史が浅く、正式な部活動として活動が始まったのは最近のことです。バレーボールはスパルタで厳しいイメージですが、私達は楽しくバレーをすることを方針に練習しています。女子間ではよく問題になりやすい先輩、後輩間の上下関係も苦しいものではなく、他のチームには負けない仲の良さがあります。笑い声が絶えず、周りから見ると不真面目に見えることもあるかと思いますが、大会では緊張感が無く、先生に

一喝されることもありました。それでも私たちは楽しく試合をします。そのため今年の近畿高専大会の決勝戦の審判の方には「楽しくバレーをしていても雰囲気の良いチームだ。全国でも頑張ってもらいたい」とお褒めの言葉をいただきました。これは私達チームにとってとても誇らしい事であり、これからも楽しくバレーをすること、そして全国で優勝するという強い目標となりました。

そして女子バレーボール部が楽しく仲の良いチームであることを伝統として受け継げるように、これからもチーム一丸となって頑張っていきたいです。

【基本情報】

部員数：12人
活動状況：火、木、金の16時～
活動場所：第一体育館
部長：津田先生
顧問：北澤先生、中出先生、山田先生

【最近の戦績】

平成 26 年度近畿高専大会 優勝
平成 25 年度全国高専大会 準優勝
平成 25 年度近畿高専大会 優勝
平成 24 年度近畿高専大会 優勝



水泳部

平成 26 年度キャプテン
 知能機械工学科 3 年

いたに たくき
井谷 拓紀さん

水泳部は名前の通り水泳をする部活です。水泳が得意な人もそうでない人も、水泳が好きな人が集まる部活です。運動部の中でもかなりゆるい部類に入るかと思います。ただし、練習は真面目にしています。

水泳部は不運なことに、水泳をする部活にも関わらずプールを使える期間がとても短いという宿命を背負っています。なぜかというと、毎年プール開きをしてからすぐにテスト期間に入り、テスト期間が明ければ梅雨があり、年によっては台風もやってきます。そして、やっと水温が温か

くなってくる頃に夏休みに入ってしまう。さらに、水泳部なのに夏の合宿をしないという妙な風習もあります。もともと水泳をやっている部員は合宿に参加するより地元の教室に参加したほうが質の高い指導を受けられるというのがその理由です。

しかし近年になってこの状況を変えていくために夏以外も活動しようという意見が高まり、プールが使えないシーズンも部の活動として筋力トレーニングとランニングをするようになりました。これは僕らにとってはすごい革新です。また、最近水泳教室に通っていない部員も増えているので、近い将来、夏の合宿も行うようになるかもしれません。

ただ、水泳部の特徴の一つに部長によってスタイルががらりと

変わるという部分があります。そのため僕が引退した後水泳部がどう進化するかはわかりません。これは不安でもあり楽しみでもあります。こんな風にふわふわとした部活ですが、これまで色々なスタイルに様変わりしながらも続いてきた水泳部をこの先に繋げていくべく、みんな楽しく頑張っています。

【基本情報】

部員数：36人
 活動状況：夏季週4日
 活動場所：プール
 部長：宮本先生
 顧問：藤本先生

【年間の動き】

5月 GW 終了後にプール掃除
 プールでの練習開始
 7月 高専大会
 夏休みに入ったところで活動一時終了
 年によって合宿実施
 冬季は筋トレを中心に活動



ソフトテニス部

平成 26 年度キャプテン
知能機械工学科 4 年

いしだ しんや
石田 信弥さん

現在、ソフトテニス部は部員男女合わせ 48 人と運動部としては大所帯となっているクラブです。部全体の目標としては、毎年 8 月に開催される全国高等専門学校大会出場を目指しています。この大会に出場するには近畿地区団体 1 位、個人戦 3 位（女子は 2 位）までに入賞する必要があるため、部一丸となって日々取り組んでいます。また 3 年生以下は高体連主催大会での上位成績を目指し、インターハイや近畿大会出場も目標に取り組んでいます。

普段の練習では、「楽しく」「元

気よく」取り組むことを重視し、日々励んでいます。重要な大会が近付くと朝練を行う場合もあります。また、週末には外部コーチをして下さっている本校 OB の方々から指導を受けたり、他高専や近隣の高校、一般チームとの練習試合や、大学生や一般の方も出場する試合などにも出場し、諸先輩方の叱咤激励を受けることにより部員がたくましくなっています。

こうした取組により、ここ最近（5 年間）での全国高等専門学校大会での実績は、23 年度から 4 年連続全国大会に出場（団体 2 回、個人 6 組）しており、次の世代にもしっかりと継続出来るよう、バトンを渡し続けられるよう頑張っています。

【基本情報】

部員数：48 名
活動状況：平日 授業終了後～日没まで
（夏季約 3 時間、冬季約 2 時間）
休日 9:00～17:00
（日曜は隔週で休み）
主な活動場所：テニスコート（山側 2 面）
部長：溝川先生
顧問：大久保先生、村田先生、村山先生

【最近の戦績】

第 49 回全国高等専門学校体育大会
ソフトテニス競技 女子個人の部出場
西川 ちひろ、山本 真衣
第 48 回全国高等専門学校体育大会
ソフトテニス競技 男子個人の部ベスト 8
白樫 善、糸川 貴人
第 47 回全国高等専門学校体育大会
ソフトテニス競技
男子個人の部第 2 位
畑 絢斗、糸川 貴人
女子個人の部ベスト 8
西川 ちひろ、山本 真衣
第 46 回全国高等専門学校体育大会
ソフトテニス競技 団体の部第 3 位



卓球部

平成 26 年度キャプテン
環境都市工学科 3 年

の ま たく や
野間 拓也さん

卓球部は一般的に運動が少し苦手な人の多いクラブだと思われがちですが、我が校の卓球部の OB にはそのような方は少なく、活発に活動してきました。もちろん今現在もです。その中でも最も記憶に残る活躍は平成 22 年度県新人大会で、我が校は県内でも屈指の強豪校に次々と勝利していき、見事 3 位に入ったことです。

私がこの卓球部に入部するときの卓球部の最初の印象は、練習環境が整っていて、先輩方も頼りがいのある方々ばかりだということでした。「この卓球部

なら一生懸命頑張れる。」そう思うことのできるクラブでした。

普段の練習は練習メニューを自分たちで考え、自主性を育み、強豪校に勝てるよう工夫を重ねて練習しています。基本毎日練習なので、密度濃く卓球をすることができます。練習環境はとても整っていて、体育館も広く利用させていただいており、とても充実した練習を行えています。

毎年夏休みには合宿があり、皆で泊まり、楽しみながら、練習しています。この合宿では学年を超えて先輩と後輩の親交を深め、団結力を強めます。

これからの卓球部は、OB の方々に負けずに強いチーム作りを目指し、県の大会で良

い成績をあげ、近畿大会でも活躍できるよう、精進していきたいと思います。

【基本情報】

部員数：25 名

活動状況：基本的に毎日練習

主な活動場所：第一体育館

現在の目標：県大会ベスト 8 目指して頑張っています。

部長：森田先生

顧問：佐久間先生、平山先生、
吉田先生、和田先生

【最近の戦績】

平成 25 年度近畿地区高等専門学校大会
男子団体第 2 位

平成 25 年度近畿地区高等専門学校大会
男子シングル第 2 位 大江 宏幸
男子シングル第 3 位 殿水 悠太

平成 25 年度和歌山県高等学校新人卓球大会
男子団体第 5 位



男子バスケットボール部

平成 26 年度キャプテン
電気情報工学科 3 年

かわしま なつ
川島 夏さん

昭和 39 年、和歌山高専創設時にバスケットボール部は創部されました。創設当時の近畿地区高専大会、及び和歌山県高校総体での実績は輝かしいものでした。一時期、高校体育連盟から和高専がはずれた頃は、チームの士気が低下し、部員の減少による活動範囲の制限も重なって充実した活動が難しくなりましたが、当時のバスケ好きの先輩方がチームを盛り上げ、地道な努力を積み重ねてバスケ部を存続させて下さいました。今日、我々が活動できるのはこうしたバスケットボール部の伝統を継

承し続けて下さった多くの先輩方、及び OB の方々のお陰です。

現在は高体連の大会に出場することが可能となっていますが、最近は大きな成果を残すことができていません。1～3 年生が 31 人、4・5 年生が 10 人の計 41 名が部員で、今年度から大幅に活動時間が短くなったこともあり、火・木曜日が 16:30～19:00、水曜日が 17:30～19:00 に活動しています。月・金曜日は屋外で練習し、主に走りこみや体幹トレーニングを行います。7・8 月は夏合宿を行い、その甲斐もあって平成 25 年の中紀地区の夏季大会では優勝することができました。11 月の高専祭では焼きそば店を開き、順調に売上を伸ばしています。二日目は、

OB 戦のために OB の方々も多く来てくださるので嬉しい限りです。

【基本情報】

部員数：41 人
活動場所：第 2 体育館
部長：竹下先生
顧問：小池先生、孝森先生

【年間の動き】

4 月 中紀地区春季交流戦
5～6 月 高校総体
7～8 月 近畿地区高専大会
夏合宿
中紀地区夏季大会
11 月 秋季高校選手権大会
OB 戦（高専祭）
12 月 日高招待オレンジカップ
1 月 近畿地区高校新人大会県予選
3 月 春合宿
高専春季近畿交流戦
スプリングカップ



男子バレーボール部

平成 26 年度キャプテン
電気情報工学科 2 年

たなか つよし
田中 強士さん

男子バレーボール部は現在 4 年生 2 人、3 年生 4 人、2 年生 7 人、1 年生 7 人、女子マネージャー 3 人の計 23 名で活動しています。今年は 1 年生がたくさん入部してくれて、また待望の女子マネージャーが 3 人も来てくれました。

去年までは夜練があり、週 5 日で練習していましたが、18:30～21:00 までの体育館使用が廃止になり、現在は 16:30～19:00 の週 2 回の練習で体育館を使っています。初心者もありますが、明るく個性豊かなメンバーが多く楽しく活動

しています。

高体連の大会や、高専大会ではあと一歩というところで負けてしまいます。勝つためには、攻撃面、守備面と徹底的に練習しなくてはなりません。攻撃面では、素早い攻撃で相手のブロッカーを惑わせるコンビバレーを目指していきたいと思えます。守備面では、サーブカットでセッターが動かなくても済むような、正確なカットを心掛けたいと思えます。

スパイクといえば、和高専にはすごい人がいたということを知っています。その人は、身長が 160cm 代にも関わらず、垂直跳びが 90cm のすごい跳躍力で、強烈なスパイクを打つ選手だったそうです。まさに、小さな巨人ですね。僕たちも、そ

のあこがれの先輩のようになれるよう頑張りたいです。また大会では、1 勝を目指して、粘り強い試合ができるよう日々練習に励みたいと思います。

【基本情報】

部員数：23 名
活動状況：週 2 回
活動場所：第 2 体育館
部長：津田先生
顧問：北澤先生、中出先生、山田先生

【年間の動き】

4 月 県高校総合大会
5 月 新入生歓迎会
6 月 近畿地区高専大会
10 月 県高校選手権大会
1 月 県高校新人大会



バドミントン部

平成 26 年度キャプテン
電気情報工学科 3 年

さかもと はやた
坂本 隼太さん

我がバドミントン部は、入部に特別な条件もいらず、経験者よりも初心者の方が多いクラブです。人数は他のクラブと比べると少ないですが、その分、先輩、後輩、男女の仲がとても良いのが伝統となっています。

昔から高校の大会や高専の大会以外に一般の大会にも積極的に参加し、技術向上を目指して頑張っています。練習では、バドミントンに必要な筋力、体力、バランス感覚を鍛えるため、ランニングや体幹トレーニングを欠かさず行っています。正直、厳しくて嫌になるときもありま

すが、それでもみんなで支え合いながら乗り越えています。

また、OBの方たちとの関わりがあり、昔からOBの方が外部コーチとして教えに来てくれています。最近では、OBの方や一般の方たちとの大会も開き、バドミントンを通して、交流を深めています。バドミントン部は、他校との練習試合をする機会があまりないため、とても助かっています。

このように、バドミントン部は縦と横のつながりが深く、これは我々クラブ員の誇りです。これからもOBの方たちとの交流を深めながら、我々の大切にしている言葉「百折不撓」の気持ちを忘れずに、大会で一つでも多く勝ち星を挙げられるよう、日々練習に取り組んでいき

たいと思います。

【基本情報】

部員数：男子 16 名 女子 9 名
活動状況：月曜～土曜
活動場所：月、水、金、土 第二体育館
火、木 外練習
部長：西本（圭）先生
顧問：霧巻先生、直井先生、藤本先生

【最近の戦績】

平成 26 年度総体和歌山県予選 優勝
柏木 結介・坂本 隼太組
平成 26 年度総体和歌山県予選
男子団体 3 位
平成 25 年度近畿高専大会
女子シングルス 準優勝 坂本 実紀
平成 25 年度近畿高専大会
女子団体 3 位
平成 25 年度近畿高専大会
男子シングルス 準優勝 柏木 結介
平成 25 年度近畿高専大会
男子ダブルス 優勝 柏木 結介・坂本 隼太組
平成 25 年度近畿高専大会
男子団体 3 位



ハンドボール部

平成 26 年度キャプテン
物質工学科 2 年

や すぎ のり あき
八杉 憲彰さん

ハンドボールは 7 人 1 組の 2 チームで相手のゴールにボールを投げ入れて得点を競うスポーツで、とても楽しいスポーツです。相手を抜いた時や難しいところへパスが通った時、シュートが入ったときはとても達成感があります。難しいところは、体育館を大きく使うのでずっと走り続ける体力やボールを速く投げる筋力、それに空中でシュートする際のバランス感覚など、挙げるときりがありません。

現在のハンドボール部の練習は、キャッチボールから始まっ

てキーパー練習、ポジションごとのシュート練習、試合を想定した 3 対 3 などを行っています。また、4 年生、5 年生を相手にした紅白戦をすることもあります。この 4、5 年生相手の練習は一般高校ではありえないもので、高専ならではの練習といえるかもしれません、ここで先輩からいただいた多くのアドバイスを参考にして、自分なりにアレンジしたプレーを考えたりもしています。

練習時間が限られている中、夏に 3 年生も引退し、今は 1 年生と 2 年生の合計 7 人で活動しています。人数的に試合をするのもやっとの状況ですが、それでも効率良くできる練習メニューを考えて日々切磋琢磨しています。

大会には先輩方が着たユニフォームで出場します。これまでこのユニフォームを着てきた先輩方に少しでも近づくこと、一回でも多く勝つことを目標に、部員全員で頑張っている練習をしています。

【基本情報】

部員数：7 人

活動状況：

月・水 16:00 ~ 19:00

木 16:00 ~ 17:30

活動場所：第一体育館

部長：奥野先生

顧問：早坂先生、三岩先生

【年間の動き】

夏は特に暑いので、体力をつけるために外で走ることもメニューに入れています。また、夏は新チームに変わってすぐでもあるので、その年の大まかな目標も夏に決まります。

その後は各々のスキルを上げる努力をし、大会に挑んでいます。



フットサル部

平成 26 年度キャプテン
知能機械工学科 3 年

ないとう しゅんすけ
内藤 駿介さん

僕たちフットサル部は、両手で数えられるほどのとても歴史の浅い部です。フットボール好きの生徒たちが集まって楽しくボールを蹴る部活です。部員には一度はサッカー部を志したものが多くの特徴で、フットサル部では「楽しくボールを蹴っていく」という創部当時のモットーを守りつつ活動をしています。

当初は同好会だったのですが、大会に出場したり、地元の社会人チームの方などとの練習試合をしたりする機会も増えるようになりました。このような活動が認められて最近、同好会

から部へと昇格しました。これに伴って部費ももらえるようになりました。これは和高専フットサルクラブにとって大きな一歩です。

ユニフォームを作ることがいまのぼくたちの目標です。フットサルは室内スポーツなので、できれば体育館でやりたいのですが、現状では贅沢を言っているいけないと思っています。

少しマイナーなスポーツなので、高専大会などもなく、他の高校と試合することがありません。そのため自分たちで試合相手や大会を探さなくてははいけません。いつもお世話になっている大会会場が最近閉鎖したので大会がずし遠いものになってしまったのがいまのフットサル部の悩みです。

いま、様々な国からの留学生がフットサル部に多くきてくれて

います。ボールがひとつあれば、言葉を介さずとも仲良くなれますし、ワールドカップ気分も味わえます。そんな国境を越えるスポーツの素晴らしさをおしえてくれる部でもあり、これからもこの雰囲気や伝統としていけるように頑張っていこうと思っています。

【基本情報】

部員数：16名
活動状況：月曜～木曜
主な活動場所：多目的グラウンド
部長：秋山先生
顧問：重松先生、濱田先生

【年間の動き】

昨年、同好会から部に昇格しました！新年度が始まると部活紹介ではリフティングを披露。新入部員が決まると鍋を囲んでの歓迎会で打ち解けます。年に2、3回、コート草刈り、砂入れをしますが、これもチームワークを高めるために役立っています。御坊の社会人チームを相手に練習試合などを行っています。



ボクシング部

平成 26 年度キャプテン
電気情報工学科 2 年

きたの ゆうま
北野 佑磨さん

— OB の先輩方へ —

部員が少ないボクシング部です。僕が入部するため、入部希望の同じクラスの 2 人と初めて練習を見学しに行ったときは 3 年生のキャプテンが 1 人で練習していました。その人はとても面白い人で、部の先輩はどんな人かなどたくさんのことを教えてくださいました。

8 月に大会が終わるとそのキャプテンが辞め 1 年ながら僕がキャプテンを務めることになりました。それからは 4、5 年生の先輩と練習することが増えました。

よくきてくれる増田先輩（環境の 5 年生）は筋肉隆々で、パンチ力があり最初の頃は正直なところとても怖かったです。

ですがそんな見た目とは裏腹に高学年の先輩方はとても親切で、今でもよく練習に来てくれています。部員が自分 1 人になっても、怪我をして 8 か月以上まともに練習できなくなっても、僕は辞めずに頑張ってきました。それはそうした厳しくもあたたかい先輩方がいてくれたからです。これからも先輩方が教えてくれたことを忘れず日々精進していきます。

【基本情報】

部員数：4 人
活動状況：月、火、水、金 ジムワーク
木 ロードワーク
活動場所：武道館、第 2 体育館、
第 1 体育館周り
部長：岡本先生
顧問：米光先生

【最近の戦績】

H24 県高校新人大会
バンタム級優勝 増田 誠
近畿高校新人大会
バンタム級 3 位 増田 誠
H23 高校総体県大会
ライトウェルター級優勝 増田 誠
高校総体全国大会出場
増田 誠
H22 高校総体県大会
ライトフライ級優勝 片田 茂人
フライ級優勝 坂本 成輝
高校総体全国大会出場
片田 茂人、坂本 成輝
H21 県高校新人大会
フライ級優勝 坂本 成輝
ライト級優勝 高澤 大真
近畿高校新人大会
フライ級 3 位 坂本 成輝



ラグビー部

平成 26 年度キャプテン
環境都市工学科 5 年

くましろ だい き
熊代 大輝さん

「ラグビー（闘球）」。この競技は団体競技で最多の 15 人の選手が楕円球を持って走ったり、蹴ったりしながらゴールまで運ぶ熱いスポーツで、ひとチームのメンバーが多いことからチーム内での強い団結が求められます。

ラグビー部は 1 年生から 5 年生までが、現役の選手として、高専大会を目指して練習に励んでいます。練習の風景は部員全員が仲良く、のびのびと、そして一生懸命に取り組んでいます。先輩たちの卒業により、それまで 15 人以上いた部員は、現在

たったの 7 人となってしまいました。ですから、最近の試合には他の部活を引退した人たちに参加してもらいながら、なんとか出場しています。

練習・合宿・試合など、部員が足りないという苦労もありますが、こうした困難な状況の中でもあきらめることなく頑張っていることで部員同士の絆が高まっていくのを僕自身感じています。練習以外にもビーチラグビー大会に参加したり、川に遊びに行ったりと楽しいイベントもあり、これらも強いつながったチームづくりに一役買ってくれています。

マネージャーも部員の一員として選手たちのため、しっかりとサポートし、僕たちの練習を支えてくれています。

ラグビーは危ないスポーツと思われがちです。しかし、試合でチームのためにタックルをし、ボールを取り合い、トライを目指して全力で走るというのは、ラグビーでしか味わえない達成感で、とても魅力あるスポーツです。そんなラグビーを真剣に楽しめるよう、これからもメンバー全員で練習に励んで行こうと思っています。

【基本情報】

部員数：20 人
活動状況：16:30～18:30
主な活動場所：
グラウンド、筋トレルーム
部長：森岡先生
顧問：中出先生、野村先生

【年間の動き】

4 月：第 1 期部員の発掘
7 月：第 2 期部員の発掘 前期夏合宿
8 月：後期夏合宿
11 月：OB 戦 高専大会



陸上競技部

平成 26 年度キャプテン
環境都市工学科 3 年

で き き な つ こ
出崎 名津子さん

—陸上競技部の歴史といま—

和歌山高専で長い歴史のある部活動の中の一つである陸上競技部は、昔から多くのことが先輩方から受け継がれています。キャプテン、副キャプテン、マネージャーという体制は今では当たり前のようになっていますが以前はそれがなく、数代前の先輩方が生み出してくださったものです。高専祭での出し物のホットドックなども私たちが入部する以前から引き継がれ続けている伝統です。陸上部は毎年全国へ選手を送り続けていま

す。それもまた伝統の一つです。

以前、陸上部の部員数は学内最大を誇っていました。今でも毎年新入部員が数多く入部し、種目の関係なく部員一同楽しく練習に励んでいます。現在、陸上部は女子キャプテンを中心に部活動に励んでいます。そのため数少ない女子部員への配慮やマネージャーへの配慮に力を入れており、先輩たちが作ってくれた体制をさらにより良いものにしようと思っています。

高専陸上部はコーチの先生がいないため、自分たちで練習を考え、部をつくってきたことを誇りにこれからたくさんの練習を積み重ね良い記録を作りたいです。

最後になりましたが、これからの陸上部の目標は先輩たちの

伝統を今まで以上に大切に、これまでのことを見直して次の代により良い形で引き継いでいくことです。

【基本情報】

部員数：54 名
活動状況：月曜日から金曜日
主な活動場所：グラウンド
部長：芥河先生
顧問：孝森先生、辻原先生

【最近の戦績】

平成 25 年度和歌山県高等学校総合体育大会
女子砲丸投げ 2 位 宮本 佳奈
平成 25 年度和歌山県高等学校ユース
陸上競技対校選手権大会
男子 1 年砲丸投げ 3 位 宮本 章弘
平成 25 年度近畿高専大会
女子砲丸投げ 3 位 出崎 名津子
平成 25 年度全国高専大会
女子砲丸投げ 2 位 宮本 佳奈
男子円盤投げ 6 位 山澤 優
平成 26 年度近畿高専大会
女子砲丸投げ 1 位 宮本 佳奈
男子円盤投げ 2 位 山澤 優
平成 26 年度全国高専大会
女子砲丸投げ 2 位 宮本 佳奈
男子円盤投げ 8 位 山澤 優



環境福祉ボランティアサークル amoeba

平成 26 年度代表世話人
環境都市工学科 3 年

さとう しゅうた
佐藤 周太さん

amoeba は、1997 年のナホトカ号重油流出事故のボランティアに参加した当時の先輩方が、身近なところでもボランティアをしていこうと立ち上げられたサークルです。環境問題やボランティア活動に対する関心が高まる中、浜そうじを中心に、森林ボランティアや募金活動など環境福祉に関わる多くの活動をしています。

「amoeba」という名前の由来はいろいろな説があるようですが、有力な説は自由に体を変えられる単細胞生物のアメーバからとったもので、アメーバの形

態のようにメンバーを固定せず活動に興味をもった人が自由に参加できるようにと名付けられたようです。現在でも、「気軽に楽しくボランティア」をモットーにメンバーや活動場所を固定せず、活動の度に興味を持った人が参加できる形式をとっています。活動は、amoeba の学生代表である世話人を中心に現在も和歌山高専唯一のサークルとして活動を盛り上げています。

最近では、amoeba の発足当時から続く浜そうじに対して、御坊市長から表彰を受けることができました。この表彰は、現在まで amoeba を支えてくださった先輩方のおかげであると思います。

今でも、春、夏の年 2 回行

われる合宿で OB・OG の方々に参加していただきうれしく思います。これからも amoeba の伝統を引き継ぎ、活気のあるサークルを目指していきたいと思います。

【基本情報】

メンバー数：50 名

活動状況：月 1～2 回の活動

顧問：赤崎先生、岸本先生
米光先生、和田先生

【活動実績】

- ・2014 年 6 月 御坊市長より感謝状
- ・2012 年 8 月 和歌山森林管理署と「川又遊々の森における体験活動に関する協定」締結
- ・2011 年 11 月 和歌山保護観察所長より感謝状
- ・2009 年 6 月 第 8 回和歌山環境大賞受賞



囲碁・将棋同好会

平成 26 年度主将
知能機械工学科 4 年

やすかわ ゆうすけ
安川 裕介さん

～囲碁・将棋同好会のこれから～

卒業生の皆様、はじめまして、囲碁・将棋同好会です。この度、和歌山高専の創立 50 周年記念ということで記念誌に載せていただき非常に驚きの気持ちでいっぱいです。なぜなら本同好会は 3 年前にできたばかりであり、この記念誌を手になさった多くの方がこの同好会の存在を知らないであろうと思われるからです。ですので、この記念誌を通して少しでも多くの方に本同好会の存在を知ってもらえとうれしいです。

本同好会は囲碁という言葉が名前の中に入っていますが、囲碁の道具がなく、また囲碁のルールを知らない人が多いので実質的には将棋を主体に活動しています。年に一度の高専祭では対局場を開いておりますので将棋に興味のある方、腕に覚えのある方にはぜひおいでいただけると嬉しいです。ぜひ我々と対局を楽しみましょう。

囲碁・将棋同好会には他のクラブとは一つだけ大きく違うところがあります。それは主将を決める方法が実力制だということです。具体的には年度末に 4 年生以上を除く部員でトーナメント戦を行い、そこで優勝したものが次の年の主将になるのです。そのため、2 年生でいきなり主将になるということも可

能です。ただ本同好会ができてから 3 年間主将はわたくしのままで変わっておりません。

入会者もほかのクラブに比べてとても少ないので、将棋の強い新生が入ってくれることを心待ちにしています。できたばかりで歴史も浅いですが、これから会員全員で励んでよき歴史と伝統を作っていきますのでどうか応援のほどよろしくお願ひします。

【基本情報】

部員数：18 名
活動状況：金曜日以外の放課後
活動場所：4A 教室
部長：平岡先生
顧問：現在なし
(前年度まで濱田先生)

【年間の動き】

4 月 新生生の勧誘
11 月 高専祭での一般の方との対局
3 月 主将決定戦



音楽同好会

平成 26 年度代表
環境都市工学科 3 年

いとがわ まな
糸川 真奈さん

—音楽同好会の歴史といま—

吹奏楽部でも軽音楽部でもできない楽器を演奏することができる同好会……それが、私たち音楽同好会です。

いまから7年前、合唱をできそうな部活がなかったため新たに立ち上げを決意し、学生会にお願いしてスピーチ・賛否をとってなんとか立ち上げに至りました。しかし、指導者がおらず、皆の前で歌うのが恥ずかしいと言いつ出す子もいて、立ち上げ早々ピンチが訪れました。

そこで様々な楽器を試すう

ちにミュージックベルに落ち着き、その後バイオリンやピアノができる新生が入ったのを機に、それぞれが好きな楽器を持ち寄り演奏するという、異色楽器コラボ演奏がスタート。同時に、諦めかけていた歌（合唱）にも挑戦しようということになりました。

それから、マイペースに活動を続け、メンバーは少ないながらも現在私が4代目の代表となっています。

毎年『高専祭』での発表は欠かさずに行っていて、見に来てくださる方も年々増えていっているような気がして嬉しいです。昨年の発表では、ボイスパーカッションを取り入れた演奏を行い、多くの方から褒めていただくことができました。このこ

とを機に、これからは、様々な演奏に挑戦していきたいと思っています。

『音を楽しむ』。この気持ちを忘れずに今後も頑張っていきたいと思います!!!

【基本情報】

部員数：15人
活動状況：毎週月曜～金曜
活動場所：教室または100番教室
部長：吉田先生

【これからの目標】

高専祭での発表。そして地域での演奏活動を実現したい!!

【年間の動き】

4月 新入部員探し
5月～10月 高専祭に向けての練習
11月 高専祭での発表会
2月 追いコン



軽音楽部

平成 26 年度代表
電気情報工学科 3 年

ひらの まなみ
平野 愛美さん

軽音部は当初、軽音楽同好会として活動していました。それ以前にもバンド単位の活動が行われていて、高専祭、寮祭等に出演していたそうです。しかしバンド単位の活動では練習日や練習場所、音響機器に制限がありました。そのため、軽音楽同好会が設立され、その後先輩方の努力により軽音楽部となりました。

軽音楽部となった今は部室があり、音響機器もそろっているので練習したいときに練習できる環境になりました。現在、寮祭に出演はしていませんが、新

入生歓迎ライブ、スニーカーエイジ、高専祭、卒業ライブ、地元のライブ、と少しずつ活動する場が増えています。

スニーカーエイジは軽音部が唯一参加する軽音楽の大会です。年に一度大阪で行われており、軽音楽の甲子園とも呼ばれています。この大会では演奏者だけでなく応援をする側も審査対象となるので、応援はとても重要です。これはバンド単位でなくクラブで活動しているということに重きを置いているからです。しかし、軽音部は兼部ができることから、部員数が最も多いクラブのため、一体感を出し切れていないのが状況です。今後の課題としては、バンド単位でなくクラブとしての活動を増やしていき、先輩、後輩の交

流も増やしていければいいなと思っています。

【基本情報】

部員数：約 60 名
活動状況：基本は個人練習
活動場所：ライブがある時期になると放課後、部室で練習
部長：伊勢先生
顧問：重松先生

【年間の動き】

5 月：新入生歓迎ライブ (BBQ)
8 月：スニーカーエイジ (合宿有)
11 月：高専祭
12 月：azbil ライブ
2 月：卒業ライブ



コンピュータ部

平成 26 年度代表
電気情報工学科 3 年

うえの やま だいすけ

上野山 大介さん

—コンピュータ部の伝統と これから—

コンピュータ部では和歌山高専の文化祭である高専祭でメンバーがいくつかのゲームを作成し、それを展示しています。これはコンピュータ部の伝統となっています。ゲームのジャンルとして、アクションやパズル、また、2D や 3D など、たくさんの種類のものを作成しています。

このゲームについてはメンバーが自分の作りたいものを自由に作り、誰かが強制をして作らせるということはしていません。しかし、入部したばかりの

1 年生は、どのようにゲームを作成をしたらいいのかわからず、自由に活動しているだけではゲームを作ることができない場合が多いです。そのため、コンピュータ部では入部したばかりの 1 年生にゲーム作成の基礎を教える授業を行うことも伝統になっています。これにより、1 年生でもゲームの作成ができるようになってきます。このように、授業やゲーム作成など、堅苦しいことをしているように見えるかもしれませんが、実際には先輩・後輩、分け隔てなく、楽しく、協力をしながら活動をしています。

これからは、伝統であるゲーム作成のほかに、マイクロコンピュータを用いたものやその他ソフトなど、コンピュータに関

するものも作成していきたいと思います。また、それらを高専祭で展示したり、さまざまなコンテストに出品して力試しをしたりして実績を積みあげていきたいと考えています。

【基本情報】

部員数：34 人
活動状況：月曜日、水曜日
活動場所：情報処理センター
第一演習室

部長：森先生
顧問：青山先生

【年間の動き】

4 月 新入生歓迎会
7 月 夏合宿
10 月 プログラミングコンテスト
11 月 ソフトウェアコンテスト



サイエンス同好会

平成 26 年度サイエンス同好会代表
物質工学科 4 年

なか お ゆう が
中尾 侑雅さん

現在、サイエンス同好会は楽しく実験するというコンセプトで活動しています。明るい子が多く、明るさではどのクラブにも負けていないと思います。私が 1 年生の頃は、会員数が少なくこのままではつぶれてしまうのではないかと心配していました。しかし、後輩が入会してくれたおかげで会員数が年々増加しました。今では大人数で活動できることに感激しています。

サイエンス同好会にはとても長い歴史があり、この同好会は 1995 年 4 月からスタートしま

した。当時、物質工学科の 1 年生だった西島さんと坂下さんが「理科クラブ」をやりたいと着任早々の林先生に話をしたのが発足のきっかけです。最初は学生が 2 人しかいなかったのですが、月日が経つにつれていつの間にか 20 名を超える人数になったそうです。創立して 3 年後には、ロボコンに出場し、2 回戦まで進出するという記録も残っています。

その設立から 20 年が経とうとしています。高専祭の催し物には実験の展示をし、お客さんに喜んでいただけています。今年も会員数が増え、女子が多く入ってくれたので、より一層活気が出てきました。これからも、楽しくクラブができるように頑張りたいと思います。

【基本情報】

部 員 数：19 人
活動場所：分析化学実験室(物質棟 1F)
活動状況：毎週 火・水曜日
部 長：林先生
顧 問：岸本先生

【年間の動き】

4 月 新入部員の勧誘
5 月 新歓 BBQ
6、7 月 テーマを決めて実験
8 月 大学見学
9、10 月 高専祭の準備(実験の考案)
11 月 高専祭



写真部

平成 26 年度代表
知能機械工学科 4 年

しまだ こたろう
嶋田 胡太郎さん

和高専一ゆるいクラブだと自負する写真部は意外にも歴史が長く、いまの部長である濱田先生が和高専に来られたころには既にあったとのこと。しかし、その当時（1995 年）写真部は廃部寸前で、先生が鉄道旅行友の会というクラブから一人部員を借りてきて、なんとか存続させていたようです。

そんな写真部も最近では、高専祭で OB の方々と共同で記念撮影プレゼント企画を開催したり、体育大会で学生会から撮影の仕事を受けたりするなど活動的になってきました。現に、高

専祭の企画は毎年恒例の企画となりつつあります。

その上、写真部の貸し出し用カメラ（主にペンタックス）も増え、部員全員に貸し出せることができるようになったのもこうした流れを助けてくれています。また、今年はやる気のある部員が多く入部してきたこともあって、さらに活気づいているように感じます。

学内のイベント撮影以外にも、年に何度か撮影会を行い和歌山周辺の画になるような場所を探し、撮影しに行っています。

これからの目標としては、どんどんコンテスト等に応募し、実績を残せるよう頑張っていきたいと思います。そして、今は日帰りで行っている撮影会も泊まりがけで行い、充実したもの

にして、部員同士で刺激しあい経験を積んでよい写真が撮れるようにしていきたいです。

【基本情報】

部員数：15 人

活動状況：月 2 の頻度で作品発表
年に数回、部で撮影会
体育大会高専祭等の撮影
学校の諸行事の撮影依頼を受けての撮影

部長：濱田先生

【年間の動き】

4 月：新入生勧誘

5 月：体育大会撮影

7 月～8 月：撮影旅行

10 月：体育大会撮影

11 月：高専祭

12 月：ニコンフォトコン

月 2 回程度ミーティング兼作品発表



吹奏楽部

平成 26 年度主将
環境都市工学科 4 年

しらい だいち
白井 大地さん

吹奏楽部というと文化部の王道といったイメージが僕にはあります。そして、我が校にも吹奏楽部があります。和歌山高専吹奏楽部の創部がいつごろなのかは、はっきりとはわかりませんが、毎年 1 月に開催している定期演奏会は今年度で第 26 回になることから長い伝統をもっていることに違いはありません。

定期演奏会では毎年、OB、OG の方が参加してくださるので、いつもよりも壮大な演奏を聴くことができます。吹奏楽部は他の部と比べて卒業生との交

流が深く、土日の練習には社会人となった卒業生が顔を出し、指導してくれています。

毎年、部員の確保は大きなハードルとなっていますが、最近は部員数も少しずつ増え、より一層文化部の王道らしくなってきました。

主な活動として定期演奏会のほかに、毎年 8 月に吹奏楽コンクールに出場しています。ここでの成績は毎年銀賞です。一昨年までずっと太古先生が指揮をしていたのですが、太古先生の退官にともなって去年は河地先生、そして今年度は西本先生と、僕たちの世代はいろいろな先生の指揮を経験しています。

少し前とは練習環境も変わりつつありますが、今後の活躍に期待してください。

【基本情報】

会 員 数：25 名

活動状況：平日 16:15 ~

土、日は隔週で練習

主な活動場所：合宿所

部 長：西本(真)先生

顧 問：青山先生、右代谷先生、
佐久間先生

【年間の動き】

4 月 入学式(国歌と校歌を演奏)

7 月 中紀吹奏楽フェスティバル

8 月 和歌山県吹奏楽コンクール
(毎年銀賞を受賞)

1 月 定期演奏会

3 月 卒業式(国歌と校歌と退場の
BGM を演奏)



総合美術同好会

平成 26 年度学生代表
物質工学科 4 年

つちだ ゆうすけ
土田 裕介さん

創立 50 周年という記念すべき節目で、このような挨拶を書かせていただき、大変光栄です。光栄なことといえば、和歌山高専 50 周年を記念したマスコットキャラクターの公募で、見事、我が総合美術同好会員の作品が選ばれました。

さて、総合美術同好会はかつてアニメ研究会という名前でした。当初の活動内容は絵を描くこと。その後、「小説を書きたい」という先輩の要望により、総合美術同好会に名前を改め、小説と絵を創る同好会になりました。アニ研時代を含めると既

に 10 年近く続いている同好会ということになります。

最近の活動についてですが、去年はノベルゲームを創りました。小説部門がストーリーと本文を担当し、絵画部門がキャラクターの絵を描くことで、初めて同好会が一丸となった作品を創ることができました。今年もこれに続いて、絵と文章が手を取り合った作品を創る試みがなされています。加えて、今年は知的財産コンペティションへの参加が決まっております。他にも何か参加のできそうなものには積極的に参加をしていく方針です。

最後に、今年は会員が大幅に増え、これまで以上に活気に満ちあふれた同好会になりました。ただ賑やかなだけでなく、「ああじゃない、こうじゃない」

と、互いに刺激し合い、よりよい作品作りをし、これを総合美術同好会の伝統として行けたらと思います。

【基本情報】

会員数：25 人
活動場所：4C 教室
活動状況：水曜日 17:10 ~
会長：後藤先生

【年間の動き】

4 月 新入会員の勧誘
6 月 新入生歓迎会
9 月 知的財産コンペティションへの参加
11 月 高専祭での作品展示及び配布



ロボコン部

平成 26 年度代表
電気情報工学科 4 年

まえ い やす ひ で
前井 康秀さん

我がロボコン部は NHK が主催する大会である高専ロボコンでの全国優勝を目指し、ものづくりの得意な学生が集まって日々ロボットの製作に取り組んでいるクラブです。

他のクラブと比べ活動時間は比較的多く、全国優勝のプレッシャーからか真面目で厳しい先輩も多いので、中途半端な気持ちで入部するのはおすすめしません。本当にものづくりやロボットが好きでないと、楽しみながら続けるのは難しいと思います。その代わりに、ものづくりに自らの手で触れて学ぶ

ことができますし、工学系の本質的な楽しさに気づくことができると思います。なにより、自分たちが半年かけて一生懸命作ったロボットが大会でうまく動いたときの喜びは格別です。

ロボコン部は 2006 年を皮切りに、2013 年まで近畿地区大会で優秀な成績を残し、8 年連続全国大会に出場しています。その記録の中に全国ベスト 8 や全国準優勝は何度かあるのですが、全国優勝はまだ一度もありません。毎年、今年こそは全国優勝！と意気込み、活動に取り組んでいます。これからも私たちは近畿地区初、そして和歌山高専初の全国優勝に向け、ロボット製作に精進するつもりですので、応援よろしくお願いします。

【基本情報】

部員数：24 人
活動状況：毎日
主な活動場所：ロボコン部部室
現在の目標：高専ロボコン全国優勝
部長：山口先生
顧問：徳田先生、村山先生

【最近の戦績】

2013 高専ロボコン全国大会ベスト 8
2012 高専ロボコン全国大会ベスト 16
2011 高専ロボコン全国大会ベスト 8
2010 高専ロボコン全国大会準優勝
2009 高専ロボコン全国大会ベスト 8
2008 高専ロボコン全国大会ベスト 8
2007 高専ロボコン全国大会準優勝
2006 高専ロボコン全国大会準優勝
(8 年連続全国大会出場中)



和の文化研究会

平成 26 年度会員代表
物質工学科 4 年

かさ し おり
倍 詩織さん

—和の文化研究会の歴史といま—

和の文化研究会は、はじめ“国際文化研究会”という名前で留学生を中心として、平成 19 年 5 月から活動を開始しました。その後、平成 20 年 10 月に国際交流に基づいた学びの場として和の文化研究会が発足し、日本の伝統文化を学び、社会で役に立つマナーを楽しく学ぶことのできるクラブとなりました。

和の文化研究会は、発足してから昨年度まで、校内ではなく校外で活動をしていましたが、

今年度から校内に活動場所を移しました。校内に活動を移してから間もないため、活動内容が定まっておらず、記載した年間の動きや活動状況は昨年度までのものになっています。

昨年度までは、茶道、着付け、マナーを外部の専門の先生に教えていただいていた。茶道ではお茶の作法や心を、着付けでは夏に着る浴衣から本格的な着物までを、マナーでは立居振舞・テーブルマナー・儀礼などを学びました。また、これらの資格を取得することも目標として活動していて、和の文化研究会が始まってから今まで、茶道の御免状やビジネスマナーの資格などを多くの会員が取得しています。

今年度からは、校内で活動す

るにあたり、今はマナーのみを取り上げて活動をしようと考えています。これからも、日本文化を学べるクラブとして存続していけるように頑張っていていきたいと思っています。

【基本情報】

会 員 数：14 名
活動状況：月 3～4 回程度
活動場所：学校内の教室
会 長：謝先生
顧 問：森川先生

【年間の動き（昨年度）】

4～7月 通常活動
9～11月 高専祭にむけてのお茶会の練習
11月 お茶会
12月～ 通常活動
1月末 追いコン



資料



— 学生関連 —

和専「ウメンライダーW」準優勝

ロボコン全国大会で大健闘



ロボコン全国大会で、和歌山工業高等専門学校（和専）の「ウメンライダーW」チームが、ロボコン全国大会で準優勝を挙げた。大会は、11月19日から21日まで、和歌山県立大学で開催された。和専からは、ロボコン部員らで構成された「ウメンライダーW」チームが出場し、大会で準優勝を挙げた。大会は、ロボコン部員らで構成された「ウメンライダーW」チームが出場し、大会で準優勝を挙げた。

ロボコン全国大会は、ロボコン部員らで構成された「ウメンライダーW」チームが出場し、大会で準優勝を挙げた。大会は、ロボコン部員らで構成された「ウメンライダーW」チームが出場し、大会で準優勝を挙げた。

紀州新聞 2010年11月25日

和専「技」チームが優秀賞獲得

全国高専デザインコンペティション



全国高専デザインコンペティションで、和歌山工業高等専門学校（和専）の「技」チームが、全国高専デザインコンペティションで優秀賞を獲得した。大会は、11月20日から22日まで、和歌山県立大学で開催された。和専からは、「技」チームが出場し、大会で優秀賞を獲得した。大会は、全国高専デザインコンペティションで、和専の「技」チームが優秀賞を獲得した。

全国高専デザインコンペティションは、和専の「技」チームが優秀賞を獲得した。大会は、全国高専デザインコンペティションで、和専の「技」チームが優秀賞を獲得した。

紀州新聞 2010年11月27日

木下さん(和専)CG部門で最優秀

わかやまソフトウェアコンテスト



わかやまソフトウェアコンテストで、和歌山工業高等専門学校（和専）の木下さんが、わかやまソフトウェアコンテストで最優秀賞を受賞した。大会は、11月18日から20日まで、わかやま市で開催された。和専からは、木下さんがCG部門で最優秀賞を受賞した。大会は、わかやまソフトウェアコンテストで、和専の木下さんが最優秀賞を受賞した。

わかやまソフトウェアコンテストは、和専の木下さんが最優秀賞を受賞した。大会は、わかやまソフトウェアコンテストで、和専の木下さんが最優秀賞を受賞した。

紀州新聞 2012年2月18日

和専チームが2位入賞

全国高専英語プレゼンコンテスト



全国高専英語プレゼンコンテストで、和歌山工業高等専門学校（和専）のチームが、全国高専英語プレゼンコンテストで2位入賞を果たした。大会は、11月27日から29日まで、和歌山県立大学で開催された。和専からは、和専のチームが出場し、大会で2位入賞を果たした。大会は、全国高専英語プレゼンコンテストで、和専のチームが2位入賞を果たした。

全国高専英語プレゼンコンテストは、和専のチームが2位入賞を果たした。大会は、全国高専英語プレゼンコンテストで、和専のチームが2位入賞を果たした。

紀州新聞 2013年1月30日

- 50周年関連 -

還暦同窓会

国立和歌山工業高等専門学校昭和44年卒業生
ホテルグランヴィア和歌山



平成21年4月25日

和歌山高専の1期生として卒業した機械工学、電気工学、工業化学の3学科の還暦を機会に9人の恩師を囲んで88名が集った。45年前のオリンピックの年に開校した高専に入学し、日本の高度成長期の40年間を各種の専門分野で貢献してきた熟練技術者が地元の母校への恩返しを誓い合った。

和歌山高専では、昨年から企業技術者活用プロジェクトとして、和歌山高専人材バンクシステムを構築中であり、OBを元教員が多数登録しており、異中小企業支援にも動いている。5年後には50周年創立50年という節目も盛り上がり、また、第2の高専ブームが到来し、日本のものづくり復活が期待されており、彼らの今後の活動に注目したい。また、グリーン認証の同窓会として自然エネルギー100%で実行できた同窓会となった。

わかやま新報 2009年6月20日

歴史、伝統引き継ぎ、新たな未来へ

和歌山高専50周年



和歌山工業高等専門学校創立50周年記念事業として、和歌山県立美術館で開催された「和歌山高専50周年記念展」の様子が写っています。また、校舎の歴史や伝統についての記事も掲載されています。

日高新報 2014年1月1日

学生らオガタマノキを植樹

和歌山高専が創立50周年記念事業



オガタマノキを植樹する1年生

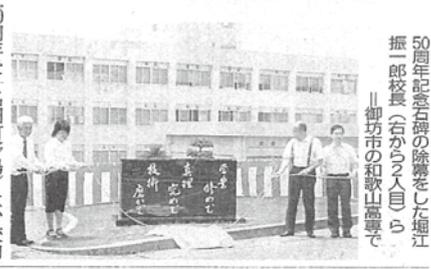
今年で創立50周年を迎える和歌山工業高等専門学校（和歌山）は、創立50周年記念事業の一環として、オガタマノキを校内に植樹した。植樹は、オガタマノキを校内に植樹した。植樹は、オガタマノキの成長とともに、校舎の歴史や伝統を継承する意義がある。

和歌山高専が創立50周年記念事業として、オガタマノキを校内に植樹した。植樹は、オガタマノキの成長とともに、校舎の歴史や伝統を継承する意義がある。

紀州新聞 2014年5月3日

校歌刻む石碑を設置

創立50周年記念 和歌山高専で除幕式



50周年記念石碑の除幕をした堀江 振一郎校長（右から二目）ら。御坊市の和歌山高専で、校歌の一節を刻んだ記念石碑を設置し、除幕式を行った。

同校は50年の経験をもとに、校歌の一節を刻んだ記念石碑を設置し、除幕式を行った。同校は50年の経験をもとに、校歌の一節を刻んだ記念石碑を設置し、除幕式を行った。

御坊市長「この三つは50年経っても高専の神髄や哲学を伝えてくれる大事な校歌だ」とあいさつした。

11月29日には県民文化会館（和歌山市）で記念式典や講演会を実施予定。

【山本芳博】

毎日新聞 2014年6月26日

— 教育研究関連 —

「ジャバラ」の健康食品売り出せ

和歌山高専と村 苦みandraげスイーツ開発



北山村特産のからし芋類を主成分とした健康食品「ジャバラ」を開発し、和歌山高専と共同で販売する。ジャバラは、からし芋の皮を乾燥させた粉末と、黒糖、きなこ、ココアパウダーなどを配合し、押し出し成形したお菓子。健康志向の高まる中、からし芋の皮を有効活用する狙いがある。

和歌山高専は、健康食品の開発に力を入れ、地域産品の活用に取り組んでいる。ジャバラは、高専の学生が中心となって開発された。開発には、北山村の農産物加工業者と連携している。

ジャバラは、健康志向の高まる中、からし芋の皮を有効活用する狙いがある。ジャバラは、からし芋の皮を乾燥させた粉末と、黒糖、きなこ、ココアパウダーなどを配合し、押し出し成形したお菓子。

産経新聞 2009年5月21日

地震の強さ、速さ一目で

和歌山高専生ら装置開発



和歌山高専生ら、地震の強さや速さを一目で把握できる装置を開発した。この装置は、地震発生時の震度や加速度をリアルタイムで表示し、震源地や震動の方向も一目でわかる。開発には、和歌山高専の学生が中心となり、地域の地震防災センターと連携している。

この装置は、地震発生時の震度や加速度をリアルタイムで表示し、震源地や震動の方向も一目でわかる。開発には、和歌山高専の学生が中心となり、地域の地震防災センターと連携している。

読売新聞 2011年1月22日

興地氏(和高専)の叙勲受章を祝う

物質物理分野で多大の貢献



山形県産大、小林和夫氏が叙勲された。興地氏は、物質物理分野で多大の貢献をされた。興地氏は、物質物理分野で多大の貢献をされた。興地氏は、物質物理分野で多大の貢献をされた。

興地氏は、物質物理分野で多大の貢献をされた。興地氏は、物質物理分野で多大の貢献をされた。興地氏は、物質物理分野で多大の貢献をされた。

紀州新聞 2011年6月21日

支えてくれた多くの人に感謝

鎮西さん和高専(国)卒業へ

障害を乗り越え迎えるうれしい日



鎮西さんは、和歌山高専(国)で卒業した。鎮西さんは、障害を乗り越え迎えるうれしい日を迎えた。鎮西さんは、和歌山高専(国)で卒業した。鎮西さんは、障害を乗り越え迎えるうれしい日を迎えた。

鎮西さんは、和歌山高専(国)で卒業した。鎮西さんは、障害を乗り越え迎えるうれしい日を迎えた。鎮西さんは、和歌山高専(国)で卒業した。鎮西さんは、障害を乗り越え迎えるうれしい日を迎えた。

紀州新聞 2013年2月20日

年度	アイデア対決ロボットコンテスト		全国高専プログラミングコンテスト	全国高専デザインコンペティション	英語プレゼンテーションコンテスト			
	地区大会	全国大会			スピーチの部		プレゼンテーションの部	
					地区予選	全国大会	地区予選	全国大会
S63		ベスト8						
H1								
2		ベスト8						
3		出場						
4		出場						
5	優勝	初戦						
6	ベスト4							
7								
8			3位					
9	優勝	ベスト8	2回戦					
10	初戦敗退							
11	ベスト4		予選					
12	優勝	2回戦	2回戦					
13	ベスト4	1回戦	2回戦					
14	2回戦							
15	初戦		2回戦					
16	準優勝	2回戦						
17	ベスト4							
18	2回戦	準優勝						
19	優勝	準優勝		優秀賞	出場			
20	準優勝	ベスト8			2位	出場		
21	優勝	ベスト8		優秀賞(全国2位)	4位			
22	優勝	準優勝		優秀賞(総合3位)	5位		3位特別賞	
23	ベスト4	ベスト8			5位			
24	優勝	2回戦			特別賞		2位	2位COCET会長賞
25	ベスト4	ベスト8			5位		優勝	出場



「ウメタロウ」ロボコン2006



デザコン2009



「紀州軍団」ロボコン2007



「ウメンライダー-W」ロボコン2010



英語プレコン2012

■全国高専大会での主な成績（個人・団体の部）

昭和42年	〈卓球〉片山・空地【優勝】			
昭和45年	〈陸上〉堀（三段跳）【3位】	〈軟式庭球〉団体【2位】	〈剣道〉団体【2位】	
昭和46年	〈剣道〉団体【3位】			
昭和47年	〈剣道〉小瀬【優勝】			
昭和48年	〈卓球〉久保【2位】、久保・上村【優勝】		〈剣道〉団体【優勝】、中本【2位】	
昭和49年	〈卓球〉団体【2位】、久保【2位】、久保・上村【優勝】			
昭和51年	〈ソフトテニス〉横谷・三角【2位】			
昭和52年	〈ソフトテニス〉横谷・広本【2位】			
昭和53年	〈ソフトテニス〉小林・新谷【優勝】			
昭和57年	〈弓道〉団体【優勝】			
昭和58年	〈ソフトテニス〉岡村・佐竹【優勝】	〈弓道〉団体【優勝】、小倉【優勝】		
昭和59年	〈剣道〉団体【優勝】	〈ソフトテニス〉白水・佐竹【2位】	〈弓道〉団体【2位】	
昭和60年	〈陸上〉藤田博（400）【3位】、藤田慎（800）【2位】		〈ソフトテニス〉大原・佐竹【優勝】、後藤・金倉【2位】	
昭和61年	〈陸上〉藤田慎（1500）【2位】、水本（5000）【3位】、玉置（100H）【3位】			
	〈ソフトテニス〉団体【優勝】、後藤・金倉【優勝】			
昭和62年	〈陸上〉藤田慎（1500）【2位】、水本（5000）【3位】		〈剣道〉団体【優勝】、前田【優勝】	
	〈ソフトテニス〉大原・金倉【優勝】	〈ハンドボール〉【3位】	〈弓道〉崎山【3位】	
昭和63年	〈硬式野球〉【2位】	〈ソフトテニス〉仲・金倉【優勝】		
平成元年	〈陸上〉藤田（800）【優勝】			
平成2年	〈陸上〉花井（円盤投）【優勝】			
平成4年	〈陸上〉上山（5000）【3位】	〈硬式野球〉【3位】		
平成7年	〈水泳〉川路（100自）【2位】、山内（800自）【2位】、青松（100背）【2位】			
平成8年	〈ソフトテニス〉団体【優勝】	〈柔道〉高垣（86kg級）【優勝】	〈硬式野球〉【優勝】	
平成9年	〈柔道〉高垣（86kg級）【優勝】	〈硬式野球〉【3位】	〈水泳〉中尾（100背）【2位】、中尾（100バ）【2位】	
平成10年	〈ソフトテニス〉谷口・林【3位】	〈水泳〉中尾（200バ）【3位】		
平成11年	〈ソフトテニス〉谷口・林【優勝】	〈柔道〉玉置（90kg超級）【3位】	〈硬式野球〉【2位】	
	〈水泳〉中尾（100自）【優勝】、中尾（800自）【2位】、上野（200背）【2位】			
平成12年	〈ソフトテニス〉団体【3位】、片山・小島【3位】			
	〈水泳〉中尾（100自）【優勝】※大会新、中尾（200自）【優勝】、上野（200背）【2位】			
平成15年	〈硬式野球〉【3位】	〈水泳〉藤井（100自）【2位】		
平成16年	〈水泳〉藤井（200自）【3位】、藤井（100バ）【2位】			
平成17年	〈陸上〉久瀬（砲丸投）【優勝】	〈水泳〉藤井（100バ）【3位】	〈テニス〉清水【3位】、清水・伊藤【3位】	
平成18年	〈陸上〉久瀬（砲丸投）【優勝】、久瀬（円盤投）【2位】	〈柔道〉杉本（60kg級）【2位】	〈水泳〉藤井（100バ）【2位】	
	〈テニス〉伊藤【3位】、伊藤・清水【3位】			
平成19年	〈陸上〉山本（砲丸投）【3位】	〈テニス〉伊藤・清水【3位】		
平成20年	〈陸上〉山本（砲丸投）【2位】	〈卓球〉塩路・塩崎【3位】		
平成23年	〈ソフトテニス〉男子団体【3位】			
平成24年	〈ソフトテニス〉畑・糸川【2位】	〈剣道〉山本【3位】	〈弓道〉団体【3位】、垣内【2位】	
	〈柔道〉男子団体【3位】、玉井（73kg級）【3位】			
平成25年	〈陸上〉宮本（砲丸投）【2位】	〈バレーボール〉【2位】	〈柔道〉藪田（60kg級）【2位】	〈剣道〉小出【3位】
平成26年	〈陸上〉宮本（砲丸投）【2位】	〈剣道〉団体【3位】		

近畿地区高専大会での主な成績（個人の部 優勝）

昭和42年	〈陸上〉田浦（1500・5000）、北村（砲丸投） 〈卓球〉空地、片山・空地	〈柔道〉宇口（中量級）	〈ソフトテニス〉角野・尾崎 〈剣道〉幡川
昭和43年	〈陸上〉北村（砲丸投、円盤投）	〈卓球〉片山・空地	〈剣道〉幡川
昭和44年	〈陸上〉堀（走幅跳）、北村（砲丸投、円盤投）		〈柔道〉宇口（重量級）
昭和45年	〈陸上〉神保（800、走高跳）、堀（走幅跳、三段跳）		〈剣道〉福井
昭和46年	〈柔道〉畑（重量級）	〈剣道〉福井	
昭和47年	〈陸上〉森（三段跳、砲丸投）	〈柔道〉川端（中量級）、池田（重量級）	〈剣道〉中本
昭和48年	〈陸上〉森（砲丸投）	〈卓球〉久保、久保・上村	〈柔道〉深井（重量級）
昭和49年	〈陸上〉森（砲丸投）、神保（円盤投）	〈卓球〉久保、久保・上村	〈柔道〉深井（重量級）
昭和50年	〈陸上〉神保（砲丸投）	〈剣道〉光山	
昭和51年	〈陸上〉堀（走高跳） 〈柔道〉井上（軽量級）、深井（重量級）	〈ソフトテニス〉横谷・三角	〈卓球〉上村
昭和52年	〈陸上〉堀（走高跳）	〈ソフトテニス〉小林・下平	〈卓球〉喜多
昭和53年	〈ソフトテニス〉小林・新谷	〈卓球〉名手・浅間	
昭和54年	〈陸上〉野田（1500）、田辺（5000）	〈ソフトテニス〉原・有本	〈卓球〉山口、喜多・山口
昭和55年	〈陸上〉野田（800）、上田（円盤投）	〈バドミントン〉吉村	〈水泳〉中松（100平）
昭和56年	〈陸上〉北山（円盤投）		
昭和57年	〈陸上〉北山（円盤投）		
昭和58年	〈陸上〉塩崎（砲丸投、円盤投）、中村（やり投）		〈剣道〉原田
昭和59年	〈陸上〉藤田（200）、甲斐（400）、玉置（100H）、江川（円盤投） 〈水泳〉鎮西（100自・200自）		〈剣道〉前田
昭和60年	〈陸上〉西川（100）、藤田（400）、玉置（100H）、福田（走幅跳）、江川（やり投）、4×100リレー 〈柔道〉桑原（軽量級）	〈弓道〉小倉	〈ソフトテニス〉大原・佐竹
昭和61年	〈陸上〉藤田（1500）、水本（5000）、玉置（100H）、福田（走幅跳）、中野（やり投）、4×100リレー、4×400リレー 〈剣道〉小谷	〈弓道〉尾崎	
昭和62年	〈陸上〉藤田（800・1500）、福田（走幅跳）、江川（円盤投） 〈剣道〉前田	〈水泳〉田中（100背、200背）	〈ソフトテニス〉大原・金倉 〈弓道〉崎山
昭和63年	〈陸上〉藤田（800・1500）、花井（走幅跳）、4×400リレー 〈剣道〉狐坂		〈ソフトテニス〉仲・金倉

■近畿地区高専大会での主な成績（個人の部 優勝）

平成元年	〈陸上〉藤田（800・1500）、上山（5000）、4×400リレー	〈剣道〉中坊
	〈水泳〉毛利（200平）	〈弓道〉中野
平成 2年	〈陸上〉上山（5000）、花井（砲丸投、円盤投）	
平成 3年	〈陸上〉上山（5000）、稲垣（円盤投）	
平成 4年	〈陸上〉上山（5000）	〈ソフトテニス〉南・井村
平成 5年	〈陸上〉中本（400）、上山（5000）	〈少林寺拳法〉正殿・藤田
平成 6年	〈少林寺拳法〉永野・西尾（有段）、宮本・市田（段外）	〈水泳〉山内（800自）
	〈陸上〉中本（400）、小川（砲丸投）	〈柔道〉高垣（軽重量級）
平成 7年	〈少林寺拳法〉松山・川口（有段）、市田・宮本（段外）	〈卓球〉西岡・吉本、吉本
	〈陸上〉中本（400）、山崎（110H）、小川（砲丸投）	〈柔道〉高垣（86kg級）
	〈水泳〉川路（50自）、川路（100自）、植山（100自）、青松（50背）、青松（100背）	
平成 8年	〈少林寺拳法〉松山・川口（有段）、金野・吉村（段外）	〈卓球〉西岡・吉本
	〈陸上〉中村（400）、山崎（110H）、西（走高跳）、西（走幅跳）、小篠（円盤投）、青木（槍投）、森下（砲丸投）	〈水泳〉山内（200自）、植山（100自）
	〈柔道〉高垣（86kg級）、川端（86kg超級）	〈剣道〉岡
平成 9年	〈少林寺拳法〉船渡・栗山（組演武段外）、松山・永野・西尾（組演武有段）、西尾（単独演武有段）、松山・友藤（乱捕り）	
	〈陸上〉江川（三段跳）、青木（槍投）、江戸（800）、小川（砲丸投）	〈テニス〉石田・石本
	〈卓球〉吉本	〈柔道〉高垣（86kg級）、玉置（86kg超級）
	〈水泳〉中尾（100背）、中尾（100バ）、植山（100自）	〈剣道〉前馬
平成 10年	〈陸上〉宮本（200）、伊丹（800）、真田（1500）、南（砲丸投）	〈ソフトテニス〉谷口・林
	〈水泳〉中尾（100バ）、中尾（200バ）、中尾（50自）	〈テニス〉滝元
	〈少林寺拳法〉久野・中野（組演武有段）、友藤（単独演武有段）、友藤（乱捕り）	
平成 11年	〈陸上〉宮本（200）、真田（1500）、片岡（槍投）、森下（100）	〈ソフトテニス〉谷口・林
	〈水泳〉中尾（100自）、中尾（800自）、上野（100背）、中尾（50自）	
平成 12年	〈陸上〉渡口（走高跳）、山根（槍投）、湯川（砲丸投）	〈ソフトテニス〉片山・小島
平成 13年	〈水泳〉中尾（200自）、上野（200背）	〈少林寺拳法〉木下・一田（組演武段外）、栗山（単独演武有段）、栗山（乱捕り）
平成 14年	〈陸上〉山根（槍投）、湯川（砲丸投）	〈空手道〉森川（組手）
平成 15年	〈空手〉高橋（型個人）	〈少林寺拳法〉納（組演武段外）、三枝・平岡（組演武有段）、平岡（単独演武有段）
平成 16年	〈陸上〉原（1500）、山下（槍投）	〈水泳〉藤井（100自）、藤井（100バ）
	〈テニス〉伊藤	〈バドミントン〉越野・田中
平成 17年	〈空手〉高橋（形）、赤岩（組手）	〈水泳〉藤井（200自）、藤井（100バ）
	〈陸上〉田中（5000）、角村（走幅跳）、久瀬（砲丸投）、天倉（800）	〈水泳〉藤井（200自）、藤井（100バ）
	〈テニス〉伊藤、清水・伊藤	〈卓球〉島本・坂本
平成 18年	〈弓道〉西本（射技優秀賞）	〈空手道〉高橋（男女混合形）
平成 19年	〈陸上〉田和（200）、久瀬（砲丸投）、久瀬（円盤投）、原田（800）、森口（砲丸投）	
	〈柔道〉杉本（60kg級）	〈テニス〉伊藤、伊藤・清水
平成 20年	〈陸上〉山本（砲丸投）	〈水泳〉藤井（100バ）
平成 21年	〈陸上〉山本（砲丸投）	〈卓球〉平山、塩路・平山
平成 22年	〈陸上〉山本（砲丸投）	〈テニス〉伊藤、伊藤・清水
	〈卓球〉平山、塩路・平山	〈卓球〉小谷、塩路・塩崎
平成 23年	〈水泳〉魚海（50バ）	〈卓球〉塩崎、平山・小谷
	〈陸上〉宮本（砲丸投）	〈柔道〉寺嶋（60kg級）
平成 24年	〈テニス〉松本、谷川・井上	〈テニス〉関・花田、松本、松本・窪田
	〈陸上〉宮本（砲丸投）	〈ソフトテニス〉白樫・野村
平成 25年	〈剣道〉山田	〈卓球〉平山、平山・小谷
	〈陸上〉山澤（円盤投）、宮本（砲丸投）	〈ソフトテニス〉畑・糸川
平成 26年	〈テニス〉井上、谷川・井上	〈卓球〉殿水、小谷、小谷・前田
	〈陸上〉宮本（砲丸投）	〈テニス〉久保田・谷川
	〈バドミントン〉柏木・坂本、柏木	〈バドミントン〉柏木・坂本
		〈弓道〉山本（個人）

近畿地区高専大会での主な成績（団体の部）

昭和42年	〈陸上〉3位 〈剣道〉優勝	〈バレーボール〉2位	〈バスケットボール〉優勝	〈ソフトテニス〉優勝	〈柔道〉優勝
昭和43年	〈バレーボール〉優勝 〈サッカー〉2位	〈バスケットボール〉2位 〈硬式野球〉3位	〈ソフトテニス〉2位 〈ラグビー〉3位	〈柔道〉優勝	〈剣道〉優勝
昭和44年	〈バレーボール〉3位 〈剣道〉2位	〈バスケットボール〉3位 〈ハンドボール〉3位	〈ソフトテニス〉3位	〈卓球〉2位	〈柔道〉優勝
昭和45年	〈バレーボール〉3位 〈剣道〉優勝	〈バスケットボール〉優勝 〈ハンドボール〉2位	〈ソフトテニス〉優勝 〈ラグビー〉3位	〈卓球〉優勝	〈柔道〉優勝
昭和46年	〈バスケットボール〉3位 〈ハンドボール〉優勝	〈卓球〉2位 〈硬式野球〉3位	〈柔道〉優勝 〈ラグビー〉3位	〈剣道〉優勝	〈サッカー〉2位
昭和47年	〈陸上〉2位 〈剣道〉優勝	〈バレーボール〉2位 〈硬式野球〉2位	〈バスケットボール〉優勝	〈卓球〉2位	〈柔道〉2位
昭和48年	〈陸上〉3位	〈バスケットボール〉優勝	〈卓球〉優勝	〈柔道〉優勝	〈剣道〉優勝
昭和49年	〈陸上〉3位 〈剣道〉2位	〈バレーボール〉3位 〈硬式野球〉2位	〈バスケットボール〉3位 〈ラグビー〉3位	〈卓球〉優勝	〈柔道〉優勝
昭和50年	〈陸上〉3位 〈ハンドボール〉2位	〈ソフトテニス〉3位 〈硬式野球〉2位	〈卓球〉優勝 〈ラグビー〉優勝	〈柔道〉優勝	〈剣道〉3位
昭和51年	〈陸上〉3位 〈剣道〉3位	〈バレーボール〉3位 〈ラグビー〉3位	〈ソフトテニス〉優勝	〈卓球〉2位	〈柔道〉優勝
昭和52年	〈バレーボール〉3位 〈硬式野球〉3位	〈ソフトテニス〉2位	〈卓球〉優勝	〈柔道〉3位	〈ハンドボール〉2位
昭和53年	〈バスケットボール〉2位 〈ハンドボール〉3位	〈ソフトテニス〉優勝 〈硬式野球〉2位	〈卓球〉2位 〈バドミントン〉3位	〈柔道〉3位	〈剣道〉優勝
昭和54年	〈陸上〉3位 〈剣道〉優勝	〈バスケットボール〉2位 〈ハンドボール〉優勝	〈ソフトテニス〉優勝 〈硬式野球〉3位	〈卓球〉優勝 〈バドミントン〉2位	〈柔道〉優勝
昭和55年	〈卓球〉3位	〈剣道〉2位	〈バドミントン〉3位		
昭和56年	〈陸上〉3位	〈卓球〉2位			
昭和57年	〈陸上〉3位	〈硬式野球〉3位	〈バドミントン〉2位		
昭和58年	〈陸上〉2位 〈硬式テニス〉2位	〈ソフトテニス〉2位	〈剣道〉優勝	〈サッカー〉3位	〈ハンドボール〉3位
昭和59年	〈陸上〉2位	〈ソフトテニス〉2位			
昭和60年	〈陸上〉優勝 〈硬式テニス〉3位	〈ソフトテニス〉優勝 〈弓道〉優勝	〈剣道〉2位	〈サッカー〉3位	〈硬式野球〉優勝
昭和61年	〈陸上〉優勝 〈バドミントン〉3位	〈ソフトテニス〉優勝 〈弓道〉2位	〈剣道〉優勝	〈サッカー〉3位	〈硬式野球〉2位
昭和62年	〈陸上〉優勝 〈ハンドボール〉2位	〈ソフトテニス〉優勝 〈硬式野球〉3位	〈卓球〉3位 〈弓道〉優勝	〈柔道〉3位	〈剣道〉優勝
昭和63年	〈陸上〉2位 〈硬式野球〉優勝	〈バスケットボール〉3位 〈弓道〉2位	〈ソフトテニス〉3位	〈剣道〉優勝	〈ハンドボール〉優勝

■近畿地区高専大会での主な成績（団体の部）

平成元年	〈陸上〉3位 〈弓道〉優勝	〈柔道〉3位	〈剣道〉優勝	〈ハンドボール〉3位	〈硬式野球〉3位
平成 2年	〈陸上〉3位 〈硬式野球〉優勝	〈ソフトテニス〉2位	〈卓球〉2位	〈剣道〉2位	〈ハンドボール〉3位
平成 3年	〈陸上〉3位	〈剣道〉3位	〈硬式野球〉優勝	〈空手道〉2位	
平成 4年	〈バスケットボール〉3位	〈卓球〉2位	〈硬式野球〉優勝	〈バドミントン〉3位	〈テニス〉3位
平成 5年	〈柔道〉3位	〈剣道〉3位	〈硬式野球〉3位	〈バドミントン〉3位	〈テニス〉3位
平成 6年	〈少林寺拳法〉最優秀賞 〈剣道〉優勝	〈卓球〉3位 〈バドミントン〉2位	〈水泳〉3位	〈ソフトテニス〉3位	〈柔道〉2位
平成 7年	〈少林寺拳法〉最優秀賞 〈水泳〉3位	〈ソフトテニス〉2位	〈柔道〉2位	〈剣道〉2位	〈バドミントン〉3位
平成 8年	〈少林寺拳法〉最優秀賞 〈硬式野球〉優勝	〈陸上〉2位 〈ハンドボール〉3位	〈ソフトテニス〉2位	〈柔道〉2位	〈剣道〉3位
平成 9年	〈少林寺拳法〉最優秀賞 〈卓球〉3位 〈バドミントン〉2位	〈空手道〉2位 〈柔道〉2位	〈陸上〉3位 〈剣道〉3位	〈バレーボール〉3位 〈硬式野球〉優勝	〈ソフトテニス〉2位 〈ハンドボール〉2位
平成 10年	〈陸上〉優勝 〈剣道〉2位	〈バレーボール〉3位 〈硬式野球〉優勝	〈ソフトテニス〉2位 〈ハンドボール〉2位	〈卓球〉3位 〈少林寺拳法〉優秀賞	〈柔道〉3位
平成 11年	〈陸上〉優勝 〈バドミントン〉2位	〈ソフトテニス〉2位 〈テニス〉3位	〈剣道〉優勝 〈弓道〉3位	〈硬式野球〉優勝 〈少林寺拳法〉優良賞	〈ハンドボール〉優勝 〈ラグビー〉3位
平成 12年	〈陸上〉3位 〈ハンドボール〉3位	〈バスケットボール〉2位 〈水泳〉3位	〈ソフトテニス〉優勝 〈空手道〉2位	〈卓球〉3位 〈少林寺拳法〉最優秀校	〈剣道〉2位
平成 13年	〈バスケットボール〉優勝	〈硬式野球〉優勝	〈バドミントン〉2位	〈空手道〉2位（組手）	〈少林寺拳法〉2位
平成 14年	〈バスケットボール〉2位 〈少林寺拳法〉優秀賞	〈剣道〉3位	〈硬式野球〉優勝	〈テニス〉3位	〈空手道〉優勝
平成 15年	〈バスケットボール〉2位	〈卓球〉3位	〈柔道〉3位	〈硬式野球〉優勝	〈空手道〉2位
平成 16年	〈ラグビー〉3位 〈硬式野球〉優勝	〈柔道〉3位 〈空手道〉2位	〈剣道〉優勝	〈卓球〉3位	〈サッカー〉3位
平成 17年	〈空手道〉2位				
平成 18年	〈ハンドボール〉3位	〈剣道〉優勝			
平成 20年	〈卓球〉2位				
平成 23年	〈ソフトテニス〉2位	〈剣道〉優勝			
平成 24年	〈バレーボール〉優勝 〈弓道〉3位	〈ソフトテニス〉優勝	〈卓球〉優勝	〈剣道〉優勝	〈柔道〉2位
平成 25年	〈バレーボール〉優勝	〈剣道〉優勝			
平成 26年	〈バレーボール〉優勝	〈剣道〉優勝	〈硬式野球〉優勝		

50周年記念事業

50年の経験を
明日への希望に

平成二十六年六月吉日

和歌山工業高等専門学校創立50周年記念事業

実行委員会幹事長

なかもと じゅんじ

中本 純次

和歌山工業高等専門学校は、他の11高専とともに昭和39年（1964年）4月1日に3期校として設立され、4月20日開校式と第1回入学式が仮校舎で挙行された。ちなみに、同年10月10日には第18回夏季オリンピックが東京で開催された。成長著しい日本の象徴でもあった。そして、10年後の昭和49年10月24日に創立10周年記念式典ならびに記念講演会が本校体育館において開催された。記念講演会講師には、京都大学名誉教授北村二郎先生をお迎えした。なお、草創期の詳細については、総ページ数59ページの創立十周年記念誌にまとめられている。

それから15年の時を経て、平成元年11月1日創立25周年記念式典ならびに記念講演会が御坊市民文化会館で挙行された。ノーベル化学賞を受賞された福井謙一先生を講師にお迎えし、格調高い講演を拝聴することができたことはまさに記念すべき四半世紀の節目となった。四半世紀のまとめは、本編167ページ、資料集を含めて303ページの二十五周年史として刊行された。

さらに時を経ること25年、今般、創立50周年記念事業を執り行うこととなり、堀江振一郎第九代校長を実行委員長として準備を進め、平成26年11月29日創立50周年記念式典ならびに記念講演会を和歌山県民文化会館で挙行する運びとなった。なお、記念式典の後、隣接するホテルアバローム紀の国で記念祝賀会を開催するとともに、出席者には、完成したこの五十周年記念誌などをお持ち帰り頂く計画である。

記念講演会講師として、女子体操界で大活躍されるとともに、2020年に開催される東京オリンピック招致でも重責を果たされた田中理恵氏および元ホンダF1チーム総監督桜井淑敏氏のお二人をお招きしている。また、記念講演は、現役学生はもとより卒業生、保護者ならびに一般市民にも聴講して頂けるようご案内しており、当日は多くの方々にご

来場頂けるものと期待している。

私事であるが、昭和39年4月設立の機械工学科、電気工学科、工業化学科の3学科に遅れること5年、昭和44年に増設された土木工学科の1期生として昭和49年3月に卒業し、翌月の4月1日に新任教官として土木工学科助手に採用されたことから、同年10月の創立10周年記念式典にも新任教官として立ち会うことができたとともに、土木工学科1期生として「創立10年に寄せて」に他科の1期生の方々とともに寄稿させて頂いた。当然のことながら25周年記念事業にも、またこの50周年記念事業には幹事長として参画させて頂いている。十周年、二十五周年そして五十周年と3つ全ての記念事業に携われることは無上の喜びであり、これが最後のご奉公と全身全霊を捧げて取り組ませて頂いている。

以下に、50周年記念事業の概要を記して、本事業の趣旨にご賛同頂いた皆様方に経過をご報告するとともに、さらなる50年に向けた足がかりとなることを期待したい。

平成22年4月から50周年準備委員が配置されたが、本格的に準備活動が開始されたのは平成24年に入ってからである。兎に角、皆様のご理解とご協力があって初めてこの事業を成功に導けるものと考え、後援会や同窓会にご支援をお願いした。後援会や同窓会からも準備委員会の早期設置要請があり、平成24年10月30日（火）東京で開催された高専制度創設50周年記念式典出席を契機に話がまとまり、平成24年11月10日（土）第1回準備委員会を開催する運びとなった。

50周年記念事業は学校、後援会、同窓会、学生の4者が一致団結して行うことにこそ意義があることから、少々大所帯ではあるが、後援会8名（各支部1名）、同窓会8名（各学科卒2名）、学校側8名、学生委員2名の合計26名で準備委員会をスタートした。また、12月22日（土）第2回準備委員会で実行委員会の設立（格上げ）が決まり、平成25年2月9日（土）に第1回実行委員会を開催し、実施に向けた本格的な議論がスター

トした。堀江校長を実行委員長に、私も幹事長の大役を頂くこととなった。以後、回を重ね、第3回実行委員会で「紀らめく和高専—50年の経験を明日への希望に—」のキャッチフレーズが決定した。これは1つの大きなハードルであった。第2回委員会までにはアンケート調査を基に各委員がアイデアを出し、それをベースに議論したものの、委員の心を掴むキャッチフレーズが出ず難しさを痛感することとなった。これまでの50年を礎・糧に新たな50年に向かう決意・思いをフレーズにするという方向性は決まったものの、語句を決めきれず回を重ねることとなった。

委員から、「きらめく」という言葉が出て、皆その言葉に惹かれ賛同するとともに「き」に「紀」という漢字を充てる意見が続き、「紀らめく和高専」が決定した。副題として、「—50年の経験を明日への希望に—」も決まり、50周年記念事業のキャッチフレーズの誕生となった。

紀らめく和高専

—50年の経験を明日への希望に—

なお、本校創設当初には、学生および教員全員が円形の名札を胸に付けていたが、機械工学科、電気工学科、工業化学科、土木工学科の学科それぞれのイメージカラーがあったこと、また地域に根ざした本校をアピールするためにも地域環境を代表するカラーを取り入れ、まさに「煌めく」和歌山高専をイメージした配色とした。

幹事長としての大きな役目の1つは寄付金集めであるが、各学科から重鎮の先生方に募金係に参画して頂いたこと、後援会、同窓会、企業等など多くの団体、個人の方々に広く賛同を得ることができ、既に目標額を達成することができている。これも本校がこれまで地道に続けてきた卒業生支援、地域連携のお陰であり、今後とも積極的に展開していく大切さを痛感している。

第2回実行委員会では、記念式典係、記念講演会係、祝賀会係、記録報道係、記念誌係（動画班）、

募金係の各WGを設けて、記念事業の成功に向けて、具体的に検討を始めて頂くこととした。

これまで9回に及ぶ実行委員会を開催した。

テクノセンター外壁に「紀らめく和高専—50年の経験を明日への希望に—」の垂れ幕を設置したのを皮切りに、イメージキャラクターの募集、モニュメント企画募集、クラス企画募集等を行っている。キャラクターについては、学生から提案のあった「未来ちゃん(環境都市工学科5年 谷口羽留香さん)」と「猫ロボ(物質工学科3年 八木健人君)」が採択され、広報活動に既に活用されている。



未来ちゃんと猫ロボ

平成26年4月には、記念事業をフットワークよく進めていくために、行動力のある若い先生方に各学科から1名ずつ参画して貰って、推進班を設立した。これは、記念石碑およびモニュメントの企画は、実行委員会マターとし、それ以外の企画は推進班を中心に学校側で進めることをご了解頂いた実行委員会の英断の賜である。

5月1日、雲1つなく晴れ渡った青空の下、「本日植えるオガタマノキは、平成23年に田辺市で全国植樹祭が催された折り、天皇陛下が種をお手撒きになったものが、3年経って苗に育ったものである。樹齢500年、1000年の古木があるというオガタマノキにあやかり、50年が100年に、そして、2世紀目に私たちの和歌山高専も伸び続けるシンボルとして、大切にしたいと思う。大きく木が成長することで、平成26年にあった50周年記念事業を皆が思い出し、いつも防災避難の目印としてそびえ立ち、ユネスコ世界遺産に向かって学校前を歩く人たちからも、美しい白い花を愛でてもらえるよう祈念する。」との堀江校長の挨拶に続いて、鉋

入れを行った。ちなみに、学内では既に「オガタマの丘」の呼称を使って、避難訓練時の呼びかけ等を行っている。



植樹祭(H.26.5.1)

6月16日(月)には、梅雨の時期にもかかわらず好天に恵まれ、多くの学生、教職員の参列を得て、記念石碑の除幕式を盛大に挙行了。石碑に刻す文言は、学生および教職員へのアンケート結果を実行委員会で審議し、山側面は校歌から「学び修めむ 真理究めむ 技術磨かむ」とし、海側面には、キャッチフレーズの副題「50年の経験を明日への希望に」とすることを決定した。なお、揮毫は地元出身の書家弓場和彦氏(山側)ならびに実行委員会委員であり、書家である田中典子氏(海側)にお願いすることとした。9日2日にこれらの行事を解説する銘板を設置した。



除幕式(H.26.6.16)

記念誌については、「読み物としての五十周年記念誌」を目指して記念誌編纂が行われているところ

であるが、50周年記念事業の概要を記すべく、十周年記念誌ならびに二十五周年記念誌のページを繰りながら、懐かしさと、お世話になった先生方のことを思い出し、今はお会いできない悲しさに何とも言えない寂しさを感じている。一方で、両記念誌はそれぞれによくまとめられており、本校が歩んできた足跡をたどるための貴重な資料ともなっていることに改めて記念誌の重要性を感じている。

物質工学科楠部真崇准教授には急遽、記念誌編纂委員長の大役を引き受けて貰う結果となったが、編纂委員各位の協力を得て能くその重責を全うして頂いたこと大変有り難く感謝するとともに、本校の将来を担ってくれる新たな人財がまた1人育ったと喜んでいる。若い方々に重要な仕事を任せることの意義を痛感することとなったのは嬉しく、50周年記念事業を通しての収穫の1つといえる。今後とも機会あるごとに若い教員を積極的に登用されることを期待したい。

御坊市内には、日高および紀央館の2つの高等学校があるが、日高高校の創立100周年と本校の50周年が同じ年に重なることから、両校が連携した「御坊150年プロジェクト」として、教育的、文化的価値の創生と向上を目指すことを堀江本校校長、上田日高高校校長が合意し、本校学生、日高高校生徒および担当教員間レベルで実施に向けた取り組みを進め、第一弾として9月6日(土)に「御坊150年プロジェクト-日高&和歌山記念祭-」を本校で開催した。

記念式典の写真、本記念誌や動画などの本記念事業の概要をHPに掲載するとともに、各種イベントの実施についても随時HPに掲載するので、今後も本校HPをご覧頂ければ幸いです。

末筆ながら、創立50周年記念事業を執り行うにあたり、ご協力・ご支援を賜りました後援会、同窓会ならびに教職員の皆様および関係各位に深甚なる感謝の意を表します。

今後は和歌山高専をさらに発展させるべく、教職員一同力を合わせてより一層の努力を重ねていくことをお誓い申し上げます。

編集後記



和歌山県を代表する偉人といえば、華岡青洲（1760-1835年：全身麻酔薬「通仙散」を発明）、濱口梧陵（1820-1885年：「稲むらの火」廣村堤防を建設）、山葉寅楠（1851-1916年：ヤマハ株式会社創業者）、そして松下幸之助（1894-1989年：パナソニック創業者）らの名前を思い起こす。この偉大な先人達は「ものづくり」に携わり、医学界や産業界に大胆な発想と緻密な配慮によって生まれる新しい風を吹かせた。特筆すべきは、彼らが単に「ものづくり」に貢献したのみならず、若人に教育の機会を設けた点である。華岡青洲の「春林軒」、濱口梧陵の「耐久舎」、山葉寅楠の「日本音楽教育の礎」、

松下幸之助の「松下政経塾」がそれにあたる。「物をつくる前に人をつくる」とは、あまりにも有名な松下幸之助の名言であるが、本誌編集を通じて、我々はまさにこの教育理念を展開すべきであることに気づかされる。

和歌山高専50年の歴史を振り返る中、多くの卒業生の活躍に触れ、誇りを感じる瞬間が幾度もあった。同時に、今後の更なる飛躍への重責も実感することとなった。本誌の編集にあたり、多くの卒業生や教職員、ならびに本記念誌編集担当者にご尽力いただいたことに敬意と感謝を表しつつ、次の50年に向けて、ともに前へと歩みを進めたい。

国立高等専門学校機構和歌山工業高等専門学校
創立50周年記念誌編纂委員長

楠部 真崇

編 集 創立 50 周年記念誌編纂委員会
委 員 長 楠部真崇
編集担当 赤崎雄一、秋山 聡、芥河 晋、岡本和也、檜原恵藏、
窪田 仁、小西香名、小村英子、境 美穂、坂本義孝、
佐久間敏幸、謝 孟春、孝森洋介、竹邊琢己、津田尚明、
鶴巻峰夫、土井正光、鳥居洋子、吉田芳弘、和田茂俊
(五十音順)

紀らめく和高専 — 50年の経験を明日への希望に —
和歌山工業高等専門学校創立50周年記念誌

印刷日 平成 26 年 11 月 13 日
発行日 平成 26 年 11 月 29 日
発 行 独立行政法人国立高等専門学校機構
和歌山工業高等専門学校
〒 644-0023 和歌山県御坊市名田町野島 77
電話 0738-29-2301 (代表)
印 刷 株式会社 協 和
〒 642-0017 和歌山県海南市南赤坂 5-3
電話 073-483-5211 (代表)



紀らめく和高専

—50年の経験と明日への希望に—